

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Research on Vocabulary and Pedagogical Applications 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001837

日本語教育指導参考書13

語彙の研究と教育(下)

国立国語研究所

刊行のことば

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている方々の指導上の参考に供するために刊行するものです。

今回は、その第13編として「語彙の研究と教育(下)」を刊行します。本書は、同志社大学教授玉村文郎氏に執筆をお願いしたものです。同氏の御尽力に感謝の意を表するとともに、本書が教授上、研究上の資料として適切に活用されることを期待します。

昭和60年8月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

7 語の構成と造語法	1
7-1 語のなりたち	1
7-2 語構成と造語法	2
7-3 語の構成成分(単位)	2
7-4 語の構成	8
練習問題	11
7-5 複合語とその成分	12
7-6 造語に伴う変音現象	15
(1) 連濁	15
(2) 転音	15
(3) 音便	16
(4) 音韻添加	16
(5) 音韻脱落	16
(6) 音韻融合	17
(7) 連声	17
(8) 半濁音化	17
(9) その他	17
練習問題	17
7-7 統語構造のいろいろ	20
(1) $N \Rightarrow V$ 構造	21
(2) $V_1 \Rightarrow V_2$ 構造	28
(3) $NA \Rightarrow V$ 構造	29
(4) $A \Rightarrow V$ 構造	29
(5) $AD \Rightarrow V$ 構造	30
(6) $N \Rightarrow NA$ 構造	30
(7) $N \Rightarrow A$ 構造	31

(8)	$V \Rightarrow NA$ 構造	31
(9)	$V \Rightarrow A$ 構造	31
(10)	$NA_1 \Rightarrow NA_2$ 構造	31
(11)	$NA \Rightarrow A$ 構造	31
(12)	$NA \Rightarrow N$ 構造	32
(13)	$A_1 \Rightarrow A_2$ 構造	32
(14)	$V \Rightarrow N$ 構造	32
(15)	$AD_1 \Rightarrow AD_2$ 構造	32
(16)	$AD \Rightarrow N$ 構造	33
(17)	$AD \Rightarrow A$ 構造	33
(18)	$A \Rightarrow N$ 構造	33
(19)	$N_1 \Rightarrow N_2$ 構造	33
7—8	並列構造のいろいろ	36
(1)	類義成分を並列させたもの	36
(2)	対義的な成分を並列させたもの	37
7—9	畳語（重複構造）	38
(1)	名詞	39
(2)	動詞	41
(3)	形容詞	44
(4)	副詞	44
(5)	感動詞	45
(6)	その他	45
7—10	派生語	45
(1)	接頭辞	46
(2)	接尾辞	49
7—11	品詞の転成	57
(1)	語形無変更	58
(2)	語形変更	58

7—12	造語法	60
(1)	語根創造	60
(2)	既存の語彙資料の利用	61
a	合成	61
b	混淆	66
c	借用	67
d	縮約	69
e	文字による造語	73
f	逆成	75
	練習問題	76
8	語の意味	79
8—1	語義と指示対象	79
8—2	意義素・意味特徴	82
8—3	範列的關係と統合的關係	83
8—4	反義・類義・対義・偏義	84
8—5	原義・転義	88
8—6	単義・多義	89
8—7	いろいろな意味	90
(1)	具体的な意味	90
(2)	文法的な意味	91
8—8	複合語の意味	93
8—9	語感	97
(1)	指示対象に由来する語感	98
(2)	語の素性や使用法に由来する語感	98
(3)	語形などに由来する語感	99
8—10	語彙の体系と連想	100
8—11	語義の変化	108
(1)	具象→抽象	110

(2) 空間→時間	110
(3) 空間→血縁・心理	110
(4) 感覚の移行	111
(5) 一般化	111
(6) 特殊化	111
(7) 価値の上昇	112
(8) 価値の下落	112
練習問題	114
9 語の表記	122
9—1 表記法と語意識	122
9—2 没正書法性	122
9—3 漢字正字意識と好字志向	123
9—4 漢字と仮名の機能分担	125
(1) 片仮名語	125
(2) 漢字語	126
(3) ローマ字語	126
9—5 書き分け	126
9—6 表記と語形	129
(1) 同表記語	129
(2) 類義異表記	130
(3) 同義異表記	130
9—7 文字列	131
練習問題	134
10 語彙資料—辞書と語彙表—	136
10—1 辞書	136
(1) 辞書の現実	137
(2) 望ましい辞書の要件	140
(3) 主な辞書	142

10-2	語彙表など	143
	練習問題	155
11	対照語彙論	157
11-1	個々の単語の対照	157
11-2	語彙体系の対照	158
11-3	語彙構造の対照	158
11-4	造語法の対照	159
	練習問題	161
12	語彙教育—内容と方法—	163
12-1	語彙教育の内容	163
	(1) 初級レベル	164
	(2) 中級レベル	164
	(3) 上級レベル	165
12-2	語彙教育の方法	165
	練習問題	169
	総合問題	172
	参考文献	181

7 語の構成と造語法

7-1 語のなりたち

「ひとさしゆび（人指し指）」という語が「ひと」と「さし」と「ゆび」という3つの部分から出来ていることは、日本人なら6歳の子どもにもわかるぐらい簡単で明瞭なことである。また、「くやしき」が「くやしい」と「き」という成分から出来ていることも、10歳の児童に十分理解できるであろう。しかし、「えせざいわい」や「ぼうどんれんず」のような珍しい語を耳にしたときは、すぐには成分に分けることがむずかしいはずである。子どもならずとも見当がつけにくい。「えせざ」＋「いわい」、「坊」＋「鈍」＋「連」＋「図」のような分け方をする人があるかもしれない。前者は「えせ＋幸い（似而非幸い）」で、後者は「防曇レンズ（曇り止め加工を施したレンズ）」であるが、成人であっても「えせ」という語を知らないこともあり、耳で聞く（仮名書き例を見る）ことがないため、とっさにそれぞれの意味を理解することはむずかしい。

語の中には、「て（手）」「きた（北）」「はな（花）」「みる（見る）」のように、短く、基本的なものとして、日常よく用いられ、誰にも意味がよくわかっているものもある。これらは通常、成分も単一で、これよりも小さい部分に分解することはできない。しかし、先に挙げた「人指し指」のような例は、2個以上の成分から出来ていて、意味の面でも複雑になるものが多い。そして、大体において、多くの成分から出来ているものほど、辞書に掲出されることも少なくなる。上巻「5-1 ことばの海」においても触れたが、単語の数が、必要に応じていくらかでも増えていくのは、単純な構造の基本的な語をいくつか組み合わせて、多種多様な語の組み合わせができるからである。また、辞書に頼らないで人間が多くの語を理解することができるのは、言語の学習過程において、無意識裡に、語の組み合わせのルールに関する知識を獲得していくからである。本章では、このような語の成り立ちやつくりにつ

いて詳しく見ていくことにしよう。

7-2 語構成と造語法

すでに造られて使用されている（あるいは、かつて使用された）語がより小さい部分に分けられる場合に、それらの成分の性質を考え、成分と語全体の関係を考えることができる。このような語とその成分の関係、語のなりたちを、一般に〈語構成〉という。「人指し指」に例をとるなら、この語は、名詞成分「人」＋動詞成分「指し」＋名詞成分「指」という3個の成分から成る複合的な名詞である、というような説明がそれである。（また、この説明に、「人ヲ指ストキニ使ウ指」であるというような、成分の意味関係について付け加えられる説明をも、語構成の概念に含むことがある。）これに対して、ある新しい事物にどのような新たな語を当てるかという観点で、語の造り方を論じる場合があって、これを〈造語法〉という。いわば〈語構成〉は静態的解剖学的なとらえ方であり、〈造語法〉は動態的力学的なとらえ方である。英独仏語では、‘word-formation’、‘Wortbildung(slehre)’、‘formation des mots’などが普通に使われていて、字義的には〈造語法〉に近いが、多くの語彙論の書物で説くところはむしろ〈語構成〉に近い。日本では、一般には〈語構成〉が用いられ、〈造語法〉という術語の使用は多くない。（藤原与一『日本人の造語法』、岩波講座『日本語9』の中の野村雅昭「造語法」など）以下、本章では、語の構造の分析を〈語構成〉として扱い、教育面でとりわけ重要だと考えられる語の造り方を〈造語法〉として扱うことにする。

〈造語法〉は、（多くは新規の）ある事物に対する〈命名〉‘naming’（〈名づけ〉とも）の働きと深く関わっているが、ここでは〈命名〉については触れない。

7-3 語の構成成分（単位）

「人指し指」が3個の成分（3単位）から成ることは明瞭であるが、「く

やしさ」が2個の成分から成ることが、それと同程度に明瞭であるとは言えない。それは、「人指し指」と違って、「くやしさ」から末尾の「さ」を抽出するには、「さ」が自立成分でないためにやや抽象的反省的な過程を必要とするからである。まして、「くやすい(文語形くやし)」が動詞「くゆ(文語)」から出来ていると考えるときは、「くやしさ」は「くや」+「し」+「さ」(または、「くゆ」+asi+「さ」)というふうに3個の成分から成ると見ることになる。「防曇レンズ」の「防曇」は1個の成分か2個の成分か。漢語の場合にはまた漢語特有の性質を考慮しなければ、実際的な分析も困難であろう。和語「き」に対する漢字「木」が「木質」「木工」「木材」「木馬」「木魚」「木炭」「木星」「木曜」「木製」「木造」「木像」「木目」「木偶」「木タール」「木皮」「草木」「樹木」「材木」「撞木」のように、また「木石」「木刀」「大木」「香木」「風倒木」「灌木」「木履」のように、モクやボクの音で多くの熟語を構成する成分となっており、漢字「機」が「機会」「機上」「機械」「機構」「機関」「機甲」「機体」「機器」「機材」「機業」「機知」「機能」「機微」「織機」「飛行機」「ジェット機」「樞機」「発電機」などの熟語の成分となるほか、「機を見るに敏であった」「機が熟した」のように、個々の漢字の多くは、単独で文中に用いられることもあって、単なる表記上の成分というよりは、自立性を半ば具有した語構成成分と見た方が実態に即している。近年編集刊行された辞書の中には、このような漢字の語構成上の特質を配慮して、基本漢字の個々を〈造語成分〉として見出し語と同列に配列したものがあるが、それは妥当な処置と考えられるのである。

さて、和語についても、何を語と認定するかには、第5章で触れたような問題がある。形容動詞連体形の「にこやかな」は「にこやか+な」と分解されるが、「にこよか」「にこり」「にっこり」「にっこつ」「にこや(にこやかなこと 古事記上巻)」「にこよ(宮廷の節折りの儀のときに天子の身長を測る竹)」「にこぼん」「にこにこ」「にこぐさ」「にこげ」などの語群の中に置いて分析するときは、「にこ+や+か」のように、語幹部分をさらに3個の成分に分解することができ、「にこやか」自身が、すでに単一の成分から成

るものでないことが明らかになるのである。このように、過去の語にさかのぼって語の構成を考えると、一見単一体と思われた語が複数成分より成る複合体であるとわかることが多い。しかし、日本語の単語をその生成の始源にまでさかのぼることは困難で、このような〈語源〉‘etymology’に関する事項は慎重に扱われなければならない。

日本語の単語の構成に際して、成分となる単位としては、次のものがある。

- A 語 (例. やま, さくら, あるく, する, たかい, よちよち) → やまざくら, やまあるき, よちよちあるき, 物見高い, 研究する, カーブする
- B 語幹 (形容詞・形容動詞) (例. たか, あたらし, すこやか, きれい) → 高望み, たかだか, あたらしがる, すこやかさ, きれいごと
- C 活用語尾 もくろ-む (目論む), そうぞ-く (装束く), サボ-る, アジ-る, なつか-しい, 元気-だ, 蓮っ葉-だ
- D 接辞 ‘affix’

- d₁ 接頭辞 ‘prefix’ (例. さ-, お-, ぶん-, うち-, 反-) → さ-おとめ, お-返し, ぶん-なぐる, うち-見る, 反-主流
- d₂ 接尾辞 ‘suffix’ (例. -さ, -み, -ばむ, -めく, -化, -的) → 美し-さ, 深-み, 汗-ばむ, 春-めく, 機械-化, 民主-的

(注1) 活用語尾と活用のある接尾辞とは、類似のものであるが、ここでは、和語化した特殊な動詞の語尾、形容詞・形容動詞の語尾に限り、他のものはすべて接尾辞として一括した。複合サ変動詞 (研究-する など) の語尾「-する」は語と考えられるし、「-ばむ」「-めく」「-まる」などは上接語に大きな制約があるためである。

(注2) 接辞の中には、〈接中辞〉‘infix’ が含まれる。インドネシア語の ‘gigi’ (歯) に接中辞 ‘-er-’ を挿入すると ‘g-er-igi’ (歯車) が出来る。モン語の ‘put’ (彫る) に ‘-n-’ を挿入して ‘pu-n-t’ (のみ) が得られ、満洲語 ‘alhombi’ (小心) に ‘-so-’ を挿入して ‘alho-so-mbi’ (謹慎) が得られる。これらが接中辞の例である。しかし、日本語においては接中辞の確例がないので、項目に挙げなかった。

- E 語根 ‘root’, ‘Wurzel’, ‘racine’

単語の一部分で、歴史的にさかのぼって意味上・構造上それよりも小

さい単位に分解できない非自立的なものをいう。(例. にこ, しず, ほの) → にこにこ, にこやか(な), しずしず, しずか(な), ほのほの, ほのか(な), ほのぐらい

なお, 森岡健二氏には和語の造語成分のさらに細かい分類がある(『国語学大辞典』の「和語」の項)ので, 一部を紹介する。自立単位(自立形式‘free form’)4種と非自立単位(結合形式または拘束形式‘bound form’)6種, 計10種がそれである。

自 立	}	a 形式(春・上 など)体言	単独(十格助詞)で文節になる。
		b 形式(いや・わずか など)	単独(十格助詞に/助動詞だ)で文節になる。
		c 形式(書き・為 ^し など)用言	単独(十接続助詞など)で文節になる。
		d 形式(すぐ・いいえ など)副用言	単独で文節になる。
非 自 立	}	e 形式(高・美し など)形容詞語幹	い・まる・さなどを付けて, 用言・体言・準体言になる。
		f 形式(しず・ひそ など)語根	か・まるなどを付けたり, 疊語化したりして, 準体言・用言・副用言などになる。
		g 形式(ひと・この など)数詞	つ・り・かなどを付けて体言になる。
自 立	}	h 形式(こ・わ など)指示詞	れ・のを付けて体言・副用言になる。
		i 形式(いか・かく など)	助詞を伴ったり, 他の成分と融合したりして副用言になる。
		j 形式(どん・さっ など)	擬音・擬態語の核になる。

この森岡氏の10形式は<語基>であって, 接辞や活用語尾を含まない。さて, 先に挙げたA~Eの単位のうち, 機能的な意味しかもたないのが,

CおよびDであって、残りのものは、自立・半自立・非自立の形式的な違いはあるものの、そろって語彙的な意味（後述）をもつものである。この3者のうち、AとBが語構成成分としてもっともよく用いられるものである。別言すれば、それらは名詞・形容詞語幹・形容動詞語幹・動詞連用形の4類である。代名詞も名詞と同じように、成分Aとして用いられるが、絶対数が少ない。また、副詞も使われるが、上記4類と比べると、かなり例は少なくなる。名詞・形容詞・形容動詞・動詞の4類が、どうして成分としてよく用いられるのだろうか。その理由は、語の新造が求められるのが、大体において語数の多い名詞・形容詞・形容動詞・動詞であることに関係している。

表33 品 詞 別 語 数

資料	品 詞						計
	名 詞	形容詞	形容動詞	動 詞	副 詞	その他	
『基礎日本語』	816	62	26	70	26	99	1,099
『日本国語大辞典』	320,824	4,381	4,760	25,087	5,483	77,822	438,357

表33などを参考にすると、副詞も数が多い品詞であるが、これは日本語の場合は音象徴語の副詞が多いことによると考えられる。そして音象徴語の副詞は比較的語構成上問題になることは少なく、むしろ語形（撥音・促音・引き音節の挿入、拗音化、濁音化、疊語化など）と語感の問題として考察すべき事項が多い。このように見てくると、名詞・形容詞・形容動詞・動詞の4品詞は、全品詞中に占める比率の高い品詞群であり、またそれらの品詞群の個々の語の成分としてもよく用いられているということになる。

なお、形容詞・形容動詞にも語幹以外の用法があり（例、物見高い、小さいだ）、動詞にも連用形以外の用法がある（例、走りまわる、ぶんぐる）が、それらはあまり多くない。動詞連用形は「まわり」「御用聞き」「買い物」のように、名詞として、または名詞の成分として使われることがたいへん多い。このような名詞成分として働く動詞連用形をとくに「居体言（きよたいげん）」と呼んでいる。新造語の成分として頻用される4類は名詞の成

分として用いられることが多い。この事実、語の世界の大半を占める品詞が、どんな言語においても名詞であるという事実と深く関わっている。

次に、日本語において特徴的に観察される、語と文字の関係に触れてみよう。(詳しくは、第9章を参照されたい) 現代の大勢が漢字平仮名まじり文であるために、平仮名は主として助詞・助動詞・用言の活用語尾に当てられる。したがって、平仮名は〈複合法〉構成(後述)において用いられることがあまり多くなく、〈派生法〉構成(後述)における語尾・接辞に用いられることが多い。これを裏返して見ると、複合法においては漢字が、略語法においては漢字・片仮名・ローマ字が、主として使われることになる。

- α 複合法：山道 北風 甘酒 旅行会社 国会議員 化学反応
- β 略語法：東横線(東京急行電鉄東京横浜線) 消団連(全国消費者団体連絡会) 円高(日本の円の相場が外国の通貨に比べて高いこと) 排ガス(自動車の排気ガス) 京阪神地方(京都・大阪・神戸地方) 女体短大(女子体育短期大学) イ・イ戦争(イラン・イラク戦争) ジェトロ(Japan External Trade Organization) S L(蒸気機関車 steam locomotive) NHK(日本放送協会) 3 L D K(3寝室+Living+Dining+Kitchen) 3 K赤字(国の特別会計または政府関係機関等の赤字。米・国鉄・健康保険) 3 C革命(総合的な情報革命。Computation 計算, Control 統括, Communication 通信)

漢字は表意性があるため、複合語においても略語においても、盛んに用いられる。片仮名とローマ字は手がるな略語づくりに頻用されているが、それは上例からもうかがえるように、符牒的な表音性が歓迎されていることが多い。平仮名は、

あいのり(番組), 赤い羽根, もちあい, いもち病, 刷り込み
などに見られるが、他の文字と比べると、新語の中で積極的に使われる契機に欠けていると考えられる。

一般の名詞ではないが、最近、日本の会社が相ついで社名変更を行い、
トヨタオート(豊田自動車)

トーヨータイヤ（東洋タイヤ）

ニッポン食品（日本食品）

スエヒロ印刷（末広印刷）

オーツカ薬品（大塚薬品）

イマイ運送（今井運送）

マツダ（東洋工業）

麒麟ビール（麒麟麦酒）

ユーシン（有信精器工業）

ケイヒン（京浜倉庫）

HOYA（保谷硝子 ただし、登記は「ホーヤ」）

などの片仮名例・ローマ字例が増えている。（「サンデー毎日」1984年4月29日号）社名は「塩野義製薬」や「立石電機」や「旭電化工業」や「東京銀行」であっても、製品名・扱い商品名・株式愛称には、「シオノギ」「オムロン」「アデカ」「ワリトー（東京銀行割引債）」などが増加する傾向にある。

7-4 語の構成

語は、自立成分1個で出来ているか否か、非自立成分を含んでいるか否か、成分相互の結合関係はどうかなどによって分類することができる。

まず、「手」「目」「見る」「高い」「役」「番」「ホーム」「ボーイ」のように、自立成分1個で出来ているのが<単純語> ‘simple word, einfaches Wort, mot simple’ であるが、これは<1次語> ‘primary word’ とも呼ばれる。単純語とは違って「春風（はるかぜ）」「走りまわる」「お米屋さん」「にくらしさ」のように、1個の自立成分と他の成分（自立・非自立を問わない）との結合によって成り立っているのが<合成語>である。これは<2次語>とか<多次語>とか呼ばれることもある。合成語はさらに次の3類に分けられる。

- a <複合語> ‘compound word, Zusammengesetztes Wort, mot composé’ : 複数の自立成分の結合によって出来ているもの…「山桜」

「踊り狂う」「山川（やまかわ）」

b <疊語> ‘reduplicated word’: 同一成分の重複によって出来ているもの…「人々」「我々」「泣き泣き」「たかだか」「どろどろ」

c <派生語> ‘derived word/derivative, Abgeleites Wort, mot dérivé’: 自立成分にいくつかの接辞が添加して出来ているもの…「男らし-さ」「お-子-さん」

なお、複合語には次の2つのものがある。

a-1 <統語構造> (<従属構造>) ‘syntactical composition’: 複数の自立成分のあいだに、主語述語の関係、修飾語被修飾語の関係などの統語的な関係が認められるもの…「雨降り」「革靴」「ぼつと出」

a-2 <並列構造> (<等位構造>) ‘juxtapositional composition’: 複数の自立成分が対等の資格で結合していて、成分間に統語的な関係の見られないもの…「やまかわ（山川）」「手足」「飲み食い」

また、疊語には、同一成分の重複ではないが、「二度とふたび」「おめずおくせず」のような準疊語とも言うべき構成が考えられる。さらに、派生語は接頭辞を使うか接尾辞を使うかによって2類に分けられる。

自立成分をX, Yで、非自立成分をx, yで示すことにして以上をまとめると、次のようになる。

		(方法)	(語例)
語	單純語 (一次語) 合成語 (多次語)	a-1 統語構造	X+Y(川上, 目白)
		a-2 並列構造	X・Y(ちはは, 生き死に)
		b 疊語(重複法)	X+X, Y+Y(山々, どろどろ)
		b' 準疊語	X+X'(二度とふたび)
		c-1 接頭辞系	x+X(お山, 小ぐらい)
		c-2 接尾辞系	Y+y(子ども, 時めく)

(注)「合成語」を本書でいう複合語の意味で使用し、「複合語」を本書でいう合成語の意味で使用している書物もある。

語の中には、「事知りがお」「物ほしそうだ」「水増し資本」「尾頭つき」「手足口病」のような多元多層の構成のものがある。これらは、それぞれ

ア (事+知り) + お
a-1
 a-1

イ [(物+ほし) + そう] + だ
a-1
 c-2
 c-2

ウ (水+増し) + 資本
a-1
 a-1

エ (尾+頭) + つき
a-2
 a-1

オ (手+足+口) + 病
a-2
 a-1

のような構成と考えられ、いずれも3個以上の成分が、1次結合、2次結合、3次結合というふうに結合を重ねて、多層構成になったものである。このように、語をその構成から分類するときは、最後の(つまり最高次の)結合形態によって判断する。ア・ウ・エ・オは統語構造の複合語、イは接尾辞系の派生語とされる。

なお、上巻「6-2 和語 (1) 語形」の個所で触れた<連濁>は、a-2の並列構造の複合語と、bの畳語のうち音象徴語には起こらない。

一般的に言えば、多くの言語でもっとも多いのは統語構造の複合語のようで、日本語もその例外ではない。しかし、ロマンス語派のフランス語、スペイン語、イタリア語など、またマライポリネシア語族の諸言語では、相対的に派生法が活発で派生語の多いことが認められる。

(日本語) 靴+屋 c-2, 乳+製品 a-1

(英語) shoe+maker a-1, dairy products a-1

(フランス語) cordon-n-ier c-2, lait-age c-2

以下、語構成の考察を行うにあたって、便宜上次のような符号を用いることにする。

統語構造⇒、並列構造＝、疊語＋、接頭辞系→、接尾辞系←

(例) 山⇒道, たまご⇒どんぶり, (なつか←し)←さ, (お→国)⇒入り,
おとこ⇒おんな, 男(だん)＝女(じょ), 黒⇒板, (黒⇒板)⇒消し,
北⇒(半⇒球), やま⇒がわ, やま＝かわ, 手＝足, (子⇒守り)⇒
歌, (入＝退)⇒院, 国⇒(内＝外), [(公共⇒料金)⇒(値⇒上げ)]⇒
攻勢, [(原子←力)⇒(発電←所)]⇒設置⇒計画⇒反対⇒期成⇒同
盟, 人＋びと, 家＋いえ, 道＋みち, 粉＋こな, 泣く＋泣く, (女
＋女)←しい

[問93] 次の各語を単純語と合成語に分けよ。

歯ブラン 寺 みずうみ 顔 はまべ もみじ 雲
いのしし つゆ いただき 組 固める 仕事 ついたち
移ろう うつらうつら 浮き つづき こゆび

[問94] 次の各語は、A語 B語幹 C活用語尾 D接辞 E語根 のうちのどの成分から出来ているか。それぞれの成分を指摘せよ。

しずか 買い物 木もれ日 ほのめく 釣り天井 御大層な
蹴倒す 口下手だ 聞き苦しい 気まま者 なまめかしい
事新しい うれしがる

[問95] 次の各語の成分の品詞は何か。成分個々についてその品詞名を答えよ。

やまとことば うれし涙 ぬかよろこび たぬきうどん
ぬけがけ 口あたり 漬け物 物干し竿 上り道 逆上がり
月がけ貯金 ゴムまり きれい好き カチカチ山 詰め襟
借金とり 食わせ者 抜き身 夜明け 日の出

[問96] 統語構造の複合語を10語挙げよ。

〔問97〕 並列構造の複合語を 5 語挙げよ。

〔問98〕 連濁を起している疊語、連濁を起していない疊語、各 5 語を挙げよ。

〔問99〕 準疊語の例となる語を 3 語以上挙げよ。

〔問100〕 接頭辞の付いた派生語、接尾辞の付いた派生語をおのおの 5 語挙げよ。

〔問101〕 本文中の例にならって、次の各語の構成を、a-1(⇒), a-2(=), b(+), c-1(→), c-2(←), (), []などの符号や括弧を用いて示せ。

ひんめくる 山びらき 夏休み入り がらがら蛇 許認可事務
子どもらしさ あわれっばい 合同コンパ めしべ 川口
情けない こだま 横紙破り 上り列車 ますます
男らしさ 大丈夫だ うすぐらい

〔問102〕 「年金受給者」を意味する英語・ドイツ語・フランス語の単語を求め、日英独仏の言語で、構成がどのように異なるかを調べてみよ。

7-5 複合語とその成分

日本語では、語の品詞は通例その最終成分の品詞によって決定される。合成語のうち高い比率を占める統語構造の複合語は、とくに最終位置（語末）にある成分の品詞がそのままその複合語の品詞となっている場合が多い。

山⇒登り（名詞）、春⇒さめ（名詞）、よみ⇒がえる（動詞）、触れ⇒まわる（動詞）、うら⇒口（名詞）、中⇒庭（名詞）、目⇒白（名詞）、通り⇒雨（名詞）、青⇒白い（形容詞）、考え⇒深い（形容詞）、毛⇒深い（形容詞）

ここで複合語の品詞について、もう少し詳しく考えてみよう。

(i) 最終成分が動詞成分で連用形である場合は、主として名詞である。その場合、連用形を活用させて、動詞状に働くものはあまり多くない。

日まわり 深追い 川流れ 半煮え まる焼け きれい好き 山越え

川沿い 遠出 上すべり 値上がり こぶつき 子持ち 手出し 肩こり
り ぽっと出 物知り 夜明け 花ぐもり 筆洗い 日暮れ 洋服かけ
首切り

この型の複合語で動詞としても働くものは、もともと複合動詞であったものが名詞化して居体言となったもので、前項には修飾語としての別の動詞が来るものが多い。前項に動詞以外の成分をもつものは、古代から存在する動詞であることが多い。また、前項が後項と意味の上で、対比や並列を示す構造になっている場合は、動詞として働かないのが原則である。この場合は、前項動詞と後項動詞が、それぞれ別個に居体言となったのち結合したもので、名詞1＝名詞2という並列構造（a－2）であることが多い。

動詞として働くもの

聞き込みム 切り抜きク とり違えル 考えすぎル 染め分けル 掘り
下ゲル 出回りル 差し入れル 照り返しス こがれ死にヌ 刈り込み
ム 生き残りル 差し引きク 勝ち抜きク 話し合いウ はね上がりル
乗り越しス／天下りル よみがえりル 垣間見ル ほほえみム したた
りル ころろざしス みのりル

動詞としては働かないもの

読み書き 切りじに やりとり 上り下り 上げ下げ 考え違い より
ごのみ 立ち泳ぎ 洗い張り／洗いざらい（副詞）

(ii) 最終成分が形容詞語幹である複合語の多くは名詞として用いられるが、全体が形容動詞語幹になるものも少なくない。

せい高 頬白 目高 夜長 遠浅 末広 極細（以上名詞）
手短 気弱 声(こわ)高（以上形容動詞）
身近 手狭 幅びろ（以上名詞・形容動詞）

『学研 国語大辞典』によって、基本的な形容詞60語（ク活用47、シク活用13）を選び、その終止形を語末にもつもの、語幹形を語末にもつもの、畳語形をもつものの数を調べたところ、

終止形を語末にもつもの〔形容詞〕 275 語（うす明るい、耳新しい）

語幹形を語末にもつもの（疊語形式を除く）〔主として名詞か形容動詞〕

137語（目高、足早な）

疊語形式のもの〔主として副詞〕14語（高だか、寒ざむ）

のような分布が見られた。なお、シク活用には語幹形の例は見られなかった。語幹形を語末にもつ137語は、品詞から見ると、次のように分布している。

名詞のみ	78
名詞と形容動詞	36
形容動詞のみ	21
形容動詞と副詞	1
副詞のみ	1

以上のことから、形容詞成分について次のようにまとめることができるだろう。

- ① そのまま複合構成の後項として用いられることがもっとも多い。
 - ② 語幹が後項に立つ場合はやや少ない。
 - ③ 複合の結果から見るときは、形容詞となるものももっとも多いが、語幹が名詞に用いられて複合名詞となるものも多い。
 - ④ 現実には、さらに形容動詞性接辞 -ナ、-ニ、-ダなどが付いて派生形容動詞になるものがあるが、これらの多くは接辞を伴わない複合名詞としての用法を同時にもっているものが多い。このことは、複合名詞から派生形容動詞が生成されていく過程を示している。形容詞語幹を後項とする複合名詞のグループは、いわば〈準形容動詞〉という性格をそなえていると考えられるのである。
 - ⑤ 「高だか」「寒ざむ」のような語幹の疊語形式は、そのまま、あるいは「-と」や「-に」を伴って副詞として働くものが多いが、例数が示すように、少数の基本的な形容詞（語幹が2拍のもの）からの分出形式に限られている。
- (iii) 最終成分が名詞である複合語は、大半が名詞であるが、次に見るように、副詞、形容動詞語幹となるものもある。

年下(名詞+名詞) 松虫(名詞+名詞) 白波(形容詞+名詞)
薄刃(形容詞+名詞) 釣糸(動詞+名詞) 染物(動詞+名詞)

——以上名詞

そちこち 折節 大方 すぐさま ふたたび(後刻 即日 近年)

——以上副詞

蓮葉ナ ぶざまナ 大袈裟ナ ぶっきら棒ナ 命冥加ナ 一本気ナ 内
気ナ 大味ナ 捨鉢ナ 心得顔ナ 控え目ナ 見事ナ 太っ腹ナ 大幅
ナ 大時代ナ 大柄ナ ——以上形容動詞

最終成分が名詞で形容詞になるものとしては、後述のように「空ぞらしい」などが考えられるが、これは、「空」の疊語形に接尾辭「-しい」が付いた派生語に限られ、複合構成によるものとしては、「ひもじい」(ひ+文字+い)があるが、これも全体としては派生法になっている。

(iv) 最終成分が副詞である複合語は、やはり副詞となるが、例は多くない。

しんねりむつつり のんべんだらり はたまた ただいま 年がら年中

7-6 造語に伴う変音現象

アメとタレが結合して、アマダレという統語構造の複合語が造られる。このように、いくつかの成分が結合して合成語が造られるとき、しばしば成分の音素に変化が生じる。文法における用言や助動詞の語尾の変化を<屈折>(活用ともいう)‘conjugation’ というのに対して、合成において見られるこのような音素の変化を<変音>‘phonological change’ という。変音には、<連濁><転音><音便><音韻添加><音韻脱落><音韻融合><連声><半濁音化>その他がある。

(1) 連 濁

[前出 上巻「6-2 和語(1)語形(ii)転音・連濁」など]

(2) 転 音(母音交替ともいう)

アメ+タレからアマダレが出来るように、前項末尾の母音が他の母音と交替すること。

- (i) /ë/→/a/ あめ：あまぐも，かぜ：かざかみ，ふね：ふなつきば，さけ：さかや，かね：かなづち
- (ii) /i/→/u/ つき：つくよ，かみ：かむかせ
- (iii) /i/→/ö/ き：こだち，ひ：ほなか
- (iv) /e/→/ö/ せ：そむく

(注) 上記の /i/, /ö/ などは，上代特殊仮名遣いの乙類を示す。

(3) 音便

狭義には動詞・形容詞の連用形が接続助詞「て」、「たり」、助動詞「た」に続くときの変音現象を指すが，ここでは，それ以外の促音化，撥音化などを指す。(以下の>は，左の語形が右の語形に転ずることを示す)

つきさく>つんざく，ぶちなぐる>ぶんなぐる，うちやる>うっちゃる，おいたてる>おったてる，すきがき>すいがい

(4) 音韻添加

新しい音素が添加される。

- (i) 前項末尾に特殊音節/Q/ (促音節)，/N/ (撥音節)，/V'/ (引き音節) が加わるもの。

うでっぶし，まんまる，詩歌 (シイカ)

- (ii) 後項語頭に子音/s/, 半母音/j/, /w/が加わるもの。

はる-s-あめ>はるさめ，ま-s-あお>まっさお，にぎ-s-いね>にぎしね，ば-w/j-あい>ばわい/ばやい，ぐ-w-あい>ぐわい，し-j-あい>しやい (ただし，あとの3例は俗語形である)

(5) 音韻脱落

成分が有していた音素が脱落して，音素数が減少するもの。

- (i) 前項末尾の母音音素の脱落

くにうち>くぬち，あらいそ>ありそ，わがいも>わぎも

- (ii) 後項語頭の母音音素が脱落するもの。

はなれいそ>はなれそ，ふないで>ふなで，いもがいへ>いもがへ
(これらは古代語の例である)

(6) 音韻融合

連続する音素・音節が融合して、第3の音素・音節が変わるもので、母音音節の存在が変化を誘発している。

かりうど>かりゅうど, きうり>きゅうり, めおと>みょうと, せうと
>しょうと, てふ>てう>ちょう

(7) 連声(むらさ)

複合語の前項末尾(時には文節内の自立語末尾)のチ・ツ・ンの子音/t/, /n/, /m/がもう1度くり返されて後項語頭のア行・ヤ行・ワ行の音と合し、タ行・ナ行・マ行の音に転じる現象。

雪隠>せっちん, 因縁>いんねん, 反応>はんのう, 三位>さんみ, 陰陽>おんみょう, 仏恩>ぶっとん, 屈惑>くったく, 今日>こんにった, 念仏を>ねんぶっと

(この現象は、中古・中世に起こったもので、現代語の中には化石化した少数のものが残っているだけである。)

(8) 半濁音化

後項がハ行音で始まる場合、そのハ行音がパ行音に転じる現象で、直前の促音化(または促音添加)と同時に起こる。

はなす:ぶっばなす, はじめる:おっぱじめる, ひろげ(る):あっけっびろげ

(9) その他

サ>ツェなど, 1部の俗語において見られる現象。

おとうさん>おっとっあん, ごちそうさん>ごっとっあん

[問103] 次の成分を含んだ複合語を、統語構造と並列構造とに分けて、各5語以上挙げよ。

かね(金) もの(物) くさ(草) き(木) はな(花) み-ル(見)
も-ツ(持) つ-ム(摘) け(気) ひと(人) か-ル(刈) した(下)
た(田) とお-イ(遠) おお-キイ(大) だい(大)

〔問104〕 次の合成語は、複合語か派生語か、またその品詞は何かを答えよ。

困り切る 手袋 サツマイモ 月給とり けちくさい
目立つ 手渡す 形づくる さきおととい 末恐ろしい
がま口 聞き苦しい だだっぴろい 狂おしい 下り坂
たくましさ み仏 蝸足(たこあし) そぞろ心 ずば抜ける
きりきり舞い 着付け もらい泣き 食わず嫌い 耳ざわり
親まさり 小利口 但し書き 小やかましい ほのぐらい
ま四角 孫娘 まきあげる 古手 振替 腑抜け 極めて

〔問105〕 次の語の漢字の部分に振り仮名を付けよ。

夕月 お花畑 足手まとい 葉桜 魚釣り 磯釣り 稲田
走り書き 親子 赤子 ぎっくり腰 若木 野菊
猫なで声 谷風 黒鯛 赤髭 昼めし時 山寺 双子
酒代 川上 金もうけ 船脚 べんべん草 座敷机
吊り提燈

〔問106〕 次の語の下線部は、連濁によるものかどうかを答えよ。

電じしゃく ビールびん 山ざと 海ぞい 出しじゃこ
出じろ ただごと 夏ばしょ わらぞうり 小づかい
白ばら 三びき 十国とうげ おばけ ごねどく 灰ざら
片ひじ 当てずいりょう 平家びわ 秋はぎ 先おれ
はげあたま くぎぬき ふうばいか がきだいしょう
あまがっば かんざまし すいぎん

〔問107〕 次の複合語の品詞とその最終成分の品詞は、同じかどうかを答えよ。

腹赤 残高 欲深 腹黒い 萌え黄 細長い 夜長
喧嘩早い 遠浅 頼み少ない 青白い 器量よし 耳どおい

〔問108〕 次の複合語のうち、名詞としての用法のないものはどれか。

白酒 苦しまぎれ 一つ覚え 口おも(重) 一粒だね(種)
鯖鱈 手うす 涼風(すずかぜ・りょうふう) 汁粉
出まかせ 三度笠 手頃 鳥網 露草 人ずくな(少)

支離滅裂 千鳥足 常日頃 血まみれ えてして 肉細
まっくら 物柔らか やみくも 湯あたり 引きつづき
またいとこ くりかえし ひとでなし まるきり からっきし

〔問109〕次の複合語のうち、変音が起きているものを指摘し、その種類を述べよ。（語種に関わりなく、すべて平仮名書きにしたものがある。）

うったえる あまくだる ぶんどる かなとこ たすき
ぶんまわし おっぼりだす おっとりタイプ 天王星 秋風
うっぶんばらし ふなうた 長ぎせる 実行 日誌 決定
白菊 いっぴつ 学校 国会 こかげ くさはら
しいじ（四時） ざがね ぶったおれる ひっぱがす
おもてげんかん 長ずぼん 親会社 はなっぱしら ふっとぶ
文法 さかだる りんね ぜんなく 発表 腹ぐあい
たくわん たはた かげぼうし ちうみ たかびしゃ
ふなつり そでたけ しらとり 猫じた 砂ごむ ふなたび
あまがさ かたぐるま

〔問110〕次の15語の複合語のうち、成分の品詞と構造が下記の6語と同じものを探し、その番号を（ ）内書き入れよ。

①行き来 ②はり紙 ③つみ木 ④石段 ⑤ささぶね
⑥白犬 ⑦金貸し ⑧のみぐすり ⑨うえした ⑩靴みがき
⑪青空 ⑫親子 ⑬やりとり ⑭鉛筆けずり ⑮細うで
あつ紙（ ） 稲刈り（ ） あげさげ（ ）
アルミ缶（ ） たてよこ（ ） 食べ物（ ）

〔問111〕次の各語を最終成分とする複合語を各3語以上挙げよ。

-飲み -受け -高（たか/だか） -黒（くろ/ぐろ）
-事（こと/ごと） -ひげ -金（かね/がね）

〔問112〕次の複合語のうち、並列構造のものを指摘せよ。

五月晴れ つきひ 立ち居 かびくさい ちちはは 先細り
奥山 かみなかしも うみ坊主 うみやま 恋いこがれる

花見　よるひる　深なさけ　手足　足手まとい　野山
紅葉狩り　飛び散る　みぎひだり　雨降り　まごこ（孫子）
前後　ほしづきよ　松竹梅　竹馬

〔問113〕 次の各文の和語の中の複合語・疊語・派生語を指摘せよ。

ア 芽吹きからあさみどりにかけてのきらめくようなケヤキもいい。しかし落ち葉を舞わせる晩秋のケヤキに心をひかれる人びとも少なくないだろう。だが、この木がいちばん目立った姿になるのは、なんととっても冬のさなかの裸木のときだろう。

イ 箒の場合、竹とプラスチックとでは、手にした感じがまるで違う。竹には軽やかさがある。手が汗ばんでいても吸いとってくれるような乾いた感じがある。生きものと生きものとのふれ合いというのか、こちらの呼吸をやわらかく受けとめてくれる感じがある。プラスチックにはそれが無い。命のないただの棒だ。汗ばむと、ねとねとした感じになる。

ウ 元日の未明、取材用小型機で北陸の海辺に向かった。東の空が若紫色からぶどう色へ、そして明るいあかね色に染まり出す。金星が孤独な光を放っている。やがて、中天の月明かりを日の光りが追い散らす。眼下の雲海のかなたにまばゆい珊瑚（さんご）色の光りの帯が現れる。一瞬、雲のすき間から炎が噴き出し、めらめらと燃えたぎる太陽が姿を現した。高度8,000メートルから見る朱色の夜明けだ。

7-7 統語構造のいろいろ

複合語のうちa-1の統語構造に関する重要な事項として、先にも触れた成分と語全体の関係を整理し、あわせて成分相互の統語的（文法的）関係、成分の結合の結果出来上がった複合語自体の意味の2点について詳しく見てみよう。

たとえば、「山歩き」や「気づく」はどちらも、名詞成分⇒動詞成分 という構成であるが、「山歩き」は名詞であり、「気づく」は動詞である。この違いは、両者の動詞成分の形態の違い（前者は連用形で活用なし、後者は終

止形で活用あり)にもとづくものであることが明らかである。また、「山歩き」には「山ヲ歩ク」,「気づく」には「気ガつく」のように、その基底に助詞などを補った文法的関係が想定され、格や比喩などの関係が認められる。さらに、「酒のみ」は、液体飲料名の名詞「酒」⇒動詞連用形「飲み」の構成で、「酒が好キデ、タクサン飲ム人」という意味であるが、「湯のみ」はまったく類似成分で同じ構成であるにもかかわらず、「湯茶ヲ飲ムノニツカウ、小型ノチャワン」という意味であって、この場合は、一方から機械的に他方の意味を推測帰納することはできない。もともと「酒のみ」の後項の居体言「のみ」は「飲ムコト」または「ノムヒト」という行為名詞または行為者名詞であった（のが、現代日本語では、人を意味する用法に限られてきている）が、「湯のみ」の方は「湯のみぢゃわん」の下略によって成ったという経緯があって、外見上的一致や類似が必ずしも意義上的一致や類似につながらないことを教えてくれる適例である。

以下に複合語の各成分と語全体の諸関係について考える。

便宜上、名詞をN、動詞をV、形容詞をA、形容動詞をNA、副詞をAD、感動詞をIntとし、 $W_1 > W_2$ は、 W_1 が W_2 になることを示すものとする。

(1) N⇒V構造

a N⇒V>N (名詞となるもの)

山歩き、夜遊び、鉤裂き、稲刈り、姿見、釘抜き、湯沸かし、口止め、川開き、借金取り、位どり、卵焼き、鹿島立ち、鞍がえ、小倉(こくら)織り、里帰り、鯖読み、下請け、地(じ)続き、人払い、棚落ち、狐つき、落穂拾い、ラップのみ、峯伝い

α 格関係などによるN⇒V構造(a型)の名詞の分類

①主格(NガVスル)

かみなり(雷)、親ゆずり、日暮れ、雨降り、雨上がり、狐つき、日照り、値上がり、雪どけ、犬走り、猫化け、白髪まじり、早いもの勝ち、猿すべり、姉(あね)さんかぶり、神かくし、美人ぞろい、霜降り、海鳴り、肉離れ

②対格 (NヲVスル, Vは他動詞)

日知り(聖), 月見, 借金とり, 馬肥やし, 子守り, 絵かき, 金持ち, 核抜き, 木こり, 塩断ち, 切符切り, 草取り, 魚釣り, 鳥追い… (以上, Nは対象)

めしたき, 湯沸かし, 歌よみ, 炭焼き, 罪つくり… (以上, Nは結果)

③移動格 (NヲVスル, Nは通例空間・場所を意味する名詞で, Vは自動詞)

家出, 門出, 道行き, 瀬渡り, 綱渡り, 谷渡り, 世渡り, 山越え, 島めぐり, 庭伝い, 沢のぼり, 川下り, 内まわり

④具格 (NデVスル)

バター焼き, 水攻め, 峯打ち, カマキリ, 鉄板焼き, 友釣り, 砂あそび, 釘づけ, 釜ゆで, ペン書き

⑤帰着格 (NニVスル)

里帰り, (お)国入り, 船づみ, 山入り, 先祖がえり, 本卦がえり, 人任せ, 肌ざわり, 神もうで, 手ごたえ, 口あたり, 歯ざわり, あなた任せ

⑥場所格 (Nデ/ニVスル)

東京育ち, 沖釣り, 野飼い, 駅止め, 雲がくれ, 下着, 側仕え, 辻斬り, 腹巻き, 胸当て, 肩掛け, へや住み

⑦奪格 (NカラVスル)

山出し, 蔵出し, 樽出し, 棚下ろし, 仲間外れ, 天下り, 股のぞき, 背開き, よみがえり, パリ帰り, 巣ばなれ, 七並べ, 所払い, 後ろ見, 垣間見, 水あげ, 耳だれ, 山おろし, 湯あがり, 子飼い, 縄抜き

⑧共同格 (NトVスル)

人づきあい, 近所づきあい, 人まじわり

⑨引用格 (NトVスル, このVは reporting verb)

泥棒呼ばわり, かたき呼ばわり, 勝ちなのり

⑩基準格 (Nヨリモ/トクラベテ/ニVスル)

男まさり, 親まさり, 京まさり, 名前負け, 漆負け, 心おとり

⑪原因・理由格 (Nノタメニ/デVスル)

船酔い、日焼け、霜枯れ、酒焼け、酒ぶとり、雪折れ、雨やどり、夏やせ

⑫方向格 (NへVスル)

南向き、横流し、輿行(き)、右まわり、海寄り、東寄り

⑬到達格 (NマデVスル)

乳(ち)下がり、衿(おくみ)下がり、底冷え、宅扱い

⑭資格格 (NトシテVスル)

弟子入り、一本立ち、客扱い、まま子扱い、給仕づとめ

上に挙げた分類は、[名詞+動詞連用形]の形をもつ統語構造の複合語を、潜在的な展開形〔名詞+助詞(相当連語)+動詞終止形〕において想定される助詞(相当連語)を軸にして行ったものである。しかし、この分類法には次のような問題点がある。すなわち、潜在的な助詞等が必ずしも一義的に確定できない場合があることや、また同一語形であっても、意味が異なったり、想定される助詞等が違ったりする場合があることである。前者の例としては、「浮世ばなれ」について「浮世カラ」と「浮世ヲ」が考えられ、「横流し」について「横へ」と「横＝」の2形が考えられるというような場合のほかに、「一日のがれ」「月ぎめ」「観音びらき」のような、特定の助詞(相当連語)が想定しにくい場合が挙げられる。後者の例としては、「水切り」のような語形が挙げられる。語形「水切り」については、次のような分類ができる。

「水切り」	{	水ヲ切ル	a	水分ヲとり去るコト	(料理) …行為名詞
			b	水・雨などが壁・床をいためないよ うに処置するコト(雨水・下水・溝 の水分ヲ切る手当て)(工事・工法)	…行為名詞
			c	大型和船の舵にとりつける細長い材	(造船) …行為者名詞
			d	和船のみよしの前面部のコト	(造船) …行為者名詞
			e	水面ヲ平たい小石などで切るコト	(遊び) …行為名詞
			f	草花などを水中で切ってもちを よくするコト	(生け花) …行為名詞

このように、語形としては1つであっても、内部の構成や意味が多様である場合があるので、個々の用例に即して考えることが肝要である。上記の「一日のがれ」は、「きのうの一日、きょうの一日というふうに、一日ずついやなこと（たとえば戦争中の召集など）をのがれること」という意味である。「月ぎめ」は「料金の支払いなどを1か月単位（ごと）にきめてすること」であり、「観音びらき」は「観音の厨子のように左右に開く戸」のことである。このような複合語では前項の「一日」「月」「観音」と後項の「のがれ」「ぎめ」「びらき」の間に直線的に結びつけられるような関係を想定することが容易でなく、単純に特定の助詞（相当連語）を措定することがむずかしい。「観音びらき」の例では、「観音の厨子のような開き戸」であるから、前項「観音」と後項「びらき」の間には省略（結果としては飛躍）が存在するのである。これらの類例としては、「花冷え」（サクラの花が咲くころに寒さがぶり返してくること、またその冷え込み）、「うぐいす張り」（人が踏み歩くとウグイスの鳴き声に似た音を出すように廊下の板を張ること、またそのように張った廊下）、「虎刈り」（段になってトラのまだらのように見える、下手な髪毛の刈り方）、「川止め」（江戸時代、大水が出たときに川を渡るのを禁止したこと）、「かどづけ」（他人の家の門口で歌を歌うなどの芸をして、お金や食べ物をもって歩くこと、そうする芸人）、「坊主もち」（数人の同行者が荷物を持って行くとき、途中で僧に出会うたびに、その持ち手を交替するやり方）、「年ごもり」（年末・年始に仕事を休み、社寺に泊り込んで願をかけること）、「島伝い」（島から島へ伝って行くこと）、「島破り」（島流しになった罪人が島を脱け出ること、また島を脱け出た罪人。島脱け）、「梅割り」（焼酎を梅酒で割った飲み物）、「塩払い」（葬儀が終わった後に塩をふりかけて身を清めること）、「精進落とし」（精進の期限が終わって肉食すること。精進あげ、精進おち）などが挙げられる。

なお、①（NガVスル）の型には、「阿弥陀かぶり」「韋駄天ばしり」「犬かき」「犬死に」「鰻のぼり」「鶉のみ」「兎ばね」「鸚鵡がえし」「蛙およぎ」「竿だち」「猿まね」「雀ありき」「狸ねいり」「とんぼがえり」「仁王だち」

「ねず鳴き」「百姓よみ」「貧乏ゆすり」「豚肥え」「坊主よみ」「棒だち」「目白おし」「鷺づかみ」のように、〈NがVスルヨウニVスルコト〉の意で使われる比喩によるものがあり、前項の名詞には、後項の動作を習性として行う行為者名詞が用いられ、前項後項の結合力はきわめて強く安定した形となっている。比喩・見立てによるものであるため、原則として〈韋駄天が走ルコト〉のような、直接その行為者の動作を指す場合には用いられない。つまり、この複合法によって出来上がった居体言は、N（の動作）によって象徴されるような動作一般を指す働きをしているのである。名詞と動詞との結合に実態にもとづいた必然性が認められるために、この種の複合語では、各成分の交換は困難である。この類では、後項動詞Vには自動詞が多いこと、前項Nには植物・鉱物名は動作性が低いために立ちにくいことが考えられる。

また、〔名詞ノ十名詞〕の中の「イスカの嘴(はし)のくいちがい」「イタチの道切り」「河童(かっぱ)の川流れ」「蟹の穴入り」「雉(きじ)の草隠れ」や、助詞が「ガ」から「ヲ」その他に転ずるが、「海老(えび)固め」「芋刺し」「牛蒡ぬき」「釣瓶(つるべ)おとし」「猫かわいがり」「後家(ごけ)だおし」「すしづめ」「将棋(しょうぎ)だおし」「ミミズ腫れ」「やの字結び」「蝶々(ちょうちょう)結び」「4の字固め」なども、①の延長線上に考えられるものである。そして、漢語の類例「櫛比」「雁行」「瓦解」「蛇行」「蝟集」「漆黑」「雪白」「牛歩」「牛飲馬食」「豚死」「獅子吼」などがこれらに連続している。

このような比喩を内蔵した複合語は、成分の種類や結合のしかた、その意味などから、外国人の興味を引きやすいが、用例や用法に大きな制限があるので、教育上はとくに配慮が必要である。

β 意味を中心にしたN⇒V構造(a型)の分類

①動作 Nヲ/ガ/ニ…Vスルコト(行為名詞)

麦踏み、稲刈り、人通り、山焼き、まま子扱い、草取り、山くずれ、水汲み、魚釣り、紅葉狩り、棒倒し、鉋かけ、間違いさがし、雲隠れ、神もうで、墓まいり、堂々めぐり、人だのみ、水洗い、嫁とり、色抜き、

しみおとし、指切り、国とり、日もち

これらは、「麦ヲ踏ムコト」「まま子トシテ扱ウコト」などの意味で、もとの動詞句の意味がそのまま無限定的に名詞化している。通時的に見てももともと生産的で一般的な型である。この型が使われる代表的な文型としては、

～ヲスル、～ガアッタ、～ガ上手ダ、～ガ早イ、～シヤスイ、～ニ行ク/来ル

などが挙げられる。この類の中には「姉さんかぶり」「尻はしより」のように、状態性の意味で使われるものがある。

②動作主 Nヲ/ガ/ニ…Vスル人/物/器具/機械など(行為者名詞)

御用聞き、釜たき、飯たき、ふんどしかつぎ、部屋住み、かごかき、月給とり、車ひき、舵とり、歌うたい、刀持ち、物売り、墓守り、たいこもち(以上、人);日まわり、馬ごやし、猫じゃらし(以上、植物);釘抜き、竿ばかり、軸受け、油さし、姿見、泥よけ、ねじまわし、紙ばさみ、花立て、ひげそり、靴すべり、ねずみ取り、墨入れ、手拭い、耳かき、腰かけ、炭取り、茶碗あげ(以上、器具など)

このような分類にも、現実には「人殺し」や「借金取り」のように、①か②か具体的な文脈の中でしか決定できない場合があることに注意しなければならない。文型としては、

～ヲ使ウ、～ヲシテイル

などの形で使われることが多い。

③時期 Nヲ/ガ/ニ…Vスルトキ

昼下がり、夜明け、日暮れ、事始め、冬ざれ、御用納め
～ニナル、～ヲ迎エル などの形で使われることが多い。

④場所 Nヲ/ガ/ニ…Vスルトコロ

木立(ち)、海沿い、山寄り、車寄せ、靴ぬぎ、村はずれ
～ニ着ク、～へ行ク、～ニイタル などの形で使われることが多い。

⑤状態 Nヲ/ガ/ニ…Vスル(シタ)ヨウナヨウス

山よろけ(珪肺病)、二日酔い、底抜け、顔負け、狸ねいり、一本だち、

箱入り，目白おし，つむじ曲がり

～ニナル，～スル，～ノ状態デ などの形で使われることが多い。

b N⇒V>V（動詞となるもの）

泡立つ，ころろぎす(志)，目立つ，おもむく，みのる，根づく，もとづく，手なれる，気づく，裏がえす，渦巻く，秋づく，名づける，とざす，土^か養う，目差す，空とぼける，うそぶく，よみがえる，口ずさむ，したたる，垣間見る，波立つ，野飼う，ぬかずく，あがく，巢立つ，裏切る，名のる，手控える，かたづく，端おる，神がかる，下まわる，横切る

語種別に分けると，

和語：私する，あだする，汗する，涙する，物する，罪する，糊する，たむろする，位する，よわいする，あたいする，枕する（以上，文語的）

恋する，すまいする，えこひいきする，旅立ちする，くみする（以上，居体言＋スル）

漢語：研究する，散歩する，旅行する，催促する

外来語：スケートする，キャンプする，マッチする，プロムナードする，チャレンジする

などが挙げられる。ここには，〔動作名詞＋スル〕の形で，サ行変格活用になるものだけを挙げた。本来「スル」の前には動作名詞しか立たないので，「花スル」「鶏スル」「机スル」「宇宙スル」「冷蔵庫スル」「テーブルスル」「ルームスル」などは成立しない。「哲学スル」「ジャンプスル」「クリームスル」などはドイツ語や英語の影響で生まれたものかもしれないが，「ジャンプで洗う」「クリームをつける」などの簡略化された表現とも考えられる。「糊する」「枕する」などは漢文調の表現で，現在はあまり用いられないので，上記の「文語的」としたものはいずれにしても問題にする必要はない。

c N⇒V>AD（副詞となるもの）

夜どおし、根（こん）かぎり、根こそぎ、一とおり、一わたり、心もち
数は多くない。

(2) $V_1 \Rightarrow V_2$ 構造

a $V_1 \Rightarrow V_2 > V$ (複合動詞となるもの)

勝ち誇る、塞^せぎとめる、思いあまる、逃げのびる、歌いまわる、想いそ
める、働きとおす、入りまじる、立ち働く、さらけ出す、照らし合わせ
る、思い当たる、こごえ死ぬ、汲み上げる、ひきずり込む、しこみはじ
める、追いかけまわす

上の例の多くは「 V_1 シテ V_2 スル」「 V_1 シナガラ V_2 スル」「 V_1 スルコトニ
ヨッテ V_2 スル」などの意味である。しかし、「降りやむ」が「降ルノガヤ
ム」、「しこみはじめる」が「しこみヲ始メル」、「働きとおす」が「働クコト
ヲ最後マデツヅケル」であるように、前項動詞が名詞的に使われている複合
語も少なくない。また「どなり散らす」のような例では、後項の「散らす」
が接尾辞に近づいていて、独立の V_2 としての働きを失っており、「荒々しく、
(またはむやみに) V_1 する」というような意味になっている。一般に、この
 $V_1 \Rightarrow V_2$ の構造では、 V_1 が V_2 の連用修飾語となっていて、 V_2 の動作の理由・
条件・対象などを示している。そして、 V_1 と V_2 の順はおおむね固定的である。
この類には、「-込む」「-出す」「-やむ」「-返す」「-合う」「-切る」等々
を後項にもつものが多い。これらの後項は、動作の開始・継続・完了・徹
底などのアスペクト、上昇・下降・収斂・付着などの方向（中国語では趨向
動詞が担当する）を示す働きを有している。したがって、「ひきずり込む」
「追いかけまわる」のように、 V_1 がすでに2成分以上から成る複合語であ
る場合もある。このような後項としてよく用いられる成分を挙げておこう。

-込む	-きる	-かえず
-こめる	-あげる	-かえる
-つける	-さげる	-はる
-つく	-かける	-まわる
-たつ	-かかる	-ぬく
-たてる	-だす	

(『岩波国語辞典』による結合例数順上位項目)

b $V_1 \Rightarrow V_2 > N$ (複合名詞となるもの)

建てかけ、歌いおわり、降りどおし、食べぞめ、駆け走り、はたき出し、すくい投げ、あびせ倒し、食いすぎ、働きづめ、病みあがり、渡りぞめ、切りこみ、踏み切り、飛びこみ、飛び出し、切り出し、読み切り、立てつづけ、植えこみ、立ち上がり、売り上げ、売り出し、貸し切り、立ち遅れ、割り引き、詰め合わせ、申し込み、受け付け、立ち枯れ、釣り合い、成りゆき、話し合い、住み込み、生き残り、立ち入り、立ちまわり、建て売り

例の多くは、前項と後項の結合による複合動詞の全体が名詞化したものであるから、「建てかける」「歌いおわる」「はたき出す」「立ち遅れる」のような動詞が同時に存在するのであるが、「病みあがる」「建て売る」のように、対応する動詞が使われないものもある。「降りどおし」のように名詞では連濁が起こっていても、動詞は「降りとおす」のように連濁にならないものが多く、複合語の中でも、名詞と比べると動詞の方は結合度が低いと考えられるのである。

国技の相撲の「手」の名称をはじめとして、頻用される名詞も多く、「送り仮名の付け方」(昭和48年6月1日 内閣告示第2号)では、読み間違えるおそれのない場合は送り仮名を省いて、「受付」「踏切」「売出し」「申込」「乗換え」(「乗換」)のように表記してもよいとされている。慣用の固定しているものや誤読・難読のおそれのないものというのが条件であって、複合動詞の方については、少なくとも末尾の活用語尾を仮名書きしなければならない。

(3) $NA \Rightarrow V$ 構造

$NA \Rightarrow V > N$ (形容動詞語幹+動詞連用形で複合名詞になるもの)

馬鹿騒ぎ、きれい好き、急ごしらえ、にわかじこみ、無茶食い、生意気盛り、無理押し、無理強(じ)い

(4) $A \Rightarrow V$ 構造 (形容詞語幹+動詞連用形)

a $A \Rightarrow V > V$ (複合動詞になるもの)

近寄る, 近づける, 近づく, 若返る, 遠ざかる, 遠ざける, 遠のく, 高鳴る, 長びく

b A⇒V>N (複合名詞になるもの)

浅づけ, 甘干し, うま煮, 嬉し泣き, くやし泣き, 苦しまぎれ, 高とび, 近まわり, 遠まき, 遠まわり, 長もち, 長わずらい, 長生き, 早寝, 早じまい, 若書き, 若作り, 若死に, 早とちり, 早のみこみ, 遅出, 深追い, 深入り, 薄着, 悪のり

この型の例はあまり多くない。なお、「大笑い」「大入り」などの「大(おお)-」は意味上は「大きい」と関係があるが、接頭辞と考えた方がよいので、後の派生語の項で扱う。

(5) AD⇒V構造

a AD⇒V>N (複合名詞になるもの)

又聞き, 又貸し, にたにた笑い, ぴょんぴょん跳び, なおなお書き, 追って書き, ちょっと見, ぼっと出, よちよち歩き, きりきり舞い, ぐるぐる巻き

一般の副詞を成分とするものは数が限られているが、音象徴語を成分とするものは自由に造られる余地がある。

b AD⇒V>V (音象徴語+サ変動詞スル)

もたもたする, ごわごわする, よろよろする, きらきらする

前項は音象徴語で後項はスルに限られる。「もたもたする」には「もたツク」, 「ごわごわする」には「ごたツク」, 「よろよろする」には「よろメク」, 「きらきらする」には「きらメク」などの派生動詞が対応している。

(6) N⇒NA構造

N⇒NA>NA (複合形容動詞)

身ざれい(ナ), 物好き(ナ), 物静か(ナ), 世話好き(ナ), 五体満足(ナ), 口下手(ナ), 身勝手(ナ), 口不調法(ナ), 足まめ(ナ), 目深(まぶか)(ナ)

この型の例は多くない。

(7) $N \Rightarrow A$ 構造

a $N \Rightarrow A > A$ (名詞+形容詞)

心細い, 毛深い, 物さびしい, 名高い, 腹黒い, 口汚い, 情け深い, 奥深い, 口うるさい, 耳ざとい, 口堅い

b $N \Rightarrow A > NA$ (名詞+形容詞語幹で複合形容動詞になるもの)

身近(ナ), 端近(ナ), 色白(ナ), 口軽(ナ), 幅びろ(ナ), 尻軽(ナ), 物柔らか(ナ), 気長(ナ)

この型の「間遠」や「幅広」には形容詞と形容動詞の両方の用法がある。また、「足軽」「目白」「頬白」のような名詞のものが少数存在する。「ゴム長」は見掛け上この型に属するように見えるが、「ゴム⇒長靴」の下略によって出来た形である。

(8) $V \Rightarrow NA$ 構造

$V \Rightarrow NA > NA$ (複合形容動詞)

話し上手(ナ), 聞き上手(ナ), 使い勝手(ナ)

例はきわめて少ない。

(9) $V \Rightarrow A$ 構造

$V \Rightarrow A > A$ (複合形容詞)

みにくい, 読みやすい, くみしやすい, 住みにくい, 話しづらい, ありがたい, 近づきがたい, 侮りがたい, 度しがたい, 残り惜しい, 待ち遠しい

この型の例も多くない。(8)や(9)の型の後項のNAやAは多分に接尾辞的である。

(10) $NA_1 \Rightarrow NA_2$ 構造

$NA_1 \Rightarrow NA_2 > NA$ (複合形容動詞)

馬鹿正直(ナ), 器用貧乏(ナ), きれい好き(ナ), 勝手気まま(ナ)

語例はきわめて少ない。

(11) $NA \Rightarrow A$ 構造

$NA \Rightarrow A > A$ (形容動詞語幹+形容詞で, 複合形容詞になるもの)

阿呆くさい、陰気くさい、馬鹿くさい、面倒くさい、けちくさい、そぞろ寒い

語例は極めて少ない。

(12) $NA \Rightarrow N$ 構造

$NA \Rightarrow N > N$ (形容動詞語幹+名詞で、複合名詞になるもの)

気まま者、馬鹿者、蓮っ葉娘、きれい事、馬鹿話、野蛮人、安全弁、老練者、邪魔物、不調法者、無法者、不埒者、無骨者、親切心、未熟者、粗悪品、風流心、悲愴感、勇猛心、不精者、自在鉤、尻軽女、まめごと、さかさまごと、そぞろ心

〔～+名詞〕の圧縮形であるから、構成例はわりに多いが、「-者」を後項とするものがとくに多いことが特徴的である。

(13) $A_1 \Rightarrow A_2$ 構造

$A_1 \Rightarrow A_2 > A$ (前項形容詞は語幹形である)

青白い、細長い、太短い、古くさい、痛がゆい、せま苦しい、のろくさい、あまちょろい、浅黒い、堅苦しい、重苦しい

シク活用を成分とするものは極めて少なく、前項に立つ例はない。

(14) $V \Rightarrow N$ 構造

$V \Rightarrow N > N$ (動詞連用形+名詞を成分とする複合名詞)

着物、焼き物、買い物、乗り物、食べ物、腫れ物、見物(みもの)、働き者、渡り者、切れ者、しごと、出来事、もめ事、ぬれ事、泣き言、恨み言、切り口、落ち葉、下り坂、曇り空、通り雨、招き猫、裂きいか、むきえび、離れ島、はげ山、焼き芋、釣り糸、落ち鮎、教え子、割り箸、恋女房、去り状、せり市、立ち葵、出しがとお、決まり文句、引き金、下げ緒、のぼり竜、切り株、痛め吟味

～スルN、～シタN、～ノNなどの意味で、該当例はたいへん多い。

(15) $AD_1 \Rightarrow AD_2$ 構造

$AD_1 \Rightarrow AD_2 > AD$ (複合副詞)

二度とふたたび、とてもかくても、なおかつ

例は極端に少ない。

(16) **AD⇒N**構造

AD⇒N>N (複合名詞)

とんとん拍子, ただ事, にこにこ顔, ただいま, 又いところ
やはり例は少ない。

(17) **AD⇒A**構造

AD⇒A>N (形容詞語幹を成分とする複合名詞)

ごく細, ごく安, ごく太

例は極端に少ない。「格別」「割に/割と」の省略形を成分とする「格安」「割高」を類例と考えることができる。

(18) **A⇒N**構造

A⇒N>N (複合名詞)

高山, 高値, 広場, 軽石, 深情け, 長雨, 浅瀬, 広縁, 厚物, みじか
夜, 嬉し涙, くやし涙, 強腰, 弱気, 悪知恵, 近道, 遠目, 遠縁, 安普
請, 遅知恵, くらやみ, 早かご, 黒くも, 甘鯛, 軽わざ, 早鐘, 近ご
ろ, 堅炭, 薄色, 薄墨/深海, 賢人, 美女, 長江, 痛事, 小品, 高層,
難関, 麗容, 金城, 強力, 短刀, 真理, 大道

もともと ~イ+N の修飾・被修飾の関係と対応する複合語であるから例はたいへん多い。例の後段に挙げたのは漢語であるが、これも枚挙にいとまがないほどである。しかし、外来語にはほとんど見当たらず、わずかに「ハイ・センス」「ロー・コスト」などがあるだけで、しかもこれらも日常一般に使われるものではない。形容詞「大きい」「多い」を前項とする場合は、「おお-」となり(「大男」「大橋」「大勢」など)、「小さい」を前項とする場合は、「こ(小)-」「お(小)-」となる(「小男」「小山」「小島」;「小野」「小川」「小山田」など)ので注意が必要である。

(19) **N₁⇒N₂** 構造

N₁⇒N₂>N (複合名詞)

金物, 糸くず, まな板, 風呂桶, 目玉, 足首, 山桜, 葉桜, 根もと, に

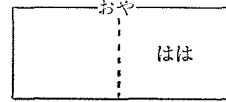
しみなみ、ごまあぶら、石橋、湯けむり、雪男、夢枕、耳垢、麦わら、
米ぬか、露地野菜、花芽、浜木綿（はまゆう）、波板、歯医者

この型の語例は極めて多く、複合名詞の大多数がこれに属する。ここでは、前項Aと後項Bの関係から、これらの複合名詞を2類に分けて考えてみよう。

a AデアルB

①AよりもBの方が意味の上で広い場合（AはBの1部である）

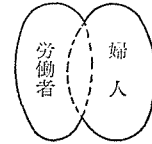
母親、ひなどり、うじ虫、宝物、汁物、反物、
仮名文字、消火作業



「N+物」「N+事」の構成では、この①に属するものが多い。

②AとBの指す範囲が異なる場合

婦人労働者、少年鼓手、紙くず、枕木、玉虫、鏡
餅、笠雲、花嫁、糸杉、坊主山、石畳、脂汗、糠
雨、鬼百合、殿様蛙、姫垣



上に挙げた語例の中には、比喩的な構成になっているものが多い。「花嫁」は「花ノヨウニ美シイ嫁」という意味である。同様に「糠雨」は「糠ノヨウニ細カイ雨」という意味である。上例中には、Aがたとえ（〈喩義〉という）で、Bがたとえられるもの（〈本義〉という）になっているものが多い。これとは反対に、Bがたとえになっているものも考えられる。「人波」「火花」「竹馬」「舌つづみ」「民草」「人垣」「花吹雪」「槍ぶすま」「口車」「穂波」などがその例である。しかし、これらは「波ノヨウニヨセテハカエス人の群れ」という比喩構成と考えるよりは、単純に「人ノ波」とか「人ニヨル波」とか「人デデキテイル波」のように、AノB、AニヨルB、AデデキテイルB と解釈する方が、日本語の語順にかなっていてよいであろう。

b 前項Aが後項Bに関係のあるものごとを示している場合

①主体 AガBスルコト

酸素欠乏、地盤沈下、交通渋滞、為替暴落、大気汚染

②対象 AヲBスルコト, Aヲ…スルタメノB

テレビ修理, 虫めがね, 入学式, 北海道旅行, 日本一周, 言語研究, 歯ブラシ, 里心, ガラス工場, 花籠, ビールびん

③道具・手段 Aデ(ニヨッテ)Bスルコト, Aデ…スルB

トラック輸送, 電話連絡, ペン習字, 蒸気機関車, 光ファイバー通信

④材料 AデデキテイルB

ゴムまり, わら草履, 草ぶえ, 竹筒, ビニール袋, ガラス窓, 笹舟, 木づち

⑤原因・理由 Aノタメニ/ガ原因デBスルコト, Aガモトデ生ジタB

事故死, ガス中毒, 競馬成金, 水害, 光化学スモッグ, 塾アレルギー, 結婚ノイローゼ, 鉛筆ダコ, 大陸ぼけ

⑥場所 AニアルB

山道, 江戸屋敷, 村人, 庭石, 海底火山, 山ざくら, 奥歯, 前庭, 裏門

⑦時間 Aノ時期ニ…スルB, Aノ期間Bスルコト, Aノ期間…サレタB

春雨, 秋風, 朝ごはん, 新年宴会, 菜種つゆ, 彼岸花, 三日坊主, 百日天下, 万年床, 夜ざくら, 昼あんどん, 千日手, 宵宮, 年男

⑧性質など Aノ性質ヲモツB, AラシイB

雨模様, 親心, 娘心, 老婆心, 男気, 猿芝居, 闇取引, 鯰ひげ, 後家鞆, 女坂, 姫垣

この⑧には比喩・類推の働きの認められるものが多い。先にaの②の項で「花嫁」を例にして説明したとおりで、前項Aが喩義、後項Bが本義である。

なお、上記以外のAD⇒NA, N⇒AD, V⇒AD, A⇒AD, NA⇒ADなどの組み合わせは、例が極端に少ないか、例がないかで、語彙の研究や教育においては考慮しなくてもよいだろう。(例。「きれいさっぱり」「今なお」「ひとまず」)

7-8 並列構造のいろいろ

「ちははは」「よみかき」のように、複合語のうち、語を構成する成分が互いに対等の資格で並列しているものを並列構造（等位構造）という。並列構造においては、連濁その他の変音現象が起こらないという大きな特徴がある。このことは、統語構造の複合語や次にとりあげる畳語と比べると、成分の結合がややゆるやかであるということになるが、それは成分自体がどこまでも対等であるから、変音を拒む自立性を保持しているためである。以下、この構造の語の諸相について考えてみる。

(1) 類義成分を並列させたもの

名詞 N=N'

和語：手足、まごこ、家屋敷、女子供、雨かぜ、くさき、つきひ、糸竹（いとたけ）、つみとが、野山、田畑、顔かたち、かれこれ、波風、目鼻、弓矢、えだは、あしこし、杖はしら、夢まぼろし、湯みず、ちりあくた

漢語：道路、海洋、山岳、丘陵、河川、牛馬、鳥獸、語詞、船舶、草木、岩石、墳墓、土砂、父兄、衣服、都市、胃腸、手腕、金銀、家屋、法規、基本、粉塵、源泉、庭園、階段、皮膚、天空、妻子、宮殿、仇敵、兵卒、糞尿

混種語：民百姓、犬畜生、戸障子

動詞 V=V'

和語：恋いこがれる、忌み嫌う、歎き悲しむ、媚びへつらう、へりくだる、奪い取る、教えさとす、うけたまわる、跳びはねる、こいねがう、居すわる、矯め直す、もらいうける、あわてふためく、見守る、凝り固まる、恐れおののく

（居体言のみ）より好み、分けへだて、飲み食い、うけこたえ

漢語：歩行スル、回転スル、応答スル、露出スル、上昇スル、請求スル、延長スル、変化スル、拡大スル、貯蔵スル、縮小スル、選択スル、増加スル、教育スル、生長スル、死亡スル、落下スル、解消スル、

飛翔スル、惑溺スル、恋慕スル、愛惜スル、考慮スル、苦惱スル、
終了スル、開始スル

形容詞 $A=A'$ (漢語は NA となる)

和語：細長い、太短い、重苦しい、堅苦しい、暑苦しい、痛がゆい

この例は、統語構造 $A_1 \Rightarrow A_2$ とも考えられるであろう。

漢語：善良ナ、劣悪ナ、聡明ナ、詳細ナ、美麗ナ、俊敏ナ、温和ナ、安楽
ナ、狭小ナ、広大ナ、清潔ナ、濃厚ナ、卑俗ナ、公明正大ナ、豪放
磊落ナ

最後の2例は、 $NA=NA'$ である。

和語形容詞で確実な並列構造の例は挙げにくい。混種語成分としては「気
随気ままナ」「勝手気ままナ」などが挙げられる。

なお、類義の副詞成分の並列の例としては、「しんねりむつつり」「ずんぐ
りむっくり」などが考えられる。「見ず知らず」「思わず知らず」は、類義の
連語が並列した例である。

(2) 対義的な成分を並列させたもの

名詞 $N_1=N_2$

和語：うみやま、ちちはは、おやこ、うらおもて、みぎひだり、あさゆ
う、かげひなた、うえした、あめつち(天地)、よるひる、あとさ
き、やまかわ、まえうしろ、みょうと(め=おと、妻=夫)、たてよ
こ、淵瀬、にしひがし、うちそと

漢語：天地、左右、内外、前後、首尾、表裏、陰陽、男女、上下、昼夜、
水陸、山河、古今、本末、文武、禍福、師弟、因果

動詞 $V_1=V_2$

和語：立ち居、あけしめ、寝起き、生き死に、出入り、出はいり、出し入
れ、のりおり、上り下り、あげさげ、あげおろし、やりもらい、行
き来、やりとり、読み書き、勝ち負け、受け渡し、曲げ伸ばし、照
り降り、浮き沈み、はやりすたり、みちかけ、貸し借り

漢語：開閉スル、出入スル、点滅スル、伸縮スル、増減スル、乗降スル、

終始スル、加減スル（進退、加除、起居、勝敗、生死、存亡、干満、着脱、死活）

形容詞 $A_1=A_2$ 対義成分の並列構造は、名詞的性格になるものが多い。

動詞成分の「進退」「生死」なども名詞的である。

和語：たかひく、ながみじか、よしあし

漢語：大小、多少、軽重、明暗、虚实、正邪、曲直、善悪、美醜、遠近、紅白、黑白、長短、遲速、早晚、深淺、広狭、濃淡、親疎、粗密、高低、繁簡、強弱、緩急、貴賤

その他、これに類するものとして「出ず入らず」「好き嫌い」などが考えられるが、全体として和語の例は少ない。

並列構造には、外来語の例はなく、混種語の例も極端に少ない。

7—9 疊語（重複構造）

一般に、言語には語全体を重複させて別の語を造る手段があって、重複によって生まれた語は〈疊語〉と呼ばれている。ラテン語の jamjam（早速）は jam（今）の疊語であり、英語の puff-puff（ポッポ、汽車ポッポ）は puff（プッと吹くこと）の疊語である。また、インドネシア語の mata-mata（スパイ、探偵）は mata（眼）の疊語形である。puff-puff の例に見られるように、音象徴語に疊語が多いこともまた多くの言語に見られる現象で、同音同形の繰り返しによる高い表現性が契機になっている。日本語は、インドネシア語などとともに疊語の多い言語と見られる。

疊語には、名詞の場合は多数性（山々）、動詞の場合は動作の反復継続（泣く泣く）や完了または過去（ラテン語 currō 'I run.' の完了形 cucurri 'I have run.」）、形容詞・副詞の場合は比較級（イタリア語 pronto pronto もっと早い/早く）を表すという一般的傾向があるが、これらを通じて疊語に副詞性を強めるという通有性を認めることができるであろう。

上に挙げたものはすべて独立のある単語（「山」など）を重複させたものであるが、広義の疊語には、

音素 音節 語根 語幹 連語(句)

などを重複させて出来たものも含められる。厳密に言うときは、音素や音節については〈疊音〉が、連語(句)の重複については〈疊句〉が用いられることもある。日本語の疊語を語種別に観察すると、和語と漢語にはあるが、外来語にはないことがわかる。また、音象徴語を除けば、連濁が起こるのが普通である。

(1) 名詞 N+N

山々 家々 所どころ 村々 町々 隅ずみ 角かど くまぐま 津々
浦々 峯々 瀬ぜ 国ぐに 寺でら 端ばし (以上 場所性名詞)

神がみ 人びと 我々 蝶ちょ(う) (以上 神格・人格・動物性名詞)

色々 くさぐさ 品じな 様ざま (以上 種類様態の名詞)

日び 月づき 年どし 前々 時どき のちのち あとあと 昔々 先
ざき (以上 時間性名詞)

いついつ これこれ それぞれ(我々) (以上 代名詞)

このような名詞成分の疊語形は、よく〈複数〉‘plural’を表すと言われる。疊語形式によって複数を示すという手段は前述のインドネシア語や中国語にも見られる。しかし、有名な孟浩然の『春暁』の承句「處處聞啼鳥」に見られるように、中国語の疊語形式は単なる複数というよりは、「すべてのN」を意味する総数であり、この場合は「いたるところ」のように訳されるべき複数である。現代中国語の niánnián (年々、「毎年」)や rén rén (人々、「どの人も、誰もが」)にもその総数性が生きている。したがって、先の「處處」を訓よみに転換した「ところどころ」では誤訳になってしまうのである。『土左日記』の終章の「京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけて来れば、ところどころも見えず。京に入り立ちて、嬉し。」の「ところどころ」はソコカシコという意味であって、everywhere や all the places の意味ではない。

一体、日本語の名詞の疊語形式は、総数や汎数を示しているのだろうか。古代から現代にいたるまでよく使われる疊語形式を考えてみると、それが意

外に少ないことがわかるであろう。

ほとけほとけ やしろやしろ 花ばな 虫むし 馬うま 胸むね 瓦か
わら 鳥どり 海うみ 車くるま 左ひだり 彼女々々 やっこやっこ
机つくえ

などの例は見当たらない。さて、先に挙げた畳語の例によって、次の5点の特徴を指摘することができる。

- a 日本語の名詞の中には、畳語形式によって複数を表すものがある。
(「日本語には名詞の複数を表す手段に畳語形式がある」という記述は正しくない。)
- b 畳語形式をもつ名詞は基本的な語で、よく用いられるものであり、地理・地形に関するものが語例の半ばを占め、その余の名詞も、時間・神・人などに関するもの、および種類を指すものであって、意味分野の上では極端なかたよりが見られる。
- c 価値なきもの、卑小なものを指す名詞には畳語形式が見当たらない。
- d 3拍以上の語には畳語形式が造りにくい。(例外. 所どころ, あさな あさな, 心ごころ)
- e 複数を表す場合は、単なる2以上を示すのではなく、かなりの多数を表す。 $1+1+1+\dots+1=n$ のように、個性を残しつつその類の多数を指す〈複個数〉を表象していると考えられる。

ともかく、多くの名詞の中で畳語形式をもつものが極端に限られているという事実は重視しなければならない。

上に述べたe項について、いまして説明を加えよう。講演を聴きに会場に集まった何百人という聴衆のうち、入口のところにいた2人を指して「人びと」と言うのだろうか。街なかに火災が発生して、ただの2軒が焼けた場合に「焼けた家いえ」と言うのだろうか。「神がみ」は「多くの神」のことで、2柱や3柱の神の場合には使えない。「人びと」「家いえ」などと言うときも、「かなりの人数」「かなりの軒数」が問題になっているのである。つまり、日本語の畳語形式による複数は、西欧語の文法における複数(2以上, 1で

ない多)を示しているのではなく、もっと多くの数('several'以上)を、場面に応じて表していると考えられるのである。しかも、この畳語による複数性の指示は「神がみ」「人びと」「山やま」に典型的に見られるように、「神の集団」とか「すべての山」とかのまとまりよりも、個々の神の集まり、個々の山の群れといった個性や個別性に基礎をもっているように思える。「この神あの神」「こちらの山あちらの山」の延長なのである。つまり名詞の畳語形複数は<個として認識されたものの累積>なのである。「虫むし」「指ゆび」「壁かべ」などが、自然な日本語の表現には登場しないのも、多分このような日本語の畳語の個性指示・多数性指示と深い関係があることであろう。強い関心をもたれることの少ない、価値少なきモノに対して、複個数を使ういわれがないからである。卑小・無価値のモノには、もともと単数・複数の別すら要しなかったであろう。

名詞の畳語形式は「神がみ」のように多数性を表すだけのときと「山やま」のように名詞の多数性と副詞性とを併せもつときと、「なかなか」「なみなみ(と)」「どろどろ」「うねうね(と)」「やみやみ」「こなごな」のように副詞性だけをもつときとがあって、もとの名詞の意味や語性との関係による分化が見られることにも注意したい。(「花ばなしい」「鬼おにしい」「雄々しい」「空ぞらしい」なども、名詞の畳語形を基礎にしているが、これらには、「-シイ」という形容詞性接尾辞が後接しているので、後述の派生法の例となる。)

(2) 動詞 V+V

笑い笑い 泣き泣き 走り走り 歌い歌い 呼び呼び 売り売り (目を)こすりこすり 粽(ちまき)食べ食べ

動詞の畳語として、上に挙げたように普通連用形の畳語形式が用いられ、「…シナガラ」「…シツツ」「…スルー方デ」のように、動作の継続・反復を表しながら、その動作が後続の動詞によって示される動作と同時的・並行的に行われることを示す。この場合、動詞の畳語形式は連用修飾句として働く。一段活用やサ変の動詞では連用形が1拍であるものがあるが、その場合

には「見い見い」「しいしい」のように長音化して2拍にするのがならわしである。

じょうだんを見い見い捨てる鳥の羽（柳多留五）

くどく奴あたり見い見い側へ寄り（同上四）

柳之助はおのれの手先を見い見い葉山の顔を眺める（尾崎紅葉『多情多恨』前二）

なかに挟まれた私は疎くされるのを承知で、遠慮しいしいあの肥っていたおなかのあたりへ纏わったことだった。（幸田文『父』）

また、動詞の畳語の場合にも、通例2拍・3拍の動詞に限られるのであるが、時に、上記の1拍の動詞（しかし長音化して2拍になる）や4拍以上の動詞の例が見られる。

生きかわり生きかわりたたき直さなくてはならないのだそうである。

（幸田文『こんなこと』経師）

拍数のほかに、例外的に意味の上での制約がこの動詞畳語に見られる。それは「死に死に」で、反復の許されない「死ぬ」という動詞の意味に起因している。

動詞の畳語形式には、拍数や意味にもとづくこのようなわずかな制約が存するが、連用形の重複例はまことに広範に認められるので、語彙的事実というよりは文法的事実として扱われるのが常である。しかし、連用修飾句をなす動詞畳語とは別に、連用形畳語には次のような類がある。1つは「生き生き」式で、他は「思い思い」式である。「生き生き」式の例としては、

枯れがれ しみじみ 冷えびえ 懲りごり 惚れぼれ ぬけぬけ 浮き
うき 落ちおち ありあり おじおじ（怖ぢ怖ぢ） のびのび

などが挙げられる。これらは、そのままのかたちで、あるいは「-ト」または「-ニ」を伴って、副詞として用いられ、「いかにも～としたようすだ」「ほんとうに～する感じだ」という意味を表す。これに「-スル」が付いて動詞状にはたらく場合もある。

後者の「思い思い」式には「次つぎ」「とりどり」などがの例あるが、こ

れらは「思い」「次」「とり」がそれぞれ先に名詞（居体言）となり、それが重複したもので、いわば、 $N \times 2$ と考えられるものである。そして、この畳語形に「-ニ」が下接して副詞として用いられることが多く、次いで「-ノ」が下接して連体修飾語になることが多い。

動詞畳語について語彙的に注意すべき事項として、終止形重複をあげる必要がある。中世・近世初期には、

涙をこぼし泣き泣き致されます（狂言「茶盞拜」）

Naqui naqui vmareta, 1, Naqu naqu vmareta.

泣き泣き生まれた, 1, 泣く泣く生まれた。

（『ロドリゲス日本大文典』）

泣き泣きもよい方をとる形見分け（柳多留十七）

のように「泣き泣き」の形が見られるが、現代においても、

そこで泣く泣く声をあげて（中略）名前だけでも聞かせてやろうと（木下順二「絵姿女房」『夕鶴・彦市ばなし』所収）

のように、「泣く泣く」が時に見られる。このような終止形畳語には、「ますます」「かえすがえす」「おずおず（＜怖づ）」「おそるおそる」「見す見す」「見る見る」「ほうほう（＜匍ふ）」などがある。歴史的に見ると、上代においては、動詞の畳語はすべて終止形重複であって、

言ふ言ふ 思ふ思ふ 聞く聞く 知る知る すす たどるたどる 走る
走る ふるふるふる ゆくゆく わななくわななく

など、例が多く、今日の「ありあり」（「歴々」と表記される）にその痕跡を見ることができる。中古時代の平安中期に入って初めて、連用形重複が登場してくるのである。現代において、ナキナキと共存しているナクナクについては、単なる反復的同時動作の指示というよりは「ナキナガラモ」というような、逆接的ニュアンスや強度の悲観・困惑を表す副詞としての固定化が感じられるのである。

(3) 形容詞 A+A 語幹重複

うすうす たかだか ひろびろ やすやす ちかぢか ふかぶか
などは、いずれもク活用形容詞の語幹を重複させたもので、副詞的に用いられる。色彩形容詞の語幹重複形（あかあか、くろぐろ）もこの例と考えられる。これには、そのままのかたちで副詞として用いられるもの（うすうす、こわごわ、ちかぢか）と、接尾辞的な-トを下接しても用いられるもの（やすやす：やすやすト、はやばや：はやばやト）と、-トの有無が副詞としての意味の分化に対応しているもの（たかだかト：たかだか）、さらに-トや-スルを必ず従えるもの（ひろびろ-ト/-スル）などいくつかの類に分かつことができる。しかし、きよぎよ（清）、せまぜま（狭）、ひくびく（低）、おおお（多）、つよづよ（強）などは使われないし、「濃い」「酸い」のような1拍語幹の形容詞からも、「みじかい」「あたたかい」「こころよい」のような3拍以上の語幹をもつ形容詞からも語幹疊語が出来ないから、結局この重複例は2拍語幹の特別な形容詞に限られると見なければならぬ。また、「かなかなしい」「うれうれしい」や「たのしたのしい」「くわしぐわしい」がないように、シク活用形容詞からも疊語は出来ないのである。

語幹重複には、「長い」から出た「長々しい」のような語があるが、これについてはあとの〈派生語〉の項で触れる。

(4) 副詞 AD+AD

またまた もっともっと まだまだ まずまず なおなお いつもいつも
も いかにいかに どうもどうも どうぞどうぞ ギーコギーコ
ごろりんごろりん ぽっくりぽっくり

これらは、副詞が疊語になって、意味の強調・増幅をしている例である。「ギーコギーコ」以下は音象徴語であって、その前に挙げた一般語の例が限られているのに対して、いちじるしく例が多く、辞書に記載されていないものも少なくない。

(5) 感動詞 Int+Int

あらあら いやいや えへんえへん おいおい おやおや こらこら
これこれ さあさあ さてもさても ねえねえ やいやい わあわあ

感動詞自体はあまり多くないが、感動詞の性質として、たいていのものが
疊語形をもつことを指摘しておきたい。

(6) その他

連語または句が重複されたものがある。

知らず知らず あとからあとから

この例は極端に少ないが、準疊語もしくは擬似疊語と考えられるものとして、

負けず劣らず 思わず知らず 根掘り葉掘り にっちもさっちも おめ
ず臆せず 二度とふたたび 遮二無二 よかれあしかれ おそかれはや
かれ とつおいつ（「取りつ置きつ」の転と考えられる）

などが挙げられる。類義句を重ねたものと反義句を重ねたものがある。中
には「おめず臆せず」のように〈頭韻〉‘alliteration’も〈脚韻〉‘rhyme’
も踏んでいるものがあるが、脚韻だけを踏んでいるものが多い。連語・句で
はないが、

洗い浚い すじりもじり

なども、準疊語と考えられるものである。

いずれにしても、この(6)に挙げた疊語・準疊語は副詞的に働くものであ
る。

疊語に関連して、語根「ほの」を重複させた「ほのほの」などが考えられ
るが、これは〈造語法〉の項で扱う。また、文語動詞「分く」の語頭拍を重
複させたと考えられる「わわく」（疊音による造語）のようなものは、現代
日本語では例がないので、説明を割愛する。

7-10 派生語

派生語は〈派生法〉‘derivation, Ableitung, dérivation’によって生み出

された語である。派生法はまた〈接辞法〉‘affixation, Affigierung, affixation’とも呼ばれる。具体的には、基幹になる語形に各種の接辞が添加された語が分出されることを指している。日本語においては、上述のように、〈接中辞〉‘infix’の存在が認められないので、〈接頭辞〉‘prefix’と〈接尾辞〉‘suffix’だけが問題になる。

(1) 接頭辞

日本語の接頭辞は品詞を転換させる力をもたない。外国語においても、通例接頭辞は品詞転換の力をもっていないが、中には、英語の‘en-’(encase, enable, enslave など)やインドネシア語の‘pe-’(lihat 見ル→pelihat 予見者, minum 飲む→peminum 酒飲み)のように、動詞に転換させる接頭辞、名詞に転換させる接頭辞が存在する。

以下に、接頭辞を類別して例示し、用法を示す。詳しくは、『日本語教育事典』や一般辞書を参照のこと。

a 形容詞性接頭辞

おお- (大-) 大男 大広間 大入道 大匙 大穴(以上, 大キイの意); 大伯父 大旦那 大番頭(以上, 上位の意); 大騒ぎ 大けが 大声 大地震 大雪 大泥棒(以上, 程度甚シイ, 大量の意); 大づかみ 大筋(以上, 大略の意); 大みそか 大詰め 大本(以上, 極限の意); 大御所 大君(以上, 美称)

だい- (大-) 大会社 大失敗 大成功(以上, 規模大の意); 大歓迎 大混乱 大暴落(以上, 程度甚シイの意); 大宮司 大僧正 大司教(以上, 最高位の意)

たい- (大-) 大衆 大軍 大金 大差(以上, 数や量が多いの意); 大役 大任 大身(以上, 重クスグレティルの意)

こ- (小-) 小山 小刀 小粒 小柄 小犬 小男 小松(以上, 小サイの意); 小雨 小銭 小人数(以上, 僅・少・浅の意); 小一日 小百円 小一里 小半とき(以上, ホトンド~,

アト少シ足りナイ, 時間距離など); 小むすめ 小女 小才覚 (以上, ツマラナイ, 大シタモノデナイの意); 小ざっぱり, 小きれいな, 小ぢんまり (以上, 何トナクソノヨウナ感ジガスルの意); 小にくらしい 小うるさい(以上, チョット〜ト思ウ, 軽侮的)

お- (小-) 小川 小舟 小野 (名詞の前に付いて, 小・コマカイの意); 小暗い 小やみ十なく (形容詞・動詞の前に付いて, チョットの意)

しょう- (小-) 小都市 小企業 小人 小休止 (以上, 小サイ, 僅カノの意); 小生 小論 小官 小社 小職(以上, 自己に関して謙遜して用いる)

にい- (新-) 新妻 新盆 新学び

しん- (新-) 新時代 新幹線 新学期

ひめ- (姫-) 姫松 姫百合 姫のり

おに- (鬼-) 鬼百合 鬼水仙

さ- (早-/小-) さ夜 さごろも さ百合 さ(狭)霧 さわらび さ苗

はつ- (初-) 初日の出 初物 初節句 初値

うい- (初-) うい孫 うい陣 うい産

ま- (まっ-/まん-) (真-) 真心 真夜中 真昼 真人間 まっくろ まっ白 まっさお まっびるま まっただなか まんまる まん中

き- (生-) 生薬 生娘 生糸 生まじめ

こと- (異-) ことくに ことひと こと心

ひが- (僻-) ひが目 ひが耳 ひが事

す- (素-) 素足 素颜 素手

えせ- (似非-) えせ学者 えせ法師 えせざいわい

かた- (片-) 片親 片時 片手 片腕 片肺

くせ- (癖-) くせ者 くせ毛 くせ事

ほかに代表的な漢語接頭辞として「超-」（超特急，超能力），「半-」（半永久的，半道），「第-」（第一人者，第三段），「汎-」（汎神論，汎米主義），「数-」（数人，数十枚），「諸-」（諸特徴，諸事情），「各-」（各要素，各章）などが挙げられる。

接頭辞の中には「小首をかしげる」「小手をかざす」「小膝を打つ」「小耳に挟む」のように「小+身体部位名+助詞+動詞」の句型で「ちょっと首をかしげる」のような意味になるものがある「小鼻」と違って、「小首」「小膝」などは存在しない身体部位である。このような接頭辞は名詞の前に付いてはいるが，意味上は，後続の動詞を修飾する連用成分として働いていて，1種の慣用表現と見なされる。すべての接頭辞の例とは言えないが，類似の修飾構造のものに，「大口をあける」「深爪を切る」「深酒をする」「横車を押す」などがある。

b 待遇性接頭辞

お-（御-） おにぎり おうす お祝い おでかけ お宅 お返事 お役 お電話 お中元 お歳暮 おビール

「お-」はもともと和語に付く接頭辞であるが，和語に近い，日常語化した漢語・外来語にも付くことがある。

おん-（御-） おん身 おん中（ちゅう） おん礼

「おん-」は「お-」よりは敬意・丁寧の度が強く，やや改まった感じがある。

ご-（御-） ご本 ご機嫌 ご本人 ご気分 ごはん ご馳走 ご大層な

古い切支丹資料には「イエスのごバシヨ」（御受難）という例があるところからうかがえるように，「ご-」は漢語のほか外来成分と意識された語に付く接頭辞と考えられる。

み- み世 み仏 み心 み思い；み吉野 み空

ど- どえらい どぎも どまん中 ど根性 どあほ

わる-（悪-） 悪ふざけ 悪遠慮 悪のり

c 否定接頭辞

不- 不必要 不急 不たしか 不ため 不得意 不活発 不熱心

非- 非現業 非協力 非公開 非課税 非番 非行 非礼

無^ム- 無利子 無理解 無責任 無効 無賃

無^フ- 無事 無音 無愛想 無勢 無粹

「無粹(ぶすい)」は「不粹」と書かれることもある。「無器量」「無様」「無精」「無用心」なども「不-」と書かれることのある語である。

d 漢語性接頭辞

漢語の統辞法に従って形成された語で、接頭辞的と見られるもの

反- 反体制 反陽子 反主流 反証

抗- 抗日戦争 抗菌力 抗生物質 抗ヒスタミン剤

被- 被爆者 被告 被選挙権 被験者

再- 再放送 再登場 再選 再審請求

副- 副大統領 副社長 副本 副食

防- 防音壁 防臭剤 防曇レンズ

e 動詞・形容詞に添加される接頭辞

ほの- ほのめく ほのぎく ほの暗い

うち- うち見る うち解ける うちなびく

ぶん- ぶんなぐる ぶんながす ぶんどる

もの- もの語る もの悲しい もの静か

か- かぐろい かあおナル

け- け近い けざやかナリ けおされる

(2) 接尾辞

接尾辞の添加によって分出された派生語の品詞は、その接尾辞の性質によって決まる。つまり、接尾辞は接頭辞と違って、品詞を転換する働きをもっているのである。

a 名詞性接尾辞

ア 待遇表示

-さま(様) -さん -ちゃん -君 -どの(殿) -氏 -先生 など

イ 複数表示

-がた -たち -ら -ども など

「-がた」は尊敬すべき人に対して用いられるが、別に、割合・時間を表す「五割方減反」とか「晩方」とかの用法があり、所属を示す「敵方」「あちら方」のような用法もある。また、「-たち」は元来人間に対して用いられていたが、近年他の動物や植物・鉱物などの複数を示すために用いられることが増えてきた。しかし、これは俗な言い方であり、以前は「-ども」が用いられた。(例. ありたち 花たち 灯籠たち) 「-たち」には「達」が当てられることがある。なお、疊語の項で述べたように、日本語では卑小・無価値なものには、一般的に数表示をしないことに注意したい。

ウ 助数詞

-つ -り -個 -枚 -本 -匹 -杯 -頭 -尾 -羽 -目 -等
-両(輛) -艘 -隻 -台 -冊 -連(鉄橋) -ふり -さお など

数詞に付けて数を示す<助数詞> ‘counter suffix’ はアジアの言語の特徴の1つと考えられていて、日本語にも数が多い。かつてと比べるとかなり使用が少なくなってきたが、「-本」「-台」「-人」「-軒」などは活発に使われていて、使用を回避することはできない。中国語の影響で使用が広がったため、漢語が多く、外来語は「セット」「カップ」などが用いられることがあるが、教育的には無視してもよい。おおむね物に関して、その形状により使われる助数詞が固定している。「-本」「-匹」「-杯」「-羽」などは、前の数詞との関係で、/ホ・ボ・ポ/とか/ワ・バ・パ/のように形態音韻論的な交替が辞頭に見られるので、教育的に問題になる。

エ 人物表示

-人(にん) -人(じん) -者 -師 -家(か) -家(や) -士 -手(て)

-手(しゅ) -夫 -婦 -員 など

「芸人」と「芸者」は違い、「弁護士」と「弁護人」は違う。「運転士」「運転手」「運転人」も違う。「芸人」「芸者」のように1字漢語に下接するものは、早くに出来た漢語で、職種による固定が見られるのに対し、「弁護士」のような語は比較的新しい造語で、下に記すように、一定の資格試験に合格した人に与えられる専門的職業の呼称である。「弁護人」は特定の刑事事件を担当する弁護士のことであり、「-人」には、臨時的個別的担当者の意味あいがある。(例. 媒酌人, 代理人, 保証人) また「使用者」は労働者を使用する 'employer' であり、「使用人」は雇主によって使用される人, 'employee' であるというふうに、使役・被役の違いが見られる場合もある。次に、近年、増加した〇〇士の例を挙げよう。

弁護士 司法書士 行政書士 税理士 公認会計士 (旧称「計理士」)
社会保険労務士 特許技術士 弁理士 中小企業診断士 不動産鑑定士
土地家屋調査士 栄養士 管理栄養士 一級建築士 機関士 航海士
技能士 特許管理士 塗装技能士 アセチレン溶接士 自動車整備士
船舶機械士 細胞検査士 汽罐溶接士 歯科衛生士 無線通信士 療養
士 測量士 起重機運転士 通関士 心理判定士 解剖士 小型船舶操
縦士 英語通訳士 英語同時通訳士 英語ガイド通訳士 土木施行管理
技士 電気工事士 電気管理士 ボイラー技士 機械製図士 業務士
検眼士 保険設計士 視能訓練士 消防設備士 作業環境測定士 2級
管工事施工管理技士 2級販売士 機械加工・仕上げ2級技能士 液化
石油ガス設備士 造園施工管理技士 構造設計士 ストマ療士 総務管
理士 義肢装具士 作業療法士 理学療法士 言語治療士 など

オ 金員表示

-料 -費 -代 -賃

カ 店舗・建物表示

-屋 -店 -亭 -館 -舗

キ 抽象性質表示

-さ 高さ 美しさ 豊かさ たのもしさ

-み 高み 深み 強み 真剣み ありがたみ

概括的に言うと「-さ」は中立的に程度を示すもので、「高さ」に対して「低さ」が存在するが、「-み」の方は、積極的な指示の働きがあり、そういう性質をもっている部分・場所を示すという違いがある。したがって、「高み」は「高い所・丘・高地」を指し、「低み」という語はあまり使われないようである。「浅さ」に対する「浅み」もほとんど使われない。

-け 水け 寒け 食いけ おじけ

-げ 心細げ おもしろげ 迷惑げ

-く 思わく 言わく 老いらく

-性 体系性 封建性 抽象性 酸性 アルカリ性 吸湿性 向日性
夜行性

-化 近代化 機械化 合理化 オートメ化 無人化 鈍化 弱化
酸化

-主義 社会主義 理想主義 平和主義 公式主義 早起き主義 モ
ンロー主義 マイホーム主義 属地主義 楽天主義 事大主義

-子 分子 編集子 帽子 格子 菓子

-流 溶岩流 交流 当世流 観世流 自己流

-風 商人風 唐風 昔風 当世風 学風

-味(み) 醍醐味 人間味 甘味 酸味

-用 家庭用 学習用 化粧用 商用 社内用

-視 危険視 白眼視 重要視 同一視

-式 旧式 西洋式 イオニア式 化学式 結婚式 仏式 複式 略
式 本式

b 動詞性接尾辞

-がる うれしがる おもしろがる ほしがる いやがる

主として情意性形容詞の語幹に付く。「よがる」「痛がる」「かゆがる」「おもしろがる」「かわいがる」「こわがる」「けむたがる」「強がる」「憎がる」などを除いて、ク活用には付かない。

-ぶる 兄貴ぶる ハイカラぶる 学者ぶる

-ばむ 汗ばむ 気色ばむ ざればむ 黄ばむ

-じみる 垢じみる けものじみる

-やぐ 若やぐ 花やぐ あぎやぐ

-まる 広まる 高まる 深まる

-める 固める 強める せばめる

-たつ 勇みたつ 引きたつ いきりたつ

-だつ 泡だつ いらだつ 目だつ 殺気だつ

-る デモる サボる ネグる ツモる

-めく 春めく 時めく 色めく なまめく さざめく よろめく

-つく 病みつく 思いつく さびつく ひつつく ぐらつく ばらつく もたつく よろつく

「-めく」「-つく」には擬音語・擬態語の2拍語基に下接する例が多い。

c 形容詞性接尾辞

-い 黄色い 四角い

-しい 毒々しい なつかしい 大人しい 長々しい

-っぽい 埃っぽい 子どもっぽい いがらっぽい 艶っぽい 骨っぽい

-がましい 弁解がましい わざとがましい 恩着せがましい 晴れがましい

-らしい 男らしい わざとらしい しかつめらしい

現在、形容詞を生成する方法は5類ぐらいで大変限られているが、「-っぽい」（「多い」が語源と見られる）だけが頻用され、生産的である。しかし、これも口頭語的であるため、和語形容詞の造語力は全体として低いと見られる。

d 形容動詞性接尾辞

- な 蓮っ葉な 鉄火な 結構な あたりまえな ざっくばらんな
手頃な オリジナルな エポックメイキングな
- 的な 科学的な 日本的な 代表的な 浪花節的な ハムレット的
な
- やかな にぎやかな なごやかな まろやかな
- よかな ふくよかな すくよかな にこよかな
- らかな ほがらかな 高らかな なたらかな
- かな こまかな のどかな はるかな ひそかな

「-な」「-的な」な以外は現代ではほとんど生産力をもたなくなつたと考
えられる。

e 副詞性接尾辞

- と ころりと すくすくと 二度と 堂々と ぐっと わざと 割と
なんなりと
- に ことに まっしぐらに 今に 互いに 実に 特に 現に 暗に
やにわに 一概に 如実に ことごとに いやおうなしに スト
レートに
- 然 当然 突然 果然 自然= 欣然ト
- 上 事実上 形式上 経験上 手続き上

接尾辞についても、『日本語教育事典』や文法書・辞書などを参照して、
用例・用法の補いをしてほしい。

以上、派生法のおおよそに触れ、接辞の主なものを挙げたが、全体として
現代日本語においては、接辞類があまり多くなく、派生語も相対的には少な
い。ドイツ語の‘fahr-’は「行ク」の意の動詞語基であるが、この語基から、

ab-fahr-en (出発する)

Un-er-fahr-en-heit (未熟さ)

auf-fahr-en (のぼる)

2 ANDER - ASCH

un ver	Änder t		'um arbeit en	
			Um arbeit ung	
sich ab	Ängst ig en		ver arbeit en	
be	Ängst ig en		Ver arbeit ung	
Be	Ängst ig ung		Vor arbeit	NF
ver	Ängst ig en		vor arbeit en	
			Vor arbeit er	
ver	anker n		weiter arbeit en	
Ver	anker ung		Zusammen arbeit	NF
			Zusammen arbeit en	
Aussen	antenne	NF	sich her an arbeit en	
Innen	antenne	NF	sich her auf arbeit en	
			sich hin auf arbeit en	
	be antwort en		her aus arbeit en	
Be	antwort ung		sich hin durch arbeit en	
Rück	antwort	NF	sich hin ein arbeit en	
Über	antwort en		ent gegen arbeit en	
UEber	antwort ung		un ver arbeit et	
	ver antwort en			
sich ver	antwort en		Innen architekt	NM
	ver antwort lich		Innen architekt ur	NF
Ver	antwort lich keit			
Ver	antwort ung		ver arg en	
ver	antwort ung s los		'ver Ärg er n	
Ver	antwort ung s los ig keit		Ver Ärg er ung	
ver	antwort ung s voll		sich her um Ärg er n	S
un	be antwort et			
mit	ver antwort lich		be arg-wöhn en	
Mit	ver antwort ung			
un	ver antwort bar		erz arm	A
un	ver antwort lich		Neben arm	NM
Un	ver antwort lich keit		Ober arm	NM
			um'arm en	
ver	Äppel n	S	Um arm ung	
			Unter arm	NM
un	appetit lich		ver arm en	
			Ver arm ung	
ab	arbeit en			
sich ab	arbeit en		UEber Ärmel	NM
auf	arbeit en			
aus	arbeit en		Ab art	NF
sich	aus arbeit en		ab art en	
Aus	arbeit ung		ab art ig	
be	arbeit en		aus art en	
Be	arbeit er		Aus art ung	
Be	arbeit ung		ent art en	
'durch	arbeit en		Ent art ung	
'sich	'durch arbeit en		miss art en	
ein	arbeit en		Miss art ung	
Ein	arbeit ung		nach art en	
'er	arbeit en		rück art ig	
Er	arbeit ung		Un art	NF
hin	arbeit en		un art ig	
los	arbeit en		Un art ig keit	
Mit	arbeit	NF	Unter art	NF T
mit	arbeit en			
Mit	arbeit er		Ober arzt	NM
nach	arbeit en		Unter arzt	NM
Neben	arbeit	NF	ver arzt en	S
Über	'arbeit en			
sich	Über'arbeit en		ent asch en	
UEber	arbeit ung		Ent asch ung	

1. Total inventory of morphemes in the corpus¹⁶

1.1. All morphemes listed in descending order of lexical frequency

	LF	TF	T		LF	TF	T		LF	TF	T
ION	372	G	3	ARY 2	18	B	3	MON-	8	93	2
CON	241	G	1	TH	18	D	3	-PARE	8	B	2
RE	210	G	1	TRANS	18	B	1	-PLIC-	8	56	2
ATE 1	195	E	3	AR 1	17	C	3	(-)SPOND(-)	8	A	2
AL 1	187	F	3	(-)SPECT(-)	17	B	2	-ST-	8	B	2
AD	179	F	1	-TEND	17	C	2	(-)TRIB-	8	A	2
ER 2	155	F	3	(-)MIT(-)	16	C	2	USE N	8	D	2
IN 1	148	F	1	UTE 2	16	B	3	-VENT	8	B	2
EX	136	F	1	-CEED 1	15	B	2	-VOLVE	8	A	2
DE	121	F	1	-DUCE	15	C	2	AIN 2	7	B	3
ATE	113	E	3	ERY 2	15	B	3	AT-	7	54	3
ITY	102	E	3	ID 1	15	B	3	-CEPT	7	B	2
OUS	101	E	3	C-SERVE	15	B	3	-DIC-	7	A	2
AL 2	91	E	3	AR 2	14	A	3	-FESS	7	B	2
A	87	G	1	-CEIVE	14	B	2	FIN-1	7	C	2
LY 2	85	F	3	-FER	14	C	2	HOOD	7	A	3
DIS	82	E	1	IBLE	14	C	3	ITE 1	7	A	3
OR 2	82	E	3	(-)PRESS V	14	C	2	-LATE	7	A	2
MENT	75	E	3	(-)TRACT(-)	14	B	2	MORT-	7	79	2
IC 1	72	D	3	A 2	13	C	3	NOTE V	7	B	2
ENT 1	70	E	3	ER 1	13	D	3	-NOUVE	7	A	2
Y 2	70	E	3	(-)MOVE V	13	D	2	OPER-	7	C	2
T 1	68	F	3	OR 1	13	B	3	PLEASE	7	C	2
Y 1	68	D	3	(-)QUIRE(-)	13	C	2	(-)SOCI-	7	C	2
ING2	65	F	3	(-)SCRIBE(-)	13	C	2	STAT-	7	A	2
IVE1	65	D	3	SHIP	13	B	3	-TECT	7	A	2
ED.	62	D	3	-SIST	13	B	2	-TING-	7	A	2
IT-	62	D	3	SUR	13	B	1	UN 2	7	51	1
S 1	57	D	3	S 3	13	C	3	-VIDE	7	C	2
PRE	56	E	1	INTER	12	B	1	ACLE	6	82	3
PRO	55	E	1	ISM	12	A	3	ADB	6	62	3
ENCE	53	E	3	-PEND	12	B	2	ARD	6	76	3
ANCE	52	D	3	-RECT	12	C	2	-CEDE	6	46	2
EN-	52	D	1	RY	12	A	3	CENT	6	B	2
IN 2	49	C	1	-TAIN	12	C	2	CHRIST	6	B	2
ABLE	48	D	3	(-)DICT(-)	11	74	2	-CID-	6	A	2
IC 2	48	D	3	ESS	11	A	3	CIRCLE	6	B	2
OB	48	D	1	-FEND	11	B	2	-CLUDE	6	B	2
SUB	48	E	1	ICE	11	D	3	CO	6	75	1
URE	46	E	3	-LECT	11	B	2	(-)COVER	6	C	2
AN 2	43	C	3	NAT-	11	D	2	EER	6	A	3
FUL 1	42	D	3	PART-	11	B	2	EN 2	6	B	3
ENT 2	42	D	3	(-)PEL(-)	11	A	2	ET-	6	47	3
UN 1	40	C	1	-S-	11	D	2	-EY	6	A	2
ISH 1	39	D	3	-STIT-	11	A	2	FOR	6	A	1
AN 1	38	D	3	TY	11	B	3	-FORM	6	B	2
IC-	38	C	3	UDE	11	B	3	FORM N	6	A	2
IVE 2	38	C	3	-PECT	10	B	2	-FORT	6	B	2
ATE 2	37	C	3	-FICI-1	10	A	2	FORTUNE	6	A	2
IFY	34	C	3	ORY 2	10	B	3	-FUSE	6	B	2
AGE	33	D	3	-PLY	10	C	2	HON-	6	B	2
BE	33	F	1	(-)SCI-	10	B	2	IS	6	97	3
ING 1	32	C	3	SE 2	10	B	3	JOIN	6	B	2
NESS	32	C	3	SUPER	10	63	1	LONG A	6	E	2
EN 1	31	C	3	S 2	10	B	3	-LY	6	78	2
LESS	31	B	3	AB	9	A	1	ORDIN-	6	A	2
LY 1	30	C	3	ENT-	9	A	3	-PEAR	6	C	2
(-)POSE	30	D	2	FORE	9	A	1	PERSON	6	C	2
T-	30	C	3	ICLE	9	B	3	-PLOY	6	A	2
PER	29	D	1	-JECT	9	C	2	-PROVE	6	A	2
ANT 1	28	D	3	(-)MIN-1	9	B	2	RE-	6	C	2
ANT 2	27	C	3	(-)PORT(-)	9	B	2	REGUL-	6	A	2
ARY 1	27	C	3	(-)PUBL-	9	C	2	-RUPT	6	73	2
OUR	27	C	3	-SIDE	9	B	2	(-)SOLE(-)*	6	83	2
VOICE	27	E	3	SPECI-	9	B	2	(-)SOLVE	6	A	2
IST	27	B	3	(-)STRUCT(-)	9	A	2	-SURE	6	B	2
ATE 3	22	B	3	-SUME	9	A	2	T 2	6	B	3
WARD	22	D	3	(-)VAL(-)	9	B	2	UNI	6	B	1
DI	21	C	1	-VERS-	9	B	2	UN-	6	B	1
AG-	21	D	2	CERT-	8	B	2	US	6	57	3
ISH 2	20	C	3	GRADE	8	B	2	VARY	6	B	2
IZE	19	C	3	MIGR-	8	66	2	(-)VICT(-)	6	A	2

Fern-fahr-t (長距離行程)

zusammen-fahr-en (出会う, 衝突する)

aus-ein-ander-fahr-en (離れ去る, 外れる)

など90語以上の派生語が生み出されている。(Howard H. Keller “German Root Lexicon” Florida 1973) こういう言語と比べると, 日本語の派生語はやはり少ないということになるだろう。とくに, 和語の接辞が大変少ないことが特徴とされるだろう。古代語においては, もう少し種類も多く派生例も多かったのとは対照的である。現代においては, 漢語(漢字)の接辞的使用が活発である。外来語の接辞としては, 接尾辞の -イズム, -ティックなどが稀に使われるが, 接頭辞の アンティ-, ウルトラ-, スーパー-のように一般語の中で使われることも少なく, 数も少ない。

7-11 品詞の転成

品詞というものはもちろん普遍的に論じられるものではあるが, 個々の言語ごとに決められるのが普通である。それは, 印欧語の術語 ‘parts of speech, Redeteil, parties du discours’ が語るように, 元来<話部>であった。中国語のように, あるいは古代英語 Old English の時代から屈折語尾の消失を重ねてきた近代英語 Modern English のように, ある単語(語形)をとりあげて, 抽象的にその品詞名を示すことのむずかしい言語がある。(例. 「地」, 「上」; ‘drive’, ‘away’) 特定の具体的な文の中に据えられて初めて語の品詞が決定できるというのが, これらの言語の姿である。日本語はこういう言語と比べると, かなりようすが違って, 多くの場合, 文から語をとり出して, 抽象的にその品詞を確定することができる言語である。

このような品詞について, Aの品詞からBの品詞に, さらにCの品詞にと
いうふうに転換する手続きについて研究し, それを知っておくことは, 語彙
の研究・教育の上できわめて大切なことである。このような品詞転換のこ
とを日本では<品詞の転成>と呼んできたが, これには①語形無変更の場合
と, ②なんらかの語形変更の手続きを伴う場合とがある。上に触れた, 中国

語や近代英語の場合には、言語の性質上、他の言語と比べると、①が多いことが注目される。英語学では①を特に‘conversion’（〈転換〉）と呼んでいるのも、英語の特性に由来していると考えられる。

(1) 語形無変更

まわりV>N, 引き続きV>AD, ほら(洞)V>N, つゆN>AD, これPron>Int, 及びV>Conj, ワンワンAD>N, 僕N>Pron, 十分N>AD, こくA>N, からしA>N (Pronは代名詞, Conjは接続詞の略称)

このような品詞転換は、ゼロ形態‘zero form’による派生とも考えられるので、ゼロ派生‘zero-derivation’とも呼ばれる。ところが、この考えでは、〈語形〉とか〈形態〉の概念を、〈分節音素〉‘segmental phoneme’の種類と配列に限っていて、〈超分節音素〉を度外視している。現実の語形無変更の例の中にはアクセントに異同の見られる場合が多い。

コレ または コレ>コレ,
スシ>スシ, オヨビ>オヨビ (オヨビも),
ヒカリ>ヒカリ

(2) 語形変更

a 複合

散歩(N)⇒する(V)>V
 チャレンジ(N)⇒する(V)>V
 はっと(AD)⇒する(V)>V
 まわり(V)⇒道(N)>N
 近(A)⇒道(N)>N
 道(N)⇒ひく(V)>導くV
 日(N)⇒まわり(V)>日まわりN
 情け(N)⇒無い(A)>A
 ぼっと(AD)⇒出(V)>N

b 重複

なか(N)+なか>AD

たか(A)+だか>AD

泥(N)+泥>AD

c 派生

悲し(A)←がる>V

高(A)←まる>V

うま(A)←さ>N

なごやか(AD)←さ>N

深(A)←み>N

春(N)←めく>V

気色(N)←ばむ>V

大人(N)←しい>A

[とげ(N)+とげ]←しい>A

四角(N)←い>A

なつか(V)←しい>A

言わ(V)←く>N

諧謔(N)←的←な>NA

「暗い」から派生される「小-暗い」のような例は接頭辞によるものであるが、接頭辞は接尾辞と違って、品詞を転成させる力をもたないので、派生語の例は、語（または語幹）に接尾辞の付いたものに限られる。

以上に見たように、品詞の転成は、(2)の語形変更によるものがほとんどで、(1)の語形無変更の例は少ない。中国語・英語以外でも、ドイツ語やフランス語における動詞不定法がそのまま名詞になったりする（例. Sein 存在, Leben 生活・人生; manger 食べ物, devoir 義務）のは、日本語の居体言に擬せられるし、形容詞が名詞になったりする（例. Schöne 美しいもの, Böse 悪; bon よいもの・善, haut 高さ・上部）のは、日本の古典語の「老いも若きも」などに比せられるが、後者のような活用語連体形の用法（準体法）は、現代日本語では少なくなった。結局、動詞連用形の名詞化

(居体言)を除くと、(1)の方法による転成は、特定の語に限られるので、もっぱら(2)の方法に注意を払うべきであろう。

次節においては、主要品詞の造り方について述べる。

7—12 造語法

新しく発見された事物や新しく獲得された概念に、われわれは語を造り出して対応させる。また、すでに存在していて、既存の語によって呼ばれてきた事物を新しい語をもって呼びかえることも少なくない。日本語における語のしくみそのものについてはすでに見てきたが、ここでは動態としての〈造語法〉について述べよう。

いずれの言語においても、新しい語を造り出す方法としては、次の2類しかない。すなわち、(1)語根創造と(2)既存の語彙資材の利用の2つである。

(1) 語根創造 (語根創成とも) 'root-creation'

既存の語彙資材によらずに、まったく新しい語が造られるときに〈語根創造〉という術語が用いられる。どんな言語も、原始時代の創成過程には活発な語根創造が行われたと想像されるが、長い発展の過程を歩んできた多くの言語は、現代においては、語根創造の力を失ってきており、またその必要もなくなってきている。日本語ももちろんその例外ではない。ガス 'gas' の発見者はギリシャ語の「カオス 'khaos'」にヒントを得て命名を行ったと伝えられているが、このような 'gas' は語根創造の例として挙げることができるだろう。日本語では、今もかなり活発に擬音語・擬態語が生産されるが、この音象徴語づくりが語根創造の有力な手段となるので、英独仏中などの諸言語と比べると、日本語は語根創造が現代においても活発に働いている言語といえるかもしれない。たとえば、幸田文の

「黄金は、かぼちゃりかぼちゃりと悠久な音楽をかなでて」(『こんなこと』)

「天も地もどぎどぎと光って」(『夏の小品』)

「父が又いかに私にぎこぎこ当ろうと」(『こんなこと』)

のような音象徴語は、この女流作家の用語や文体の特徴の1つを成すものではあるが、このような造語が彼女にしかできないというわけではない。これは、現代日本語の語根創造の例として、量的な差はあっても、広く一般に行われているものと考えられ、ここに日本語の造語法の特徴が見られるのである。

(2) 既存の語彙資料の利用

既存の語彙資料を利用するのは、今日の言語において通常の方法であるが、これには次の6種がある。

- | | |
|------|-----------|
| a 合成 | d 縮約 |
| b 混淆 | e 文字による方法 |
| c 借用 | f 逆成 |

この6種の造語法のうち、もっとも活発に働き生産的なのは、合成である。そして合成の中では、上述のように複合法による造語がもっとも多い。

a 合成

合成のうち、とくに複合法を中心にして日本語の主要品詞のつくり方を挙げてみよう。

ア 名詞をつくる

① 名詞プラス名詞

統語複合 $N_1 \Rightarrow N_2 > N$

朝日 山道 横手 猿ぐつわ 木馬道 うおじま 手足口病

並列複合 $N_1 = N_2 > N$

朝晩 手足 みぎひだり かみしも たてよこ かみなかしも

疊語 神がみ 人びと 山々 家々

② 名詞プラス動詞

複合 ものとり 日まわり 猿すべり 日ぐらし その日ぐらし お
寺まいり 水攻め こめかみ

③ 動詞プラス名詞

複合 読み方 歌い手 釣り糸 磨き砂 揚げパン 申し込み書 引

き網 見せ物 着物

④ 動詞プラス動詞

複合 $V_1 \Rightarrow V_2 > N$

狂い死に つげやき 受け取り 継ぎ足し 行きどまり

並列 $V_1 = V_2 > N$

生き死に 出入り あげさげ やりもらい 立ち居 切れつづき

⑤ 形容詞（語幹）プラス名詞

長雨 浅瀬 広縁 安やど 高山 深なさげ 早耳 うれし涙 頼もし講（頼母子講）

⑥ 形容詞（語幹）プラス動詞（連用形）

高飛び 深追い 早とちり 悪酔い 浅漬け 軽焼き 高望み；
くやし泣き うれし泣き

⑦ 形容動詞（語幹）プラス名詞

気まま者 きれい事 馬鹿者 鉄火娘 蓮葉娘 我がまま男

⑧ 名詞プラス形容詞（語幹） $N \Rightarrow A > N$

性悪 目白 夜長 足軽 意地悪 塩から

⑨ 動詞（連用形）＋形容詞語幹 $V \Rightarrow A > N$

望み薄 切れ長 気乗り薄 取れ高 かせぎ高

⑩ 副詞プラス動詞（連用形） $AD \Rightarrow V > N$

よちよち歩き きりきり舞い なおなお書き ちよっと見

⑪ 副詞プラス名詞 $AD \Rightarrow N > N$

にこにこ顔 ただ事 どたばた喜劇 ぎっくり腰

⑫ 音象徴語から

ちゃんばら ニャンコ パチンコ ひよこ ピカドン ガラガラ蛇

⑬ 形容詞プラス形容詞 $A_1 = A_2 > N$

あまから たかひく よしあし

⑭ 形容動詞（語幹）プラス動詞 $NA \Rightarrow V > V$

馬鹿騒ぎ 無理じい 貧乏ゆすり 阿呆呼ばわり

⑮ その他

うす馬鹿 土踏まず 水入らず たそがれ 思わく

〔付〕 単独動詞の連用形からつくられた名詞（居体言）

休み 借り 釣り 網 暮れ 初め 濠 鳶 林 鋏 のぼり（上り，幟） きれ（布） 誇り 負け

イ 動詞をつくる

① 動詞プラス動詞 $V_1 \Rightarrow V_2 > V$

呼び寄せる 聞きとがめる 吐き出す 飛び回る 申し込む 受け付ける 降り始める 書き終わる

この類には、類義動詞「恋い焦がれる」「寄せ集める」「絶え果てる」「教え導く」「消え失せる」「やせこける」「よじのぼる」「買い求める」のようなものが少なくない。

② 形容詞（語幹）プラス動詞 $A \Rightarrow V > V$

長びく 近寄る 遠のく 高鳴る

③ 名詞プラス動詞 $N \Rightarrow V > V$

気づく 名づける 芽生える 目ざす 土^か養う 基づく 色どる

この中には、「決行する」「コピーする」のようなN⇒スル（サ変動詞）の構造による複合サ変動詞が大変多い。

④ 副詞プラス動詞 $AD \Rightarrow V > V$

はっきりする うろうろする びっくりする 齷齪する 間然する

⑤ 音象徴語プラス接尾辞（派生語）

ざわめく びくつく うろつく はためく しょぼくれる

⑥ 名詞プラス接尾辞（派生語）

色めく 艶めく 汗ばむ 時めかす

ウ 形容詞をつくる

① 動詞から（派生語）

ゆ（行）かシイ 好もシイ 狂おシイ ねたまシイ 喜ばシイ いき

どおろシイ 勇まシイ (以上, シク活用)

くだらない たまらない つまらない いけない いけすかない
(以上, ク活用)

動詞未然形にシイが添加されて出来る「ゆかしい」の型は、古代にはかなり活発に行われたが、現代では化石化したものだけが使われている。おおむね、「思う」「もどく」「たのむ」「なつく」など感情・思考の働きの示す動詞から分出された。ク活用の例はもとは助動詞ナイの添加された連語的なものであった。

② 名詞プラス形容詞 $N \rightarrow A > A$

毛深い 肌寒い 情け深い 心憎い 気ぜわしい 口やかましい
心楽しい 幅広い 底深い

③ 動詞プラス形容詞 $V \rightarrow A > A$

寝苦しい 蒸し暑い みにくい 考え深い 忘れがたい まわりくどい くみしやすい

④ 形容詞プラス形容詞 $A_1 \rightarrow A_2 > A$

細長い 浅黒い うす暗い 甘酸っぱい 暑苦しい 重苦しい おもしろおかしい 痛がゆい

⑤ 形容詞から(派生語) $A \leftarrow \text{シイ}$, $A + A \leftarrow \text{シイ}$

近しい 深い 弱々しい 荒々しい くだくだしい 細かい
(すべてシク活用になる)

⑥ 名詞疊語から(派生語) $N + N \leftarrow \text{シイ}$

空々しい 華々しい 女々しい よそよそしい 物々しい (すべてシク活用になる)

⑦ 動詞疊語から(派生語) $V + V \leftarrow \text{シイ}$

晴れ晴れしい なれなれしい 冴え冴えしい ほればれしい (すべてシク活用になる)

⑧ 副詞語基プラス形容詞

ほの暗い ほろ苦い ひょろ長い むさ苦しい 真っ黒い だだっ

びろい

⑨ その他

大人しい いかがわしい にぎにぎしい 陰気くさい めばしい
ちゃんちゃらおかしい おいしい みっともない ひもじい 馬鹿
らしい

エ 形容動詞をつくる

① 名詞プラス動詞 $N \Rightarrow V > NA$

間抜けだ 耳ざわりだ 気詰まりだ 段違いだ 風変わりだ

② 動詞連用形から(派生語)

好きだ 巧みだ 幸いだ あんまりだ 嫌いだ ました

③ 名詞プラス形容詞語幹 $N \Rightarrow A > NA$

気みじかだ 身近だ 間遠だ 尻軽だ 目深(まぶか)だ 手ぜまだ

④ 名詞プラス形容動詞 $N \Rightarrow NA > NA$

筆まめだ 口べただ 身ざれいだ 身勝手だ 気ままだ 口巧者だ

⑤ 名詞プラス名詞 $N_1 \Rightarrow N_2 > NA$

うわ手だ 蓮っ葉だ 一本気だ 他人行儀だ

⑥ 形容動詞プラス形容動詞 $NA_1 = NA_2 > NA$

純粹無垢だ 器用貧乏だ 勝手気ままだ 気随気ままだ

⑦ その他

粹(いき)だ 乙だ 鉄火だ 思わせぶりだ 恥知らずだ

オ 副詞をつくる

① 音象徴語から

ガタンと ふらふら(と) きっと すんなり(と)

② 動詞から

さしあたり とりわけ ひきつづき;すべて あえて きわめて
別して 決して まして 断じて 安んじて;よう(杓)として
主として 頑として 時として

③ 名詞プラス名詞(含畳語形)

のちほど 時折 いつなんどき；時々 色々 なかなか 山々 みちみち もともと

④ 名詞プラス助詞

時に 根っから もっとも もとより 中でも 心から いつか
一に なにやら 一段と 一気に

⑤ 動詞畳語

ますます 返す返す 見す見す 見る見る 恐る恐る 泣く泣く；
重ね重ね しみじみ(と) こりごり 泣き泣き

⑥ 動詞プラス助動詞

絶えず なるべく 思わず とりあえず

⑦ 形容詞畳語

やすやす ながなが たかだか うすうす ちかぢか こわごわ

⑧ 語基畳語

ほのぼの しずしず すべすべ はるばる

⑨ 副詞プラス副詞(含副詞畳語)

ただただ またまた まだまだ なおなお；かつまた はたまた

⑩ その他

ただいま 心もち 夜どおし かなり さてこそ 二度とふたたび
何でもかんでも 一体全体 おっつかっつ 全然 断然 勿論
早速 格別 比較的 一旦 万一 折角 多少 到底 一応(一往)
古来 精々 重々 段々

〔付〕 語形無変更によるもの

つゆ もと まこと いま；つまり；よく よし(縦し)；全体

b 混淆(混交) 'blending (contamination), Kontamination, contamination'

「やぶる」の前部分と「さく」の後部分とをつないで「やぶく」のような新語を造ることを<混淆>(混交・混成) 'blending, contamination' という。もともと個人的、臨時的な記憶違いや言い誤りが広がって、固定したも

のであるため、混淆の例はごく僅かであった。（このような混淆には、汚染という原義をもつ contamination という語がふさわしい。）しかし、近年「驪馬」（メスの馬とオスのロバとを掛け合わせてつくった混種）に代表されるような各種のキメラ(chimera)生物が増加し、それに伴って、従来の無意識的な混淆語とは違った意識的な混淆語が相次いで登場するようになった。「ライガー」(ライオン+タイガー), 「レオポン」(レオパード+ライオン) などである。このような混淆語は生物界にとどまらず、中間物の名・兼用機能具名・器具名・総称などとしても見られるようになった。smoke+fog>smog, stagnation + inflation>stagflation, magazine + book>mook, Europa + Asia>Eurasia, motorists+hotel>motel などは、英語による混淆例であるが、日本語の中でもそのまま使われるようになってきている。このほか、「タバックス」(たび+ソックス) や「ケムラー」(和語 kemur-u+-er) のような和製の器具や商品の名称に混淆語が少しずつ増えている。「ケムラー」は異常高温警報の発煙装置の呼び名である。上記のほか、

とらえる+つかまえる>とらまえる

ごてる+こねる>ごねる

けちな+クッキング>ケッチング

いす+ざぶとん>イストン

などがある。

c 借用 'borrowing, Entlehnung, emprunt'

外来語は依然として日本語の中で増えつづけ、ファッション、先端技術部門などの分野で数を増している。行政機関・先端技術諸部門・広告宣伝業者が次々に新しい外来語を使い、それを一般の日本人が受け入れていくために、外来語の増加傾向は今後もつづくであろう。

漢語「車庫」や外来語「ガレージ」に対して、関西では10年前ごろから「カーポート」という新語が宅建業者によって使われ出した。「車庫」は<汽車・電車や自動車などの車輛を入れておく建物>であるが、「ガレージ」は<自動車の車庫>であるから、両語の意味は同一ではない。しからば「カー

ポート」はどうか。これは<屋根と柱だけの簡単な自動車車庫>（小学館『日本国語大辞典』1973年）で、米語 ‘carport’ に由来する語のようである。Random House の English-Japanese Dictionary には<（家の外壁から屋根を差し掛けただけの壁部のない）自動車置き場，差し掛けガレージ，簡易車庫>と記されている。「差し掛けガレージ」も「簡易車庫」も多分現実には使われていないであろう。前者はまず語としては長大にすぎ、後者は安直粗悪さを感じさせる。そしてともに既存の和語・漢語を成分にしている。たしかに、「車庫」や「ガレージ」とは違った物を指すのであるから、この場合はとくに、別語をもって示す必要があった。「カーポート」は安直さを感じさせず、スマートさを喜ぶ日本人好みの語の1つと言えるであろう。この語の登場に象徴されるように、（日本製外来語も含めた）外部借用による外来語の浸透は、現下の日本語の語彙レベルの1つの特徴である。

これに引きかえ、地方語の語彙を使う内部借用は、時にテレビの人気番組やベストセラーによって行われることがありはするが、量的にも質的にも問題になりそうなことはない。関西地方で使われていた「しんどい」が共通語の中で使われるようになってすでに久しい。また、東北・北海道で使われている「しばれる」が時折一般の人のことばに見られ出した。しかし、外来語の急速な増加と比べると、このような地方語の中央語化は極端に少ない。

すでに上巻「6—1」や「6—4」において見てきたように、現代日本語においては、外来語は延べ語数としては大したものではないが、異なり語数としては10%近くを占めるわけで、外部借用によって新語づくりの代理機能の一部を果たしていることは無視できない。借用が幾分安易な手順であることには批判の目が向けられるが、現実の傾向は率直に認めなければならない。外部借用の大半が英語系外国語であることを見るとき、英語に必ずしも熟達していない外国の人びとに対する語彙教育の相対的重点として、この外来語の教育が挙げられるし、英語系の外国人にもまた語形上・造語法上問題がないわけではないため、やはり外来語は軽視できないと思われる。

外部借用については石綿敏雄『日本語のなかの外国語』（岩波新書296）の

一読を勧めたい。

d 縮約 ‘abbreviation (shortening), Abkürzung, abréviation’

語の一部が省略されて、語形が短縮されることを〈縮約〉(短縮・省略とも)と呼び、縮約されて出来た語を〈略語〉‘abbreviation, clipped word’という。略語(正確には略語形)が生まれるには、もとの語が比較的長大であり、かつたいへんよく使われるものであるという条件がある。1拍語や2拍語をそれ以上短小の形に変える必要がなく、また長大な語形のものも、めったに使われないものであれば、略すことはないわけである。したがって、略語が造られて用いられるのは、たいてい特定の場(集団・職域・ジャンルなど)においてである。

商品を並べたりして販売をする所を「みせ(店)」と呼び、人を集めて、金をとって、落語・漫才・講談などを聞かせる場所を「よせ(寄席)」と言っている。それぞれ、動詞「みせる」「よせる」の連用形であると考えられるので、これらは共時的には品詞の転成の例と考えてもよい。しかし、この2語はもと「見せ棚」「寄せ席」であったことがわかっているから、通時的には略語として扱われるべき語である。このように、現在使われている単語の中には、過去の歴史の中で形成された略語がまじっていることが少なくない。考え方によっては、「かね」と呼ばれる〈鐘〉や〈鉦〉も「つりがね」や「たたきがね」の略語と見られるかもしれない。「交番」は「交番所」の、「ビー玉」は「ビードロ玉」の略語である。次に、略語の例を挙げよう。()内は略された部分である。

ア 和語

空巢(狙い) ちらし(ずし) (ちゃん)まげもの (な)たねあぶら うな(ぎ)どん(ぶり)

イ 漢語

(東)京(横)浜 京(都大)阪神(戸) (国立)国(語)研(究所) (日本)国(有)鉄(道) 衆(議)院 国(民)体(育)大(会) 原(子)力(発)電(所) 電(子)式(卓)上(計)算(機) 刑(事)訴(訟)法 臨(時)教(育)審(議)会 湖沼(水質)

保全特別)法

ウ 外来語

(アル)バイト スト(ライキ) (プラット)ホーム チョコ(レート)
コネ(クシヨ)ン) ダイヤ(モンド) (ワ)ニス パト(ロール)カー ゲバ
(ルト) パン(ティー)スト(ッキング) リュック(サック) ベ(ース)ア
(ッブ) スローモー(シヨ)ン) スト(レプト)マイ(シン)

エ 混種語

立て看(板) アル(コール)中(毒) 白(ナンバー)タク(シー) 学(生)割
(引) 外(人)タレ(ント) いば(ら城)交(通) からオ(ー)ケ(ストラ)
合(同)コン(パ) 約(東)手(形) サラ(リーマン)金(融)

このほか、「やぶをつついてへびを出す」→「やぶへび」や「棚からぼたもち」→「棚ぼた」, 「泥棒を捕えて縄をなう」→「泥縄」, 「とてもシャン」→「とてシャン」のような句形式を圧縮した略語もある。略語化について注意しなければならないのは、同音衝突と語形変化である。同音衝突はことに漢語の略語に起こりやすい。たとえば「シンダイソツ」という語がある会社の人事課で使われたと仮定しよう。すると「シン大卒」というように理解するのは困難ではないが、そこから先は意味を限定しにくい。「神戸大学」「新潟大学」「信州大学」「神奈川大学」のどれもが「シンダイ」と略され、「新制大学」もまた「シンダイ」と言われるからである。地域的にどれか1つに限定して理解できる場合には問題はないが、それでも「新制大学」との混線は回避しにくいであろう。外来語の略語にも類似の混乱を招きやすい場合がある。「ダイヤグラム」も「ダイヤモンド」も「ダイヤ」になる。また「リモートコントロール」の略語の「リモコン」と、「マザーコンプレックス」の略語の「マザコン」とでは、「コン」の意味が違うし、「スト(ライキ)」と「エン(ジン)スト(ッブ)」とでは、「スト」の意味が違う。「アル(バイト)サロ(ン)」と「アル(コール)中(毒)」とでも、「アル」の意味が異なる。略語は、在来語を基礎にして成るものではあるが、こういう略語法によって、日本語の中に一種の語根創成が行

われていると見ることもできるかもしれない。後者の語形変化とは略語化に伴って生じる語形の部分的な変容をいう。「からオーケストラ」が「からオケ」になる場合には、引き音節が省略されている。コウベ（神戸）がシンに変わるような場合は訓読みから音読みへの転換が行われていて、部分的な変容とは言えないが、これも漢字を常用している日本語の特殊な状況を反映していると考えられる。理論的には、/nɔkaut/ ‘knockout’ の略語に音声上（語形上）存在しない /kei ou/ ‘K.O.’ が用いられるのに比せられるが、日本語ではこの漢字語（後出「9—4(2)」）の音訓転換例がたいへん多い。

[音訓転換] 日本教職員組合(くみあい)→日教組(にっきょうそ), 東京千葉→京葉(けいよう), 時間帯(たい)ドラマ→おびドラ などがある。特殊なものとしては、大蔵大臣→蔵相(ぞうしょう)の例が挙げられる。この場合は関係を意味する「大臣」も別語「相(しょう)」と交替している。「文部大臣」も「文相(ぶんしょう)」となって、「文」自体が呉音から漢音に転じている。

[音節交替] 東京女子大→トン女, コク語研究所→コッ研, 断然トップ→ダントツ (ただし, これは句の例である)

[音節脱落] アメリカン・フットボール→アメフト, 学生ローン→学ロン, 癌ノイローゼ→癌ノロ

また文字とも関連しているが「外国為替(かわせ)」が「外ため」になるような特別な略語も見られる。このような語形変化は、日本人が無意識に受容しているものであるが、外国人にはつよい抵抗を覚えさせるものが多い。

次に、省略される部分について見てみよう。

- α 語頭省略 (アル)バイト, (プラット)ホーム, (警)サツ, (新)ブンヤ, (ウラ)ボン, (被)ガイシャ, (新)宿, [(こんに)ちわ, (ワ)ニス, (六十)六部, (卒)塔姿, (阿)弥陀
- β 語中省略 警(察)官, ビー(ドロ)玉

7 語尾省略 コネ(クシヨン), マンネリ(ズム), ダイヤ(モンド), みせ(だな), よせ(せぎ), げそ(く), はねず(色), 山掛け(豆腐), 大島(つむぎ), 板わさ(び)

これらのうち、いちばん多いのは語尾の省略である。

上記の例を見てもわかるように、略語には4拍のものももっとも多い。その場合、「うな+どん」のように2拍+2拍という構造になっているものがきわめて多いことに注目したい。

略語の中で、最近増加しつつあるのが「NHK」のようなローマ字(ラテン字母)による頭文字語である。これは Nippon-Hōsō-Kyōkai の頭文字をとって造られた略語であるから、もとは「N.H.K.」と書かれていたものである。「SL」(steam locomotive), 「SF」(science fiction), 「PR」(public relations), 「CM」(commercial message), 「IQ」(intelligence quotient), 「KK」(株式会社), 「OL」(office lady), 「KS鋼」(Kichizaemon Sumitomo 鋼)などで、ほとんどが大文字表記の語である。

略語の中で、造語や語構成に関して注目すべきものに<略熟語> ‘clipped compound’がある。これは「輸出」と「輸入」を結合させて略した「輸出入」の類を指すが、タイプとしては、

$XA+XB \rightarrow XAB$ (例. 輸出入)

$CY+DY \rightarrow CDY$ (例. 許認可)

の2タイプに分けられる。XAB型は「転出入」「移出入」「流出入」「国内外」など、例が限られるのに対して、CDY型は「乳幼児」「転退職」「部課長」「政財界」「給排水」「冷暖房」「校園長」「本支店」「送受信」「預貯金」「投融资」など数も多い。ところで「視聴覚」は「視覚」+「聴覚」の圧縮によって出来た語であるが、「視聴者」「視聴率」はテレビについて使われる「視聴(する)」「(聴視)とも言われる)をもとにして造られた語であるから、外見上CDY型のように見られるにしても、ここにいう略熟語ではない。「戦病死」も「戦死」+「病死」ではなく、<従軍中に病を得て、それがもとで死ぬこと>の意で、戦病による死を意味している。「開閉器」「上下

動」も「視聴者」の類で、CDY型ではない。なお、「同性」と「異性」を合わせた「同異性」や「異同性」は使われていない。「同別居」「山陰陽」「通異常」「天人災」「院学生」「開閉会」なども行われていない。

なお、略語化による社名などの変更が増加傾向にあるが、その際片仮名表記が選ばれることが多い。

トーレ（東洋レーヨン, Toray）、トヨタ（豊田自動車）、イビデン（揖斐電鉄）、カンポール（簡易保険局ホール）、テイサン（帝国酸素）、ワリチャー（割引長期債券）

e 文字による造語

漢字・平仮名・片仮名・ローマ字の4種の文字を併用している現代日本語においては、他の言語におけるよりも、語と文字との関係が深い。すでに前項dにおいて見たように、漢字の音訓の交替などによる別語形がかなり機械的に大量に生まれる下地がある。したがって、文字による造語も少なくない。「いの一番」という語句は、いろは順の第一番という意味から「まっさき」という意味で使われるようになったが、明らかに「いろは歌」を基にした文字順「いろは」を契機にして生まれた語句である。「はつかねずみ」は「二十日」とはもともと関係のない語であった。これは「あまくちねずみ」の別称が示すとおり、古く『倭名類聚鈔』などにおいて『玉篇』などから引いた字注訓「甘口鼠也」（縦書き）の「甘」字の終画が後続の「口」字の上ののっかって「廿日」を現出せしめたものであり（金沢庄三郎「字注訓と字音訓」国学院雑誌第54巻第3号、昭和28年11月）、筆写の過程において生じた字形による幽霊語‘ghost word’の定着したものである。この例は無意識的なものであるが、意識的な造語はむしろ多い。「針妙（しんみょう）」という語は「少女」の2字の合字によって造られた語で、昔、宮中の女官の私室において裁縫などをした上級の女中を指した。「ロハ」は「只」の分字によるものであるから、片仮名書きしか認められない語である。九十九歳のことを「白寿」というのは「百マイナス一」という減算によって成ったもので、「白」の字義とは何の関係もない。「傘寿」（八十歳）、「茶寿」（百八歳）な

どの一連の呼び方は、いずれも漢字の字形に由来するものである。また、「かながしら」「かなじり」は「いろは」歌に発している。そのほか、「Tシャツ」「Uターン」「Jターン」「Vネック」「エッチ」「G I センター」などは、ローマ字（の字形）やアルファベット順に由来するものであるが、仮名の字形からも「やの字結び」、漢字の字形から「八字ひげ」、数字字形から「4の字固め」のような語が造られている。「一六銀行」は「質」との同音の「七」を「一」プラス「六」と分けて造ったものである。入質を意味する「まげる」は同様に「質」と同音の「七」の字の第2画が「十」と違って曲がっているところから造られた語である。「かしわで」は「拍手」の「拍」字を「柏」と誤認したために生じた語と見られている。「半風子（はんふうし）」（風・しらみ）は「風」と「虱」の類似から、「破瓜」（女子十六歳、男子六十四歳の異称）は「瓜」字をもとにして造られた語である。「あたりまえ」は「当然」の当て字（宛字とも）「当前」の訓読みにより生じたもので、「大根」「返事」「尾籠（びろう）」などは、古語「おほね」「かへりごと」「をこ」などに当てられた漢字を音読みにして生み出されたものとされる。

最近においても、「ぎて」（技手）、「わたくしりつ」（私立）、「くびなが」（首長）など、話しことばの世界で、それぞれ「技師」、「市立」「市長」などとの紛らわしさを避けるための訓読み語が意識的に用いられている。

このような文字による造語は、誤写・誤読によるものも少なくないが、近年は意識的なものが増加してきている。この意識的造語の延長線上に、遊戯的な造語や社会諷刺的な造語が存在する。とくに、同音率・類音率の高い漢語を中心にしてそれが行われるので、「感字」「娛字」という語までが見られるようになった。それ自身「漢字」「誤字」のもじりである。太宰治の作品『斜陽』に由来する「斜陽族」から造られた「社用族」のようなもじりが近年増えてきた。「一浪」→「ひとなみ（人並み）」、「民主主義」→「眠主義」、「選挙」→「銭拳」、「共通一次」→「恐痛一時」（「胸痛一時」も）などが造られている。これらはもちろん臨時的・私的・一過的なものであって、辞書に記載されることもないが、下敷きにされた通行の語が日本人には容易に想

定できるので、風刺性・宣伝性・奇抜性などを意図する新聞や雑誌によく用いられる。本来文字にちなんだ造語であるため、ラジオなどの口頭語の世界にはなじまない。

f 逆成（逆形成，逆派生とも）‘back formation, Rückbildung, dérivation régressive’

本来派生語でない語の語末部分をあたかも派生語尾であるかのように考え、その語尾を切り離して別の新しい語を造り出すのが<逆成>である。英語の‘beggar’から‘beg’が、‘enthusiasm’から‘enthus’が造られた場合などがこの例である。簡単に言えば<派生語>から<語基>を造るのが<逆成>である。このように、長い語からより基本的と目される短い語（語形）が造られるのが<逆成>であるから、厳密に考えると、「料理」から造られた「料る」や「たそがれ」から造られた「たそがれる」などは、転成の例ではあっても逆成の例とは考えられない。たしかに逆成が行われるには、多数例を基にした類推作用‘analogy’が働き、帰納が行われていることが認められる。この類推作用による造語例としては、ほかにも「もくろむ」「かいまむ」「問答う」「敵たう」「乞食く」などがある。いずれにしても、逆成による造語は日本語においてはほとんど問題にならないであろう。

以上の造語法について要約すると、日本語では、

- ① 語根創造が、音象徴語づくりが活発なために、現代の諸言語の中ではよく行われる方であること。
- ② 借用、ことに外部借用の結果である外来語が多いこと。
- ③ 文字を契機とした造語が他の言語よりも多いと見られること。
- ④ 主要な造語法は、他の多くの言語と同じく合成法であるが、そのうち派生法は微弱で、複合法が中心となるが、重複法（疊語法）に特徴が見られること。

の4項を挙げることができる。

[問114] NがVスルコト, NデVスルコト, NニVスルコトという意味をもつ統語構造の複合名詞を5語ずつ挙げよ。

[問115] 「水切り」のように複数の意味をもっているN⇒V型の複合名詞を3語以上挙げよ。具体的な作品・文章の中での使用例を含めてもよい。

[問116] 「酒飲み」「湯飲み」の2語を、意味・構造などの面から比べて説明せよ。

[問117] 次の文の中から、複合名詞をとり出し、それらの意味・構造について説明せよ。

ア 秋祭りが近づくと、この村に来た薬売りを思い出した。大きな紺のふろしき包みを背負っていた薬売りは、ほくに紙ふうせんなどをくれた。

イ 霜降りの夏服の友だちと白がすりを着たほくが並んで写っている古い写真がある。

ウ 夏休みにはよく昼寝をさせられた。寝入るとすぐ庭先の青桐の上でセミの大合唱が始まり、寝返りばかりをうつことになった。

エ 松じいはいろりばたに腰をすえて、きせるで刻みたばこを吸いながら、若者を前に昔話を始めた。

オ わらぶきの家々のかなたに雪を頂いた遠くの山波が仰げる。麦踏みをする年寄りの農婦のしわは深い。季節の移り変わりの中に農業にいそしんできた人の生活の年輪である。

[問118] 「心」「気」「腹」「口」を前項とする複合形容詞を挙げよ。

[問119] 「から(空)」「よこ」「うわ(上)」を前項とする複合語を挙げよ。

[問120] 「もの(物)」が前項・後項として用いられている複合語にはどんなものがあるか、辞書を見ないで挙げてみよ。

[問121] 「無」「不」を前項にもつ派生語を挙げ、和語との結合の度合いについて調べてみよ。

[問122] 否定の接頭辞として用いられる「無」「不」「非」「未」の意味・機能の違いについて、例を挙げて説明せよ。

[問123] 「-っぱい」で終わる形容詞を知っているだけ挙げてみよ。

[問124] 「大地震」を「おおじしん」と読むか「だいじしん」と読むか、どちらが普通の読み方だろうか。また、両者に意味の違いがあるだろうか。類例を拾って考えてみよ。

[問125] 「おお(大)-」を前項とする派生語(例(大風))があるのに、「こ(小)-」を前項とする派生語のない場合が多い。他の例も挙げて、その理由を考えてみよ。

[問126] 次の文の中の、語形無変更の転成語を指摘せよ。

ア 星や太陽の動きを詳しく調べ、世界で初めて暦を作ったのは、昔イラクやエジプトのあたりに住んでいた学者たちであった。

イ たがいのちがいがわかることが、理解のはじめである。一木一草同じものはなく、人もみなちがう。気だても顔つきも一人一人ちがっている。

ウ 私は欠点のない人はあまり好きではない。まわりの人を見ていると、みな愛すべき欠点もちである。

エ 自然も絶えず生成している。草木が息づいている限り、昨日と全く変わりのないながめはないはずである。

オ 久しぶりに畳建具を入れかえた。新しい畳のにおいが彼をみちたりた思いに浸らせ、安らかな睡りに誘いこんだ。

[問127] 本文に挙げなかった畳語を各品詞にわたって3語ずつ挙げよ。

[問128] 並列構造の名詞・動詞・形容詞の和語複合語を各3語以上挙げよ。

[問129] 「-めく」「-つく」で終わる音象徴語系の動詞をなるべくたくさん挙げよ。

[問130] 「-て」で終わる動詞系派生副詞を10語以上挙げよ。

[問131] 混淆語のうち、意識的に造られたと考えられるものを3語以上挙げよ。

[問132] 語頭・語中・語尾が省略された略語を各3例ずつ挙げよ。

[問133] 「ペンクラブ」「ライオンズクラブ」という語は、どのようにして出来ているのか、調べてみよ。

[問134] 頭文字語を3語挙げよ。

〔問135〕 次の略語の意味を説明せよ。

駐停車 離発着 判検事 理美容

〔問136〕 次の各組の語をまとめた略熟語を造れ。

初級・中級 行政・財政 排便・排尿 地裁・家裁 貨車・客車
市会・府会 中国・四国

〔問137〕 文字や表記に関して造られた語や句を挙げてみよ。

〔問138〕 次の語の成立契機について説明せよ。

Uベスト 八字ひげ H鋼 への字なり いっていじ (一丁字)

〔問139〕 次の語の成立契機について説明せよ。

喜寿 米寿 卒寿

〔問140〕 次の語の成立契機について説明せよ。

八木 (はちぼく) 十八公 (じゅうはちこう) 白田 (はくでん)
まるシー 魯魚の誤り ふるとり (佳) がんだれ しんにゅうをかける

〔問141〕 類義の漢字を用いた並列構造の熟語を5語挙げよ。

〔問142〕 対立的な意味をもつ漢字を用いた並列構造の熟語を5語挙げよ。

〔問143〕 「やまかわ」と「やまがわ」はどこが違うか。語形と構造と意味について調べよ。

〔問144〕 「おとおんな」と「おんなおとこ」という語の構造・意味を、辞書によって調べてみよ。

〔問145〕 次の漢語のうち、成分の位置を変更しても意味がほとんど変わらないものはどれか。

中心 本日 平和 国外 王女 声音 行旅 感情 能芸 前夜 運命
階段 尼僧 呼称 出現 座高 先祖 俊英

〔問146〕 「踏み切り」と「踏んぎり」の意味・語形の違いについて説明せよ。

〔問147〕 「高い」とそれから派生した「高やか」「高らか」の品詞・意味の異同について調べよ。

8 語の意味

8-1 語義と指示対象

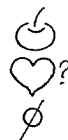
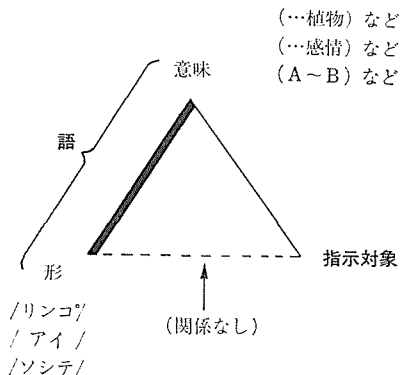
語には一定の形と一定の〈意味〉‘meaning, Bedeutung, sens’がある。語形と語義である。すでに、語形については、上巻において考察した。本章では語の意味について考察する。

「りんご(林檎)」

という語がある。こ

の語の意味は、辞書によれば、〈春、白色の花を開く落葉高木で、果実は球形で赤く、甘くてさわやかな酸味がある、寒地で栽培されるバラ科の植物〉のように説明される。この語の語形はもちろん「りんご」(/リンゴ/、アクセントを含めると /リンゴ/) であって、共時的には、これ以外の形を考えることはできない。しかし、その意味は必ずしも上記のように一義的に限定されるものではない。〈果樹の1種で、落葉喬木。春、白い花を開き、夏の終わりごろ甘ずっぱい実をむすぶ〉というように説明する辞書もある。現実には、果実の大小に差があり、甘味・酸味にも幅があり、熟しても赤くならないものがあって、まことにさまざまである。日本語で「りんご」と呼ばれるものについて委曲をつくして説明するのは至難のわざであろう。眼で見、手にとり、味わうことのできるものを指す語であっても、このようにむずかしい。「愛」「抽象」「観念」「イメージ」などの語になるとなおさらである。「り

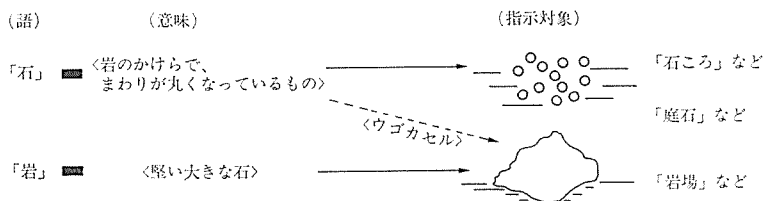
図4 語と指示対象との関係図



んご」という語は、外界にこの語によって指し示される〈指示対象〉（〈指示物〉〈指向対象〉とも）‘referent(referend), Referent, référent’が存在する。このような指示対象は明らかに言語の外側にあるものであるが、一般には語の意味と同一視されやすい。しかし、語義と指示対象の混同はゆるされないのである。端的に言うならば、りんごというものは食べられるが、「りんご」という語の意味は食べられないからである。このように、語義と指示対象にはなんらかの違いがあることをまず理解しておく必要がある。

だれしも「石」と「岩」という語を知っていて、この2語によって指し示される物がある共通性をもつ鉱物であり、2語によって指し示される指示対象の違いの中心がその大きさにあることも承知している。身近にある辞書によると、「石」を〈岩の小さなかけらが風化したり流水で角が取れたりして丸くなったもの〉とし、「岩」を〈堅い大きな石〉としていて、相互に「岩」「石」という語を説明の中で使っているが、基本は大小の差にあるように説明している。ところで、いまある日本庭園に大きな岩が運びこまれて泉水の脇に据えられたような場合を考えると、人はこの岩を指して、「いい石ですね」というように「石」を用いることが多い。こうなると、大小その他形状も含めて、「岩」と「石」との違いが不分明になってしまい、辞書の簡単な説明では処理できなくなるであろう。そこで「岩」には、たとえば〈動かすことができない〉というような、別の性質を想定してみて、「石」との違いを分明にする努力が必要になるのである。このような「石」と「岩」との違いは、「石畳」「石垣」「石橋」「石臼」「石地蔵」などと「岩屋」「岩場」「岩ぶすま」などの両類の複合語にも反映していると見られるだろう。しかし、子どもには、庭にある大きな岩がどうして「石」と呼ばれるのかわからないであろう。

語の意味というときに、このような指示対象との関係で、まず問題になることが多い。それほど高級でもない共同集合住宅であるのに「シャトー」(‘château’ 城、宮殿、やかた)とか「ハイム」(‘Heim’ 自宅、わが家)とか「アーバンライフ」(‘urban life’ 都市生活)とか「ロージュマン」(‘loge-



ment' 住居，部屋) とかの呼称をもっていると，高級住宅と錯覚されやすい。語の意味 (〈語義〉) というのは，その語をどのような範囲のものに対して，どういう角度から，またどんな感じをもって用いるかという〈社会的なきまりの総体〉である。「庭石」の「石」の使い方をいぶかしむ子どもの場合は，「石」の意味の一部しか知らず，総体を知らない場合であり，「シャトー××」という住居を買いもとめて後で憤慨するような場合は，悪い業者が，一般に「アパート」と呼ぶべき建物に「シャトー」という語を使って，意識的に人を騙して暴利をむさぼったり，早期に入居者を獲得したりする場合である。前の場合は，語義の記述が不十分で (子どもの側からすると，認識が不十分で)，指示対象のとらえ方が不分明であるだけであるが，後の場合は，指示対象と語とのあいだに不一致があるわけである。語は，このように指示対象と離れて自在に用いられることがあるので，言語行動上，社会心理学上問題にされることが多い。これらのことも，語義と指示対象とが直接不離の関係にあるものでないことを教えてくれている。

これまでは，明確に指示対象が存在するものを取りあげて考えてきたが，語の中には，「そして」「しかし」(接続詞)「こそ」「ね」(助詞)「た」「です」(助動詞)のように，指示対象を外界 (言語外) にもたないものがある。語が語形と語義とだけから成り立っていることがよくわかるであろう。また，「決して」「恐らく」のような〈陳述副詞〉の類は，述語の陳述的な側面に関わるもので，やはり指示対象はもたない。これらは純言語的な枠の中に機能としての語義をもつ〈機能語〉‘function words’である。さらに「ゼウス」「彼岸」「河童」「生き霊」のように，信仰上あるいは想像上の存在とし

て考えられた名詞の類がある。これらは、指示対象の存在が伝承され信じられたり、論議されたりするという点で、上記の文法的機能を果たす語類とは異なっているので、指示対象が存在する語と考えておいた方がよい。とにかく、指示対象の有無、分明不分明の度合いなどによって、語をさまざまに分類できることがわかるであろう。

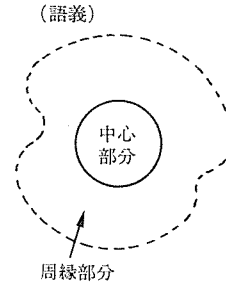
8—2 意義素・意味特徴

前節の「石」「岩」の例で見たように、単語には社会の中で習慣的に使われ、かつ受容される共通の意味がある。「石が流れて木の葉が沈む」「石にかじりついてもやりとげる」「石の上にも3年」「石と玉をごっちゃにする」などの例に見られるように、どんな人の発話においても、どんな文章においても共通に認められる「石」の意味というものがある。これに対して、「踏みわたる石のゆるぎも清水かな」（小杉余子）とか「水打って石より風の起こりけり」（下村非文）というような場合の特定の人の特定の場での句や発話における語の意味は、明らかに異なる。前の句の中の「石」は谷川が湧き水の流れの中にある特定の「石」を指しており、後の句の中の「石」は「庭石」か「敷き石」を指していて、同じ「石」という語でありながら、完全に別個の「石」を指している。指示対象は同一ではない。意味について考えるときは、社会的に共通している意味と、臨時的個人的な使用の中での特定の意味とを峻別しなければならない。個々の単語に関して、その語の用法上の諸条件をも含めて、社会的習慣的に一定していると考えられる意味の諸側面の総体を＜意義素＞‘*semanteme, Semantem, sémantème*’と呼んでいる。

「石」については＜岩の小さなかけらが風化したり流水で角が取れたりして丸くなったもの＞という中心的な意味が考えられるが、その周りにある周縁部分は曖昧模糊としていて、明確な限定をすることは容易でない。「石」についても、「固いもの」、「重いもの」、「動かせるもの」、「比熱の大きいもの」、「割れやすいもの」、「とけにくいもの」、「変わりにくいもの」、「ねうちのないもの」等々の意味の側面を考慮することができるが、これらの認め方には個

人差の入る余地がある。

〈意義素〉は、意味の共通部分を指すのであって、臨時的個人的な側面は除去される。意義素はより小さい意味要素である〈意味特徴〉(〈意味素性〉とも) ‘semantic features’ から成っていると考えられる。換言すれば、〈意義素〉は〈意味特徴〉の束である。たとえば、「ぬるい」という語は、



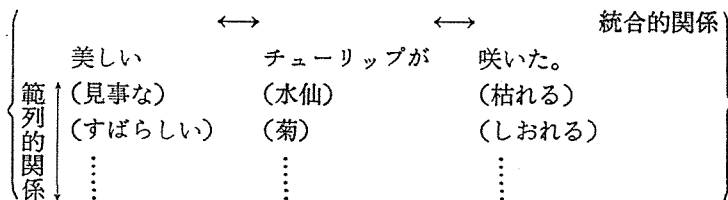
液体ノ・温度ガ・使用目的上ノ標準ニ・達シテイズ・ソノタメニ不満足感
ガ伴ウ・状態

を意味する形容詞とすると、①液体性 ②温度性 ③基準性 ④不足性 ⑤不満足感 ⑥状態性 (⑦形容詞性) などが意味特徴であり、それらをまとめたものが「ぬるい」の意義素なのである。ここに見たように、意味特徴には、語義そのものに関わるもののほか、語の形態論的・構文論的特性に関わるものや文体・文化に関わるものなど、さまざまな種類が考えられる。

8-3 範列的關係と統合的關係

「美しいチューリップが咲いた」という文において、「チューリップ」の位置に代入できる語として、「水仙」「菊」「すみれ」「桜」などが挙げられる。このように文中の同位置において交換できる語を互いに〈範列的關係〉 ‘paradigmatic relation’ に立つ語と呼ぶ。「美しい」と「見事な」「すばらしい」「黄色い」なども範列的關係に立つ語である。また、元の文における「美しい」と「チューリップ」とは〈統合的關係〉 ‘syntagmatic relation’ に立つといわれる。しかし、「味」「におい」「失敗」「注射」などの語は「美しい」とは統合的關係に立たない。そこで、同一語と統合的關係に立つ語は、同じ意味特徴を共有していることがわかる。「チューリップ」「水仙」「菊」「すみれ」「桜」などは、たとえば〈花〉という意味特徴を共通にもっており、また「チューリップ」との統合的關係が認められる「咲く」「枯れる」

「しおれる」などは《顕花植物》と《無意志自動動作》という意味特徴を共有している。



このように同一の意味特徴を共有する単語の集まりによって形成されるものを＜意味場＞‘semantic field’ という。「醤油」「砂糖」「ソース」「塩」「酢」「味噌」「胡椒」などは《調味料》という意味特徴を共有する意味場を形成しているし、「赤」「青」「白」「黒」「緑」「橙(だいだい)」などは色彩名称という意味場を成している。

8-4 反義・類義・対義・偏義

「おじ」「おば」の意味特徴としては次のような項目が挙げられる。

意味特徴 語	親族姻族	尊 属	傍 系	3親等	男 性	
お じ	○	○	○	○	○	(父母の兄弟, 父母の姉妹の配偶者)
お ば	○	○	○	○	×	(父母の姉妹, 父母の兄弟の配偶者)

この「おじ」と「おば」という語はいくつかの意味特徴を共有しながらも、「性別」については正反対の特徴をもっている。このように特定の点に関して正反対の意味特徴をもつ単語の組を＜反義語＞(＜反意語＞とも) ‘antonym’ といい、相互の関係を＜反義＞ ‘antonymy, Antonymie, antonymie’ という。「広い」と「狭い」, 「長い」と「短い」, 「寝る」と「起きる」, 「出る」と「はいる」, 「戦争」と「平和」, 「静寂」と「喧噪(騒)」などは、

それぞれ反義語の組である。これとは反対に、「上がる」と「上る」では、①空間的移動 ②下から上方への移動 ③時間・労力の多寡 ④動作への視点 ⑤「…テイル」形の意味 などの意味特徴に分けて考えた場合、両語は①と②を共有するが、③④⑤では異なりを見せる。③④⑤は「上がる」の結果表現、「上る」の過程表現という相違に基づく意味特徴であるから、実は1項にまとめられるものであろう。1組の語がいくつかの同じ意味特徴を共有する場合、それらを<類義語> ‘synonym, Synonym, synonyme’ と呼ぶ。(‘syn-’はギリシャ語で「類似の」という意味をもっている。‘synonym’の訳語として<同義語>も行われているが、完全に同義である別表現の存在は考えられないから、本書ではすべて<類義語>を用いることにする。)したがって、共有特徴項目が多いほど<類義性> ‘synonymy, Synonymie, synonymie’が高くなり、共有特徴項目が少なくなると類義性は低くなる。上述の<同義語>は共有する意味特徴が完全に同じものを指すのであるが、それは理論的に考えられるだけで、現実の単語同士のあいだには必ずなんらかの差異が存在するため、純粋な同義語は存在しないと考えられる。たとえば、「惑(わく)星」と「遊星」はともに「恒星」の反義語で指示対象は同一であるが、使用者の層に違いがあり(一方は東京大学宇宙物理学教室関係者に用いられ、他方は京都大学の同教室関係者に用いられてきた)、また「惑星」には「政界の惑星」のような意味(ダークホース)・用法があるのに、「遊星」にはそれがない。また、「八重歯」と「鬼歯」も指示対象が同一であると見られやすいが、「八重歯」は文字どおり<重なって生えている歯>であって、「鬼歯」は<牙のように外に向かって生えている八重歯>であり、この2語の指示対象の範囲は一致しない。その上、「八重歯」には<可愛らしさ・魅力>が感じられるのが通例であるのに対して、「鬼歯」には<こわさ・みにくさ>が感じられることが多く、マイナスのイメージが伴っていて、両語は発想や連想が異なっている。こういうわけで、どんな言語にも<同義語>の組を見つけることはできないのである。

「シャボン」も「石鹼」も指示物は同じであるが、前者は外来語で後者は

漢語である点が違う。それだけでなく、「シャボン」は昭和初期までは使われていたが、今日一般には使われることはなくなり、もっぱら「石鹼」が使われる時代になった。つまり2語には明らかに時代性における違いが認められる。その上、「シャボン」には複合語「シャボン玉」があるが、「石鹼」には「石鹼玉」という複合語はない。

「(上略) …それじゃ、仰せに従って渡るとするかな。君愈(いよいよ)登りだぜ。どうだ、歩行(ある)けるか」(漱石『虞美人草』一)という文では、尊敬語「仰せ」の使用に照応すべき述語として「渡ることにいたします」とか「渡らせていただきます」などが期待される箇所に、逆に横柄な「渡るとするかな」が用いられていて、文体的には不統一になっている。(この作品では、親友間のことばのやりとりで、このようなネジレをつくって、意識的に表現のおもしろみをかもし出す工夫が行われている。)「渡るとするかな」という文末形式からは、「仰せ」の代わりに「進言」「建言」「ことば」などが用いられるべきであり、「従って」の代わりに「容(い)れて」「聞き入れて」などが用いられるべきである。つまり、

(甲) 仰せに→従いまして→渡らせていただきます

(乙) 進言を→聞き入れて→渡るとするかな

(甲)で一貫すべき尊敬(謙讓)表現が途中から(乙)の尊大表現に変質して、滑稽味を出すことになったわけである。このような文体や位相の上での違いも、語の意味特徴の一部を成して、多様な類義関係をつくり出しているのである。

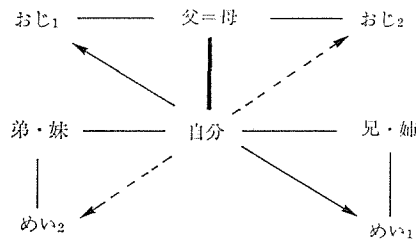
意義素を意味特徴の項目数から見ると、上述の反義語も、広い意味では類義語の1種というふうに見られるかもしれない。「高い」と「低い」は「高さ」を示す意味場を形成する類義形容詞、「戦争」と「平和」は、複数の社会集団間の緊張状態を示す意味場を形成する類義名詞というふうに見えるのである。しかし、このような場合は類義関係とは見なさない。その理由は、

「高い」と「低い」、「戦争」と「平和」などの組では、ある1点において、正反対の意味特徴が認められるからである。「おじ」と「おば」の場合も、性別においてちょうど対立する関係にある。これらはすべて反義関係にあるわけである。しかし、「上がる」と「上る」、「美しい」と「きれいだ」などの組には、相違点はあっても対立点が見られないから、類義関係を構成していることになるのである。

上述の反義語とは違って、「海」「川」に対する「山」や、「赤」または「黒」に対する「白」のように、なんらかの意味で、1組になる個々の語を<対義語>とか<対語>と呼ぶことがある。(上記の反義語の意味で<対義語>を使うこともあるが、紛らわしいので本書では使用を避けた。<対語>はタイゴと読むときは反義語の意味であることもあり、ツイゴと読むときにも同様に反義語の意味であることがある。) <対義語>の例としては、「松竹梅」や「東西南北」、「春夏秋冬」のように、3語・4語によって構成されているものもあるが、多くは2語による構成である。琴・笛を意味する「糸竹(いとたけ)」や「飲み食い」「目鼻」などである。

なお、「自分」を中心に考えると、「おじ」に対するのは「おば」であるが、考えようによっては「めい(姪)」も「おじ」に対する語と見ることができる。「おじ」と「めい」には、傍系性と3親等の2項は共通していて、尊属・卑属、および性別の2項は対立している。このような二重の対立関係

はとくに<対偶>と呼ばれ、ほかにも「高い」と「浅い」などが挙げられるが、<反義>というときは、正反対の特徴が1点に限られる関係を指すので、これらは反義語の組とはされないのでは



(対偶関係)

る。

複合語の中には、ごくわずかではあるが、成分の一部が語義とは無関係である語が存在する。たとえば「国家」という漢語は、「国」と「家」という成分から出来ているが、「家」の意味はなくて単なる「国」という語と類義である。このような語を〈帶説〉と呼び、意味のあり方としては〈偏義〉と称する。偏義には、このほか「緩急」「子弟」「動静」「人物」などの例を挙げることができる。現代日本語の「多少」は「多少にかかわらず配達いたします」や「融資額の多少が問題なんだ」の中では、偏義ではないが、「ワープロは多少扱えます」「多少の損失はこの際やむをえまい」などの例では「少」の方に偏している。ちなみに「江南春」と題された杜牧の七言絶句の結句「多少楼台煙雨中」の「多少」では「多」の方に偏している。

8—5 原義・転義

「山」という語は、もともと〈周辺部よりいちじるしく盛り上がって頂きのある土地〉を指したと考えられる。その「山」は村里の住人たちにとっては、(i)薪を取りに行ったり草を探しに行ったりする所であり、(ii)神が宿り恐ろしい魔性のものが住むさびしい場所でもあった。また、(iii)金・銀・銅などの採掘される所でもあった。こういう「山」のもつさまざまな側面すべてに共通しているのは、〈周辺部よりいちじるしく盛り上がっていて頂きのある土地〉という意味である。このような語本来の意味を〈原義〉（「本義」とも）‘original meaning’ という。「山」の意義素は①非水域性、②自然性、③顕著な隆起性、④有頂性などの意味特徴から成っていると考えられる。類義語「おか（丘・岡）」「丘陵」「高み」などとは③④の意味特徴において相違し、「塔」「やぐら」「ノッポビル」などとは②の意味特徴において相違する。さて、「山の神（山を支配する神）」「山彦」「山うば」「山犬」などの「山」は(ii)と関連する禁忌空間・野性の意味があり、「山刀」「山仕事」などの「山」は(i)と関連した意味をもっている。また、「山師」「山をあてる」「山をかける」などの「山」は(iii)の鉞山探しの投機性に関した意味で用いられている。

さらに「書類の山」「人の山」では量の多いことを、「工事の山も過ぎた」では一番の難点を指す。このように、原義から転じた語義を<転義> ‘derivative meaning, figurative meaning’ という。転義には原義の一部が拡大強調され、他の部分がなくなっているため、英仏語の術語が示すように<比喩義>と呼ばれることがある。「書類の山」の「山」には、原義「山」の②の自然性や④の有頂性が消去され、③の顕著な隆起性が誇張されていて「大量」という面のみが強調されている。「かね」の原義は、「金属」で、「かねざし」「かねのうつわ」「とめがね」などの「かね」に原義が見られるが、転義として、「コイン」→「金銭」→「紙幣」→「財産」（「金持ち」などにおける「かね」の場合）などの発展が考えられる。よく使用される基本語・基礎語の多くは、原義からさまざまな転義を生み出しており、中には原義自体が一般にはわからなくなっているものがある。「食べる」は古語の「たぶ（賜・給）」が変じて成った語で、長上者から物を「いただく」ことを表したし、「うお（魚）」は「さかな」と違って、生きている魚を指した。この意味は「魚河岸」「魚釣り」「出世魚」などの語に残っているが、酒肴として用いられ、食用に供せられる魚を指す「さかな」が上品な語と意識されるようになって、多分都会の主婦の語感に影響されて徐々に「うお」の意味領域を侵し、「さかな」の意味が拡大して「うお」一般を指すようになってきている。（例。「さかな屋さん」「さかな釣り」「池のさかな」）今日、「食べる」「さかな」などが広く「食う」「うお」の意味でも使われるようになってきた過程には、その原義が忘れられるという事態がうらがわにあったことが考えられる。

8—6 単義・多義

基本語・基礎語の多くは、原義のほかに転義をもっていて、意味がいくつものなるものがある。先にとりあげた「山」や「かね」などはその代表的な例である。このように、いくつもの意味をもつ言語記号の性質を<多義(性)> ‘polysemy’ といい、そのような言語単位は<多義的>であると言われる。多

義的な語は〈多義語〉と呼ばれる。一般に抽象度の高い名詞「もの」「こと」「わけ」「ため」はもちろんのこと、もう少し抽象度の低い「あし」「あたま」「はら」「こころ」「め」「て」「いろ」なども多義語である。とくに動詞（例。「とる」「いく」「かける」「なる」「する」「みる」）や形容詞（例。「よい」「ない」「うまい」「大きい」）の類は、いずれの言語においても、外延が大きく内包が小さくて、多義的なものが多い。このことは、動詞・形容詞が数の上で、名詞にはとおく及ばぬ劣勢であることと関係している。動詞・形容詞は、さまざまな抽象度の、各分野に分布している名詞とともに用いられることによって、いろいろな動作や状態の正確な表現を可能ならしめるのであり、語数自体の増加は必要としない語類なのである。多義語の多くが、短小語であり使用頻度の大きい語であることも、言語使用の経済性と関わりのある事象と考えられる。このような〈多義〉の反対は〈単義〉‘monosemy’である。単義的な語は〈単義語〉である。科学上の術語の多くは、たとえば「虫垂炎手術」「先天性代謝異常症」「半導体検知素子」のように、ただ1つの意味しかもない。登録された商品名や専門語なども、理論的には単義語であると考えてよい。「セロテープ」や「ポリパケツ」も今日一般に使われ、単なる物品名のようにになっているが、特定会社の登録商品名で、もとは単義的な語である。「太陽」や「水星」は特定の天体だけを指す単義語であり、「行幸」も単義の動作名詞である。「三四郎」「宮本武蔵」「上高地」「淡路島」などの固有名詞は単義語の代表格である。

8—7 いろいろな意味

(1) 具体的な意味

これまで「8—2」以下においてとりあげてきた〈意義素〉〈反義〉〈類義〉〈原義〉〈多義〉等々は、いずれも〈社会的習慣的に一定している〉と考えられる語義としてとらえたものであった。しかし、語義には、〈個人的臨時的な〉側面も同時に認められる。

夏目漱石の『坊っちゃん』に「清（きよ）」という召し使いの婆さんが出

てくる。その「清」について、「この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。」と述べているくだりがある。ここに用いられている「瓦解」について、ABCの3点の辞書は、「屋根の瓦の一部が落ちれば、その余勢で残りもくずれ落ちるように、物事の一部のくずれから全体の組織がこわれてしまうこと」というふうに説明しているが、これほどこまでも辞書的な意味であって、いわば「瓦解」の意義素である。しかし、このような意義素がわかっていても、上に引用した部分の具体的な意味はやはりよくわからないであろう。ここでは「瓦解」は、比喩的に用いられていて、「徳川幕府の崩壊」を意味しているのである。語は、このように具体的使用の中で、その意味の座標が決まり、限定を受けるのである。つまり、語の意味は、最終的には具体的な文脈、あるいは具体的な場面において決定されるのである。辞書に記述されている語義は、(不十分なものが少なくないが)具体的個別的臨時的な使用における意味の諸相を束ねた抽象的で静態的な意味である。

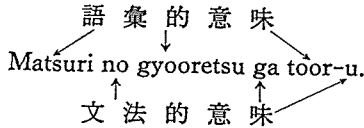
菊舎尼の句「山門を出づれば日本ぞ茶摘みうた」の中の「山門」は、一般寺院の門の総称でもなく、また、たとえば鎌倉の円覚寺の山門でもない。この句では、「山門」が、名茶の産地宇治にある黄檗山万福寺の山門を指しているのである。この「山門」が万福寺の山門であってはじめて句が生きてくるのである。普通名詞があたかも固有名詞のように限定された意味で使われる例が、日常の表現にも多いが、この「山門」はその格好の例である。文の中の個々の語句は他の語句によって、このように多少とも具体化され、特定される。あまり多くの語を使用しなくても、たいていの事象や情意の表現・伝達ができる理由の一端がここにある。「いっぺん蛙を食べに行こうか」という文では、「蛙」が食用蛙を指すことは明白である。こういうわけで、ムーナン (Georges Mounin) は、意味を〈抽象的な記号内容が1つの文脈内で獲得する明確な値〉と定義するのである。

(2) 文法的な意味

芭蕉の句「古池や蛙(かわず)飛びこむ水の音」の中に詠まれた「蛙」は

何匹であろうか。俳句研究の伝統ではこの「蛙」は1匹と考えられてきたようである。日本語の名詞は、このような場合、〈数〉‘number’を示さない。この句の英訳では、小泉八雲 (Lafcadio Hearn) のものを除いて、‘A frog (jumps in, —)’などと単数で訳しているようである。しかし、同じ「蛙」という語でも、鬼貫の「春は啼く夏の蛙(かわず)は吠えにけり」の方は‘frogs (sing)’と複数に訳されている。(R.H. Blyth “Haiku” vol.2 Spring 1950 北星堂書店) 2つの句の中の「蛙」には、文法形成の上では一切差異がない。それに対して、英訳の方では‘a frog’, ‘frogs’というふうに、文法形式の上で明白な違いがあり、それぞれ、単数と2以上の数を表している。この英訳に見られるように、語には、形式のもつ〈文法的意味〉‘grammatical meaning’がある。

日本語の助詞と助動詞とは、文法的意味だけをもつ語(付属語)で、名詞は〈語彙的意味〉(〈辞書の意味〉とも) ‘lexical meaning’だけをもつ語である。いわゆる用言は、語幹部分が語彙的意味を担い、活用語尾が文法的意味を担っているのである。



文法的意味は、このほか〈語順〉‘word-order’やイントネーション(文音調)などによっても表される。同音語の組の中には、アクセントが語彙的意味の識別に役立っている場合がある。こういうわけで、

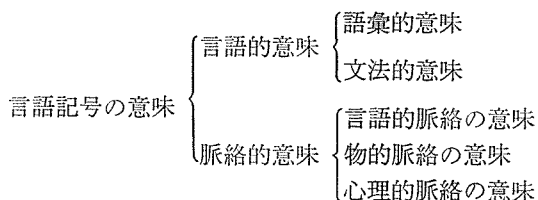
メンゲレガバビフオゲベゼッタ。

という音列も「メンゲレガ バビフヲ ゲベゼッタ。」というふうに3文節に分けられるとすると、日本語話者には、“N₁ガN₂ヲVシタ。”という文構造として理解される。そして、「メンゲレという名のもの(主語名詞)ガ、バビフという空間地帯(または時間帯)ヲ、ゲベゼルという動作で移行シタ(または過ゴシタ。)」とか、「メンゲレガ バビフというものニ ゲベゼル

という働きかけを完了シタ。」といった内容であると受け取られる。この音列からは語彙の意味（メンゲレとは何か、パピフはどこ/いつ/何か、ゲベゼルとはどんな動作かなど）はほとんど看取することができないが、“N₁がN₂ヲVシタ。”という日本語の動詞文の型が想定できるので、文法の意味は上述のように、自動詞文と他動詞文の2型として把握できるのである。

言語があらゆる個別的具体的特殊場面に広範に適用ないしは対応できるように、語の辞書の意味と文法の意味とから成る〈言語の意味〉‘linguistic meaning’は具体性を欠いていることが多い。具体的であればあるほど、広範な使用に適合しなくなり、言語記号が無際限に必要になり、言語を使用する人間の記憶力と的確な運用力とは想像を絶する高度で精緻なものにならざるをえない。具体性を欠いていることの多い〈言語の意味〉を補って、限定し明確にするのが〈脈絡の意味〉‘contextual meaning’である。この脈絡には、言語的脈絡・物的脈絡・心理的脈絡の3つが考えられている。

（参照 大塚高信・中島文雄『新英語学辞典』701r 1982年 研究社）



先に「石」「山」などについて考えたのは語彙の意味の例であり、「食用蛙」を指す「蛙」の場合は言語的脈絡の意味である。また、「瓦解」や「山門」などの場合は、言語的脈絡と物的脈絡の双方の意味が重なっていると考えられる例である。

8-8 複合語の意味

雑誌や新聞の家庭欄を見ていると、「エビ入りふわふわ卵」「季節魚入り焼きちくわ」「麻プリント外出着」「ワンタッチ果物皮むぎ」のような多単位から成る複合語（名詞）がたくさん出てくる。「エビ入りふわふわ卵」という

語は、だれにもわかるように「エビ+入り+ふわふわ+卵」というふうに分解できるわけで、4個の成分から出来ている。この語の構造を第7章の方式で示すと、

(エビ⇒入り) ⇒ (ふわふわ⇒卵)

のようになるが、全体の意味はたいへんわかりやすく(透明で)、日本人ならだれにもわけなく、〈エビが入っている、ふわふわとしたやわらかい卵(の料理)〉という意味が理解できる。もちろんこのような語はどんな辞書にも掲載されていないが、決してむずかしくはない。それは、多分この語の成分となっている4語が、すべて日本人が幼児期から覚え、親しんできた基本的な和語であるためと考えられる。漢語や外来語が成分の中にまじっていても、「季節魚入り焼きちくわ」や「かに入りクリームコロッケ」などの場合は、「季節」や「クリーム」、「コロッケ」などが日常語としてだれしも使う語であるから、やはりむずかしくはないはずである。ところが、もし「冬眠密着包装米」とか「AF2添加食品」とかだったらどうだろうか。漢字やアルファベット字母を用いた字づらからくる抵抗も少々関係しはするが、文字は読めても、成分である個々の語の意味が一般にはわかりにくいために、複合語の意味が把握しにくくなっている。成分すべてが基本的な語であるか、日常頻用される漢語(本・電気・鉛筆・水道など)や外来語(パン・ミルク・ガラス・ソースなど)であることが、複合語の意味のわかりやすさと深い関係にあることは確かである。成分の中に、「公解」や「AF2」のような語が入っていると、まずそれだけで全体の意味がとりにくくなってしまからである。しかし、語の成分の意味がわかっていれば、つねにその語全体の意味がわかるかといえば、必ずしもそうはいえないのである。「冬眠密着包装米」の場合には、どの成分も小学校高学年の児童なら十分に理解されるものでありながら、語全体の意味は大学卒業者にさえよくはわからないのである。そこで〈語の成分の意味がわかっていて、その語を理解する場合の必要条件ではあるが、十分条件ではない〉といえる。つまり、成分と成分との結合のしかたが問題になるのである。先に挙げた「エビ入りふわふわ

卵」以下の諸語が、どれも多単位のものでありながら、日本人にはわけなく理解されるのは、成分間の関係が容易に把握できるという、もう1つの条件が重なっているからである。「エビ入りふわふわ卵」の例では、第2項「入り」が自動詞であるから、「エビガ入ッテイル…」というふうに自然に理解できるし、第3項「ふわふわ」は擬態語副詞として直接名詞「卵」を修飾していることが直覚的にわかるのである。「くりくりまなこ」「ぎっくり腰」の類である。全体がある種の「卵」を指していることも、日本語の構文的性格から明瞭なところであり、「エビ入り」を受けるので、「トカゲの卵」や「生卵」を指すのではなく、「鶏卵を使った料理の名」であることがすぐに理解されるのである。この場合、「卵」が略されて「エビ入りふわふわ」になると、一挙に難語に転じてしまうであろう。「冬眠密着包装米」は、最終項「米(まい)」によって、それが「こめ」であることまでは察せられるが、それ以上意味把握を確かなものにするには簡単でない。「冬眠」という動物学用語が、「密着」その他の成分とどういう契機で結合しているのか、見当をつけることが容易でないからである。複合語の中には、「雨+降り」「魚+釣り」「青+空」「稲+田」のように、前項成分と後項成分のあいだに、一方が他方を自然に連想させるような、意味上の強いつながりがあるものが多い。「雨」は「空から降ってくるもの」であり、「降る」ものの中に「雨」が含まれ、かつ「雨」は「降るもの」の代表格である。「魚」は人間が「釣る」ものであり、「釣る」ものの代表的なものが「魚」である。(「釣る」は「虫」、まれに「狐」にも使うことがある。)
「青」は「空」の属性として説明に使われることが多いし、「田」は普通には「稲」を植えつけて育てる所である。これらの複合語の成分間にある意味上のつながりが<結合契機> (<連合契機>とも) ‘associative motivation’ と呼ばれるものである。「着物」「縫う」「着る」; 「川」「流れる」「水」; 「花」「咲く」「散る」など、古典の修辞法にいう<縁語>の関係にある語同士は、結合契機の強いものと考えられる。

上に挙げた語例とは違って、「雪たつき」「坊主めくり」「花ぐもり」「親方雨」「たるへび」などは、成分自体は少しもむずかしい語ではないのに、複

合語全体の意味は見当がつけにくく、不透明な語である。「雪たたき」は雪を叩く道具ではなくて、「下駄の齒などに付いた雪を叩いて落とすこと」という動作名詞、「坊主めくり」は、百人一首の読み札（絵入り）による遊びの1種で、裏返しに重ねて置かれた読み札を1枚ずつめくって各自手元に積み、順にめくって僧（坊主）の札を得たものが不利に、姫の札を得たものが有利になる約束がある。「花もぐり」は「サクラの咲く季節に空が一面にうすぼんやりと曇り、景色などが煙って見えること」を意味する名詞である。これらは詳しい辞典には載っている複合語である。しかし「親方雨」や「たるへび」は多分どんな辞書にも載っていないだろう。「親方雨」は「夜分に降って明け方にやむ雨」で、子方をおもう親方の心情のような雨という、日傭取り仲間の語である。「たるへび」は「たるの中にとじこめられた蛇が、蓋にうがたれた孔から外に脱出しようとするが、すぐほかの蛇にからみつかれて、たるの底にずり落ちること」から「互いに足ひっぱりをして貧窮の境遇から脱出できないこと」を指す中国地方の方言語彙の1つである。これらは、前項後項のあいだに結合契機が存在しないので、意味がとらえにくく、説明・成り立ち・用法などを聞かなければ、理解しにくい複合語である。辞書を引くまでもなく、「ふとん干し」「汗とり」「糊瓶」「貸し衣裳」「日曜学校」などは、意味がすぐわかる透明な語である。複合語の例を調べると、〔NプラスN〕の形で、NノN（例. 手首 寺男 谷川）とかNトN（例. 手足 親子 田畑）という意味の場合、〔NプラスV〕の形で、Vが自動詞の場合（例. 気抜け 船出 日照り）や、Vが他動詞の場合（NヲVスルの意味で、人殺し 山焼き 橋渡し など）などは、透明であることが多い。しかし、比喩的になると、とたんに不透明になってしまう。「犬走り」は「犬が走ルコト」ではなく、「築地の壁とその外側の溝とのあいだの狭いあき地」を指す。「犬グライシカ走レナイ狭ク細長イ場所」である。見立てや連想のおもしろみが感じられる「猿すべり」「目白押し」「狸ねいり」なども、そこに比喩が働いているために、意味のわかりにくい語になっている。仮に「飲み傘」とか「糊走り」とか「笑い峠」とか「机泳ぎ」とかの複合語を造ってみ

ると、それらは全く意味の見当もつかない語になるであろう。

ところで、このような複合語も、言語ごとに結合の様式が異なるので、それらの意味の透明度にもまた個別言語の共起関係によって、大きな差が出てくることがある。「人殺し」、「殺人」、「murder(er)/killer」、「Mord/Tötung」、「assassin/tueur」などは、いわば普遍的なものであるが、「墓参り」、「säomü 扫墓（墓参）」、「chasse-cousin（いとこ払い、いともでも食べずに逃げ帰るようなまずい料理）」などは、それぞれの言語社会の文化や生活の中で生み出された特別の複合語であって、当然意味把握のむずかしいものが多い。

8—9 語感

ある寿司屋で、主人から「久しぶりですね」と言われた客が、自分の入れ歯を指さして「これ、これ」と答えたところ、主人は「ああ、入れ歯をされたんですか」と言った。とたんにその客は「そんなきたない呼び方はよしてくれよ。義歯、義歯と言ってほしいな」とうなった。——この客の意識では、「入れ歯」という語には何か汚い感じがあり、「義歯」という語にはそれがなかったわけである。

このような、語にまつわりついている、いろいろな感じをまとめて〈語感〉‘word impression (word feeling), Sprachgefühl, nuance d’un mot’ という。〈語感〉は一定の語義の周辺にあって、語義・語形・語種・語の位相などに由来する微妙で主観的なものであるが、多くの人に共通して感じられるものもある。ここでは安定度が高く公共性があると思われるものについて考えてみよう。

ドイツやフランスの男性は妻を紹介するときに「これは私のオンナです」と言って、日本人を面くらわせることがある。ドイツ語の‘Frau’やフランス語の‘femme’が多義語で、「女」「女性」(woman)と「妻」「夫人」(wife)の意味を同時にもっているから、初級日本語修了程度では、ついつい「オンナ」と言ってしまうのである。「オンナ」には「女性」「婦人」「下女」などの意味のほか「愛人」「情婦」の意味があり、「私のオンナ」というのは、

現代では「愛人」「情婦」の意味になってしまう。かつては「それがしの女」のように、「妻」を指したこともあったが、今では通例「妻」を指す語ではない。日本人は「妻」以外に「家内」「妻(さい)」「女房」「かみさん」「かかあ」「うちのやつ」などを使い、さらに他人の妻に対しては「奥様」「奥さん」「夫人」などを使うので、外国人が「妻」を覚えたとしても、それで十分とは言えないのである。このような語はいずれも指示対象‘wife’を共有していて、互いに類義関係にあるが、それぞれから受ける印象には大きな隔りがある。語感を形成する要因としては、指示対象・語の索性や使用法・語形などが考えられる。

(1) 指示対象に由来する語感

「かげろう」にははかない感じ、「さぎり」「はんなり」などには美しくて好ましい感じ、「ゆめ」にははかなさ・甘さの感じがあると言える。また「便所」にはくさくて汚い感じが伴う。そのため「洗面所」「(お)手洗い」「ご不浄」「はばかり」「雪隠(せっちん)」「トイレ」「高野(廁の変音によって成った同音連想から)などの語に言い換えられる傾向が強い。「死」「質屋」などについても多くの言語で<婉曲法>‘euphemism’による言い換えが見られるのは、これらの指示対象に強い否定的語感が伴うからである。

(2) 語の索性や使用法に由来する語感

「宿」「旅館」「ホテル」,「手紙」「書簡」「レター」,「いどむ」「挑戦する」「チャレンジする」,「ひるめし」「昼食」「ランチ」,「豪華な」「ゴージャスな」,「性」「セックス」,「くつ」「シューズ」などは、語種の違いによる語感の差が認められるもので、多くの場合、和語には親近感・卑俗感が伴い、漢語にはあらたまった固苦しさが、外来語には斬新で垢抜けした感じが伴う。上述の「入れ歯」と「義歯」も語種に根ざした語感の相違の例である。川柳の「失念と言えば聞きよい物忘れ」は、少し前の時代における、語種の違いに基づく語感の問題を鋭くとらえたものであった。「文章」「手紙」の代わりに「ふみ」,「誘う」の代わりに「いぎなう」を用いたりすると、優雅な感じが増すであろう。和歌などに見られる古語で、現在日常には使われないもの

を、とくに〈雅語〉と称する。『徒然草』にも「あやしのしづ、山がつのしわざも、いひ出づれば面白く、恐ろしき猪のししも、伏猪の床といへばやさしくなりぬ」（第14段）と、和歌用語の語感に言及している。「ふみ」「やどり」「しじま」「いざなう」「あらがう」「つどう」「うらら」などは雅語であって、これらには典雅なひびきを感じられる。

(3) 語形などに由来する語感

「みぞ」を意味する「どぶ」や「ぶた」「ざま」「どり」「がにまた」「ずぼら」などは、上巻の「3—2 日本語らしい語形と日本語らしくない語形」の箇所でも触れた語頭濁音語で、何となく汚く、不恰好な感じをもっている。（語頭濁音語であっても「美人」「蛾眉」「ベビー」「ブザー」のような語もある。）このように、特定の音素の位置や配列によって、好ましい印象、悪い印象が生じることがある。そしてまた同音や類音による〈連想〉‘association’のよしあしが語の言いかえを惹起する力として働くことも少なくない。漢数字による基本数詞の列「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ…」において、「シ」が「よ（ん）」に、「シチ」が「なな」に交替するのは、「シ」と「シチ」とが類音で紛れやすいという理由のほかにも、「シ」が「死」を連想させるという理由がある。こうして漢語の系列の中に和語「よ（ん）」「なな」が割り込んだのである。「死」でなく「良（い）」を感じさせるからである。「死ぬ」を「なおる」「他界する」「なくなる」などと言い、「終わる」を「結ぶ」「開く」などに言いかえるのは(1)の指示対象そのものに由来する語感を嫌ったのであるが、「梨」を「ありのみ」、「アシ（葦）」を「よし」、「くし（櫛）」を「十三」と言いかえるのは、否定的連想を回避した結果である。このような否定的連想を呼ぶ語を嫌った結果用いられる別語のことを〈忌みことば〉という。逆に、カタクチイワシの幼魚を干した「ごまめ」や「豆まき」などの「まめ」は勤勉・丈夫を意味した古語「まめ」にあやかり、夜こんぶを食するのは「喜ぶ」であってめでたく、「菖蒲」は「尚武」につながり、「搗（か）ち栗」は「勝ち」を想起させるので縁起がよいとされるのは、肯定的イメージを歓迎したもので、連想を積極的に働かせている。

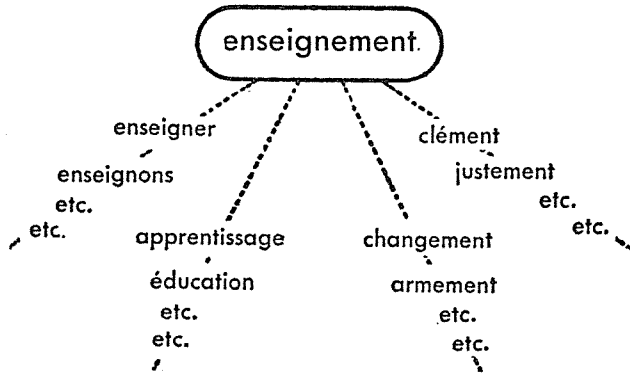
近年、語として存在するか否かを度外視して、ユリーとかマミとかマユラとかの名を女子や愛玩物につけることが行われているが、これらはもっぱら音相上の印象が迎えられて選ばれたものである。(ただし、ユリーやマミなどには、他の語との連想が働いている可能性もある。)また、「蒼」という漢字に惹かれる日本人が多く、女性名の中の「ミ」に「美」が頻用され、「しまう」に「仕舞う」が当てられ、「断ち」に「太刀」,「野ら」に「野良」が当てられるのは、いずれの場合も漢字の字形や字義に基づく語感に関与しているのである。これらが、語形などに由来する語感である。この(3)の場合には、同音語・類音語・同音字などの連想が語感形成の契機となっている。

語感とは、日本語教育の入門期には問題にする必要はないであろう。しかし、「私はタイのヒトです」とか「奥さんはハランでいますね」などと外国人が言う場合には、語感の問題に関わってくる。中級以上の段階では、語義を教える際に必要に応じて、個々の語の語感について触れるか、語感を念頭においた教え方をするかしなければならない。ただ、語感について記述している辞書がたいへん少ないので、教授者の語感に頼ることが多いが、個人的な語感を教えこまないよう注意する必要がある。

8-10 語彙の体系と連想

前節で連想に触れたので、ここで語彙と連想の関係について考えてみよう。ソシュール (F. de Saussure) の『一般言語学講義』には〈連合系列〉‘Série associative’ について、次ページのような意味と音韻の両分野に働く連想の系譜が示されている。

ソシュールは ‘enseignement’ (教え, 教育, 教職) というフランス語の単語を軸にして、①同一語幹を共有する語の系譜, ②類義関係の語の系譜, ③同一接尾辞 (動作名詞接尾辞) を共有する語の系譜, ④同一語末音を共有する語の系譜の4系列を例示した。①は語基 ‘enseign-’ からの派生語の系列であり, ③は接尾辞 ‘-ment’ で終わる動作名詞の系列であり, ④は同韻語の系列である。このソシュールの試みにならって、筆者もかつて「借金とり」を



(COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE, P.175)

刺激語にして、その反応語を調べたことがある。(「日本人の連想と外国人の連想」『言語生活』No.280 1975—1月) そのとき整理の意味で試作したのが図5の〔ことばの連合図〕である。

「意味面」での反応語は、その際の被験者51名で計243語に上り、全被験者が最低数語を挙げたが、「音韻面」での反応語は極端に少なく、頭韻的反応語3人、脚韻的反応語3人、計6人が6語を挙げただけであった。しかも頭韻的反応はすべて漢字「借」をもつ語(借家、借金、借用証)であり、脚韻的反応語も同一同語成分「-トリ」をもつものが2語(ちりとり、月給とり)であり(他の1例は「にわとり」)、純粋な音韻的つながりによる連想はあまり強くないという結果が出た。音的連合のあることを説明して再度反応を求めても、51名中27名しか反応語を挙げなかったことから、日本人の音的連合の働きは強くないと言えそうである。したがって、先に触れた「語形などに由来する語感」に見られる言いかえ、忌みことばなどとの関連についてはなお解明すべき事項があると思われる。ただ、無意識の自然な反応が出やすいようにと考えて刺激語に「借金とり」を選んだのであったが、この語は、「借金ヲ取りタテル人(コト)」の意であり、語構成・語義の両面で少々問題があったかと思う。

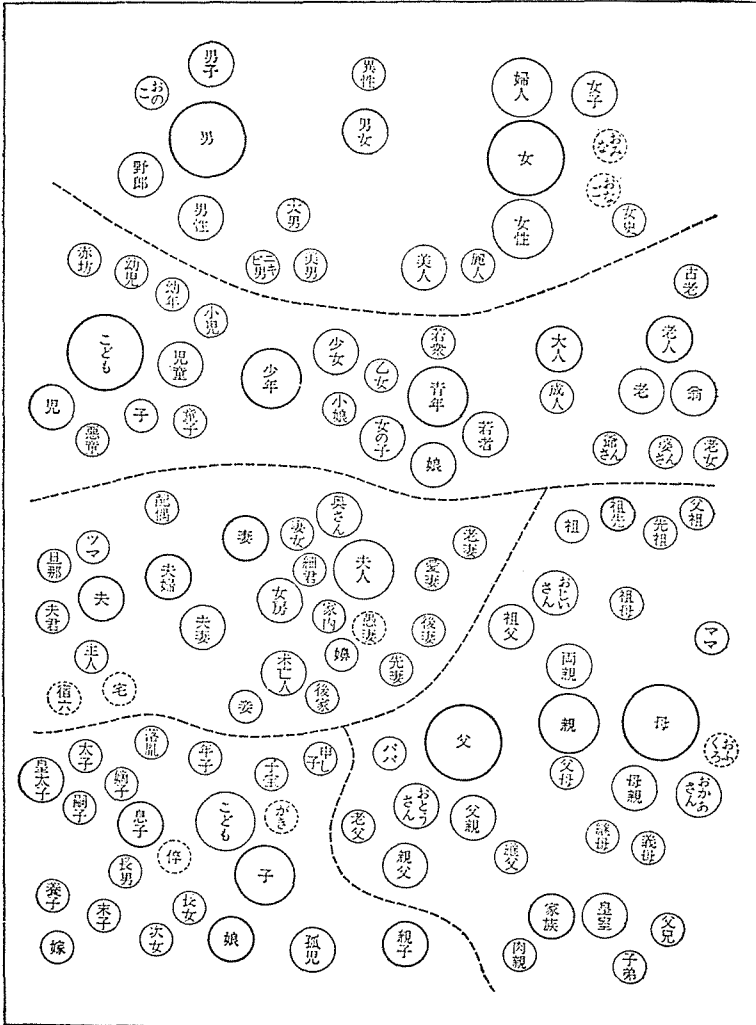
テル、女性→婦人) ③上位→下位 (例. 動物→サル, 家具→テーブル) ④属性・部分 (例. 鳥→飛ぶ, 手→指) ⑤動作 (例. 食事→食べる, バス→走る) ⑥心情 (例. 虹→きれい, 故郷→なつかしい, そよかぜ→快い, ペット→かわいい) などが考えられる。(参照 岡本夏木・清水御代明編『連想反応と意味構造』昭和58年度科研費補助金(総合研究A)研究成果報告書 1984年3月)

日本人の連想反応としては、ある複合語の前項や人口に膾炙した句・諺の前半を刺激語句にした場合、反応語句にその後項や後半が出やすく、〈連想しやすさ〉‘associability’が高い。たとえば、「押しくら」を刺激語にすると「まんじゅう」が出やすく、「舌切り」を刺激語にすると「雀」が出やすい。逆に「まんじゅう」から「押しくら」を、「雀」から「舌切り」を得るのは少しむずかしくなる。従って、特定の反応語を期待する場合(連想ゲームなど)においては、その反応語を後項とするような語句の前項を刺激語にするのが効果的である。「猫」を求めるときは、「犬」よりも「シャム」や「招き」の方が連想しやすいし、「かわら(瓦)」を求めるときは、「屋根」を刺激語にするのがよいだろう。前項から後項への連想は自然で容易であるが、その逆はあまり容易ではないのである。(参照 梅本堯夫『連想基準表』東京大学出版会 1969年、国立国語研究所『幼児・児童の連想語彙表』東京書籍 1981年、Natsuki OKAMOTO and Miyoaki SHIMIZU “Japanese and Japanese Children, Comparative Studies on the Psychological Development in Two Cultures” 1980年)

これまで〈語義〉を軸にして語彙の分類・グルーピングを考えたものには、次のような「星図になぞらえた語彙表」(林大『語彙』、講座現代国語学Ⅱ『ことばの体系』所収 筑摩書房 1957年)や国立国語研究所『分類語彙表』(秀英出版 1964年)、大野晋・浜西正人『角川類語新辞典』(角川書店 1981年)などがある。このうち『分類語彙表』は、現代日本語の約32,600語を意味分類コードによって分類したもので、日本語語彙の研究・教育に資するところの大きい労作である。

星図になぞらえた語彙表（部分的試み）

語彙は主として「総合雑誌の用語」による。円の大きさはほぼその使用率による（4等）。太い線は見出しとなるべきものを示す。



（林大「語彙」から）

1.560

*核 子葉 胚芽 *孢子
樹皮 竹の皮 渋皮 甘皮
とげ いが
刈り株 切り株
やに *樹脂 松やに
種芋
もぐさ

1.560 動物

生き物 *人類 原人 *動物 *畜生 鳥獸
禽獸 鶴龜 魚介 ベット

1.561 獣

けもの けだもの 獣(じゅう) 牛馬 四つ足
猛獣 野獸 家畜 種畜 珍獣 ぬえ
猩々 ゴリラ 類人猿 チンパンジー ひび
*さる やまざる
こうもり もぐら モルモット *ねずみ
ぬれねずみ リス うさぎ しろうさぎ
*とら ライオン *しし ひょう *ねこ
山ねこ こねこ みけ 飼いねこ のらね
こ どりねこ とらねこ
*いぬ 走狗 わんわん こいぬ 猛犬 飼
い犬 愛犬 番犬 餌犬 のら犬 野犬
狂犬 シェパード ちん やまいぬ *お
おかみ こまいぬ
たぬき きつね *くま こぐま しろうま
いたち
かわうそ おっとせい あざらし いるか
くじら 白鯨
牛馬 *うし こうし 雄うし 雌うし 乳
牛(おちうし・にゅうぎゅう) 種牛 水牛
*ひつじ やぎ めんよう しか きりん
*うま こうま こま 若駒 名馬 駿馬
老馬 駄馬 愛馬 種馬 軍馬 馬匹 放
れ馬 奔馬 しまりま ろば
*ぶた 豚(とん) いのしし らくだ かば
さい *ぞう カンガルー

1.562 鳥

*鳥(とり・ちょう) 鳥類 野鳥 家禽 水鳥
(みずとり) 水禽 渡り鳥 候鳥 おどり
珍鳥 猛禽 保護鳥 青い鳥 益鳥 害鳥
おんどり めんどり *ことり *ひな ひ
よこ 親どり
からす むくどり *すずめ ほおろし *ひ
ばり あげひばり *カナリア せきれい
*めじろ しじゅうから やまがら もず
うぐいす みそざい つばめ かわせみ
きつつき かっこう ほとぎす
おうむ みみずく *ふくろう はやぶさ
*たか とび とんび わし 荒わし
さぎ *はくちょう がちょう がん かり
鳩雁 かも おしどり う あひる
はと でんじよぼと やまぼと
ちどり かめつ つる らいちょう うずら
きじ やまどり *にわとり 若鶉 ちゃ
ぼ しゃも しちめんちょう くじやく
だちょう ペンギン
ほうおう 不死鳥

1.563 はちゅう類

爬虫類 かめ すっぽん
*へび 蛇(じ) おろち 大蛇 毒へび ま
むし にしきへび あおだいしょう とか
げ
*かえる かわず おたまじゃくし あおが
える ひきがえる がま あまがえる か
じか 蛙に
いもり

1.564 魚

魚(うお・さかな) 魚類 小ざかな ざこ 生
魚 鮮魚 川魚
たら はぜ かわいい ひらめ きす たい
*あじ ぶり *さば *まぐろ かつお
とびうお さんま めだか
*うなぎ どじょう ふな きんぎょ こい

(参考 Julius Laffal: a concept dictionary of english)

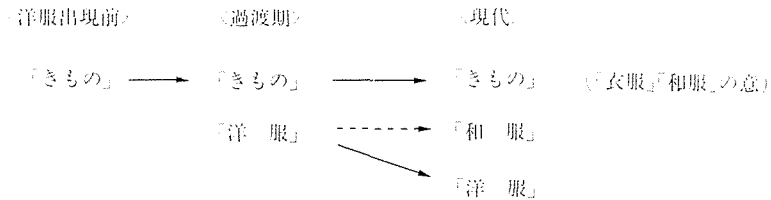
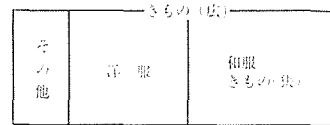
	AID	Category Listing	
Treat v	Unscathed j	Vest v	Warranted v TRUE
Treat v MEDC	Unselfish j GOOD	Vested v	Warranting v TRUE
Treating v	Untreated j LACK	Vesting v	Warranty n TRUE
Treating v MEDC	Upbringing n UP	Vigilance n QUIK	Wary j MOTV
Treatment n	Upheld v	Visa n WRIT	Watch v VIEW
Treatment n MEDC	Uphold v	Vitamin n FOOD	Watchdog n ANML
Trust n FOND	Upkeep n	Volunteer n MOTV	Watchman n VIEW
Trust n MONY	Use v	Vouchsafe v AGRE	Welfare n
Turn n VARY	Used v	Wait v	Wherewithal n
Umbrella n COVR	Useful j	Waited v	Windfall n WEA
Unction n	Usher v	Waiter n MALE	Windshield n VIEW
Undamaged j	Using v	Waitress n LADY	Yield v
Underwrite v WRIT	Utility n	Ward n	
Unharmd j	Utilize v	Warily d MOTV	
Unlimber v	Valet n MALE	Warrant n TRUE	
	ANML		
Adder n	Beaked j BODY	Bulling v POWR	Charger n
Aerie n HOME	Bear n	Bulls n MALE	Chat n UP
Airedale n	Beast n	Bulls v POWR	Cheddar n FOOD
Albatross n UP	Beast n BAD	Bunny n	Cheep n TALK
Alligator n FLOW	Beaver n	Burro n	Cheese n FOOD
Alligator n FABR	Beaver n FABR	Bush n BODY	Cheeseburger n FOOD
Alpaca n	Beef n FOOD	Butter n FOOD	Cheetah n
Alpaca n FABR	Beefier j FOOD	Buttermilk n SIP	Chicken n YNG
Ambergris n MTRL	Beefsteak n FOOD	Buzzard n UP	Chicken n UP
Anaconda n	Beefy j FOOD	Buzzard n AGGR	Chicken n FOOD
Anchovy n FLOW	Beige n FABR	Cabob n FOOD	Chicken n WEAK
Angora n FABR	Bestial j BAD	Cackle n TALK	Chickened v WEAK
Animal n	Bill n BODY	Calf n YNG	Chickening v WEAK
Anteater n	Billygoat n MALE	Calf n FABR	Chihuahua n
Antelope n	Bird n UP	Calve v BGIN	Chimpanzee n
Antenna n BODY	Birds n UP	Calved v BGIN	Chinchilla n
Anthropoid n	Bitch n LADY	Calves n YNG	Chinchilla n FABR
Antler n BODY	Bitches n LADY	Calves v BGIN	Chipmunk n
Ape n	Blackbird n UP	Calving v BGIN	Chirp v TALK
Ape v FOOL	Bleat v TALK	Camel n	Chop n FOOD
Apish j	Bloodhound n SOMA	Canary n UP	Chops n FOOD
Apish j FOOL	Blubber n SOMA	Canine n	Chow n
Aquiline j UP	Bluebird n UP	Capon n FOOD	Chuck n FOOD
Armadillo n	Bluefish n FLOW	Cardinal n UP	Cinch n GARB
Asinine j FOOL	Bluejay n UP	Cardinals n UP	Clam n FLOW
Asp n DAMG	Boar n	Caribou n	Clam v BLOK
Ass n	Bobcat n	Carnassial j BODY	Clammed v FLOW
Ass n FOOL	Bobolink n UP	Carnivorous j FOOD	Clammed v BLOK
Asses n	Bobwhite n UP	Carp n FLOW	Clamming v FLOW
Asses n FOOL	Bossy n LADY	Cashmere n FABR	Clamming v BLOK
Auk n UP	Bovine j	Castor n GARB	Clod n FOOD
Aviary n HOME	Bowwow n TALK	Castor n MTRL	Cluck v TALK
Baa n TALK	Boxer n	Cat n	Clutch n BGIN
Bacon n FOOD	Bray n TALK	Catbird n UP	Coat n BODY
Baloney n FOOD	Bristle n MTRL	Catcall n TALK	Cobra n
Bark n TALK	Broiler n FOOD	Catfish n FLOW	Cock n MALE
Barn n HOME	Bronco n	Catgut n MTRL	Cockandbull j FOOL
Barns n HOME	Brush n BODY	Cattier j AGGR	Cockle n FLOW
Barnyard n HOME	Buck n MALE	Cattle n	Cockpit n DAMG
Bass n FLOW	Buff n FABR	Catty j AGGR	Cocks n MALE
Bat n UP	Buffalo n	Cavalier n DAMG	Cocktail n
Bay v TALK	Buffalo v FALS	Cavalry n DAMG	Cod n FLOW
Bayed v TALK	Bull n MALE	Caw n TALK	Collie n
Baying v TALK	Bull v POWR	Centaur n MYTH	Golt n YNG
Bays v TALK	Bulldog n	Cervine j	Comb n BODY
Beagle n	Bulled v POWR	Chanticleer n MALE	Condor n UP
Beak n BODY	Bullfight n DAMG	Chap n BODY	Conger n FLOW

8—11 語義の変化

土地が変われば語も変わり(方言的変容)、時代が変われば語も変わる(歴史の変遷)。前者には関西の「いかき」と関東の「ざる」、同じく「なんぼ」と「いくら」などの例があり、後者には「ひとや」→「牢屋」→「監獄」→「刑務所」、「歯どめ」→「ブレーキ」などの例がある。このような方言学や語彙史学が研究対象とする空間的乃至は時間的な分布・変容・変遷の事象とは別に、愛知県瀬戸において製産された陶磁器を呼ぶために用いられた「瀬戸物」という呼称が、のちに広く「陶器」一般を指すようになり、古くは「わが君は生まれおはしたりし」(源氏物語「薄雲」)のように中立的な意味で「人・動物が胎内に子をやどす」意で用いられた「はらむ」が、現代では、比喩義を別にすれば、もっぱら動物について用いられ、婦人について使うと極端に失礼な言い方になるなど、個々の語の語義自体が変化する現象がある。語義の変化は、音韻体系・文法体系などにおける変化と同じく、語彙体系における変化として見なければならぬ。古語「テフ」が「チョウ」に変わり、さらに疊語化して「チョウチョウ」になり、最終拍が脱落して「チョウチョ」になったのは語形の変化である。また「くんだり」から撥音挿入によって生まれた「くんだり」のように、語義分化が語形上の差に支えられているような<二重語> ‘doublet’ の場合は、もちろん語形・語義両面における変化が見られる。「あまり」と「あんまり」、「抜く」と「脱ぐ」などは二重語の例である。(ちなみに、ラテン語 ‘carta’ から出来たカルタ、カルテ、カルト、カード、チャートは經由言語の違いや受け入れ時期の違いによって、類義の5形が別語となって定着しているので<五重語> ‘quintet’ と呼ばれる。トロッコとトラック、コップとカップ、チョッキとジャケット、ストライキとストライク、シネマとキネマなど外来語にとくに二重語が多い。) 二重語は同一語源核から出た1対の語で、一方は音韻変化を受けた語で、他方は音韻変化を(ほとんど)受けずに来た語で、たいてい語義上多少の差を有する組となっている。漢語の「食堂」を「ジキドウ」「シヨクドウ」と2様によみ、「学生」を「ガクショウ」「ガクセイ」と2様によむのも、字音のち

がいに基づく二重語の例と考えられる。「和服」という語は、「洋服」の登場によって、在来の日本式衣服を限定的に指示する必要から使われるようになったと考えられる。これに伴って、「きもの」については「衣服一般」と「和服」との広狭2義が使い分けられるようになった。

これは、新語の登場とそれによって起こる語義構造・語彙体系の変化の例である。「瀬戸物」や「きもの」の例に見られるように、ある語の意味が変わるといことは、その語およびその語と意味上の関連をもつ諸単語の用法



が変わることを意味している。語形(音韻)の変化の場合、ある時期には「はわ」と「はは」がともに見られたり、「ゲンギョ」と「ゲンゴ」がともに使われたりすることがあるが、おおむね短期間に新形に固定し、古形が消失してしまう。新旧2形が共存するのは、「やっぱり」と「やっぱし」の場合のように、雅俗の語感差がある場合か、「くんだり」と「くんだり」のように、両者の意味・用法に差異がある場合である。一般には古形が消失するというのが語形上の変化の特徴である。これに対して、語義の変化の場合は、新義が生じて必ずしも旧義が消滅するとは限らない。旧義が時を経て消えてゆくこと(「もどかしい」の古義<非難すべきさま>や「あわれだ」の古義<りっぱだ, とうとい>などの場合)は少なくはないが、それは必然の成

りゆきなのではない。語義の世界はむしろ新義の累積で時とともに豊かになり、複雑になるというところに特性があると見なければならぬ。以下に語義変化の一般的傾向を挙げる。

(1) 具象→抽象

具体的可視的な物・動作・感覚を表す語が抽象的な意味に使われるようになることが多い。「頭が大きい」の「頭」が、「頭がよい」「心配で頭が痛い」などと使われたり、「グランドを走る」の「走る」が「気が走る」「伝線が走る」のように使われたり、「冷たい水」の「冷たい」が「冷たい人」「冷たい仕打ち」のように用いられりして、抽象的になる場合である。とくに、「目」「あし」「手」「耳」「腹」「口」などの身体部位名や「道」「山」「海」「実」「花」「石」などの基本的な名詞に抽象化の例がたくさん見られる。

(2) 空間→時間

もとは空間に関する語義をもっていた語が時間に関する語義をもつようになることも少なくない。「まえ」という語は元来「ま(目)」+「へ(方)」であったとされ、「目の前」を意味したが、<ある時点を境にしてそれ以前>を指すようになり、「3年前」「戦争の前」のように使われるようになった。(ちなみに、中国語の‘mùqián(目前)’は<目の前、現在>の意である。)「あいだ」「うち」「あと」などの名詞だけでなく、「行く」「来る」「渡る」「のびる」「移る」などの動詞にも、「長い」「短い」「遠い」「近い」などの形容詞にも、空間性から転じた時間性の意味がある。

(3) 空間→血縁・心理

「近い親類」や「遠縁」「遠くて近いは男女の仲」などの例では、空間的な語義から血縁上の、あるいは心理的な意味に転じている。「食が細い」「神経が細い」「肝っ玉が太い」「細かい心遣い」「金に細かい人」などの「細い」「太い」「細かい」や「奥義をきわめる」「心の奥」「奥の手」「肚の底」「底を割って話す」などの「奥」「底」も心理的な意味に用いられている。

(4) 感覚の移行

主として感覚表現に関する形容詞に見られる変化の傾向で、語義が原感覚から他の感覚や性質に変わる例である。「大きい声」(視覚→聴覚),「からい点」(味覚→性質・態度),「かたい人」(触覚→性質),「黄色い声」(視覚→聴覚),「暖かい色」(温度感覚→視覚),「計数に明るい人物」(視覚→知識),「まるいお人」(視覚→性質),「どうもあの男がくさい」(嗅覚→犯罪性・性質)。

このような変化は、心理学でいう<共感覚>‘synesthesia’の働きによるものと考えられるが、日本語ではこの例に聴覚に関する形容詞が「味にやかましい人」ぐらいで、少ないこと、また本来味覚を表す形容詞が他領域で活発に使われること(例、「渋い芸」)が特徴的であるとされる。(参照 長嶋善郎「意味の変化」『日本語教育事典』)

(5) 一般化(拡大とも)‘generalization’

語の指す範囲が拡大する傾向。先に挙げた「瀬戸物」のほかに、「坊主」(「坊の主である僧」→「僧一般」),「奥様」(「めったに他人に会ったりしない、士分以上の人の妻」→「夫人」),「挨拶」(もと「禅問答におけるやりとり」→「人との出会い・別れの際にやりとりする社交的なことば」),「玄關」(「玄妙な道に進むべき入口」の意で、もと禅門に入ることから「禅寺で客殿に入る門」→「家の正面の入口」)などがある。

(6) 特殊化(縮小とも)‘specialization’

語の指す範囲が狭くなる傾向。平安時代には、時に「山」が「比叡山延暦寺」を、「祭」が「賀茂祭(葵祭)」を、「寺」が「三井寺」を指した。これは都が京都にあったための語義の特殊化の典型的な例である。「おとうと」(「同性同士の弟・妹」→「弟」),「とり」(「鳥類」→「鶏」),「さかな」(「酒肴」→「魚」),「しょうじ」(「部屋と部屋とを仕切るためのふすま・ついたて・からかみ・明り障子などの建具の総称」→「明り障子」),「ころも」(「衣服」→「僧衣」),「しし」(「けだもの」→「猪」または「鹿」)などがその例である。なお、「カップ(合羽)‘capa’」「ボート」「カップ」「トロッコ」「アベッ

ク」「リート ‘Lied’」「カルテ」「アルバイト」などの例にみられるように、外国語（の主として名詞）が日本語の中で使われ、外来語になるとときには、ほとんどつねに原語の意味が限定を受け、特殊化されてしまうことを見落としてはならない。

(7) 価値の上昇 ‘amelioration’

代名詞「僕」はもとは字義どおり「(あなたの) 下男」「(主人の) しもべ」を意味したが、現代では、同等以下の相手に対して使う、くだけた場面での自称となっている。原義から見ると、相対的に価値が上がったことになる。「未亡人」という語も、もとは字義から察せられるとおり、謙譲の自称詞であったが、今では、「後家」「寡婦」とは異なり、他人に対して敬意をこめて呼ぶときに使われる語となっている。「天気」や「果報」は元来は中立的な意味の語であったが、前者は「良い天気」の意味で使われることが普通になり、後者はもっぱら「良い果報」だけを意味するようになっていく。これらが、価値の上昇した語の例である。

(8) 価値の下落 ‘deterioration’

2人称代名詞「貴様」は、むかしは「あなた」の意味で使われたが、現在では、同輩以下の者（を軽蔑して呼ぶとき）に用いられていて、明らかにねうちが下がってしまった。「お前」も同じである。このような価値の下落は、代名詞や程度副詞によく見られる現象である。先に挙げた「はらむ」のほか、「女房」「女中」「因果」なども価値の下落した例である。

以上のような語義変化には、多かれ少なかれ、語義の類似性 ‘similarity’ か近接性 ‘contiguity’ が契機となって連想作用を起こさせた結果であると見られる。＜連想＞‘association’ によって意味変化のメカニズムを説いている池上嘉彦『意味の世界』（NHKブックス 1978年）の一説を勧めたい。

次に、語義の変化を原因の方から考えてみよう。語義変化には、言語的原因と非言語的原因が考えられ、後者はさらに、現実的原因・社会的原因・心理的原因に分けられる。

α 言語的原因

「(好) 天気」や「(よい) 運」のように、被修飾語が修飾語の意味を吸収した場合と、関西の「おおきに (ありがとう)」「杜甫 (の詩)」のように、修飾語が被修飾語の意味を吸収した場合と、「黄色い白墨」「朱墨」のように、修飾語が付いたために被修飾語の意味が一部分減殺される場合などに分けられる。

β 現実的原因

「駅」という語は、もと街道に設けられた宿場の意で、文字どおり「馬」をとりかえ乗り継ぐ場所であった。「はなむけ (餞・贈)」は「馬の鼻向け」の意味で、旅立つ人のために宴を催し、その人の乗る馬の鼻を進行方向に向けてやることであった。そののちもこれらの語は語形を変えずにそのまま用いられてきたが、指示対象が変わったために、語義変化が起こったのである。「かね」がコインでない紙幣をも指すようになったのは、現実界での変化に語が応じた例である。

γ 社会的原因

一般に広く使われている語が特定の小集団や特定の場で用いられると、意味の特殊化が起こり、反対に、特定の小集団で用いられていた語が一般に広く使われるようになると意味の一般化が起こる。「ひも」は物をしばる細くて長い紙・布・革などを指すが、「ひもで操る」や「(女の) ひも」というときの「ひも」は特殊化している。「花」も遊び人のあいだでは「花札」「揚げ代」の意味になり、寺や葬儀の場では「シキミ (檜・櫛)」を指し、特殊化している。また、「やばい」は「警察につかまりそうで危険だ」という俗語であったが、一般に使われるようになって、単なる「危ない」という意味になった。「本命」は元来「その人の生まれ年のえと (干支)」を指していたが、競場・競輪などで「優勝候補の馬・選手」を指すようになり、やがて一般人が使うようになって、「選考などに際して、第1位・最有力と目されている人物」を指すようになった。「ホームラン」が「快挙」を、「横綱」が「同類中の最優秀者 (物)」を、「低気圧」

が「機嫌のわるいこと」や「変動直前の不気味さ」を表すのは、いずれも一般社会での使用によって語義が拡大した例である。

δ 心理的原因

先に「終わる」の代わりに「開く」が用いられる場合のあることを述べた。名詞「お開き」の使用は、めでたい会合について「終わり」を口にすることをはばかる心理に発している。この場合、結果として、「お開き」という語に「終わり」「閉会」の意味が生まれたことになる。(この語には、別の忌みことばとして「敗走すること」「逃げのびること」の意味もある。)「あせ」に「血」の意味が、「なくなる」に「死ぬ」の意味があるのも、心理的な原因による。縁起をかつぐ心情から「かちいろ(褐色)」に「勝ち色」の意味が生まれたりするのである。

このほかにも語義・意味の研究について触れるべきことがあるが、巻末に挙げたようなすぐれた研究書も少なくないので、ここでは説明を割愛する。

[問148] 手持ちの辞書によって、「鳥」の意味を調べてみよ。できれば何点かの辞書の意味記述を比べてみること。

[問149] 「家具」について、Aの辞書は「家庭で用いる日常の道具。室内に配置する器具類の総称。」とし、Bの辞書は「家の中に備えおく道具。例、机・たんす。」とし、Cの辞書は「生活のために、家にそなえておく道具。たんす・いすなど。」としている。3者の中で、説明が平易でわかりやすいのはどれか。また、具体的で児童にも理解しやすい説明はどれか。上の3辞書の意味説明から、「金づち」「足継ぎ」「傘立て」「下駄箱」「まな板」「テレビ」「洗濯機」「掛け軸」が「家具」に含まれることになるか否かを考えてみよ。

[問150] 「石あたま」という語は、「石」の意味のうち、どんな意味特徴を強調したものであるか。

[問151] 本文に挙げていない空想上の動植物を指す語を挙げよ。

〔問152〕 マンションの広告に「サニーハイツ」「ハイラーク」「シェモア」などの名称があった。それぞれどんな暗示効果を期待した名称かを考えよ。

〔問153〕 「ぬるい」という語について、辞書がどんな意味説明をしているか調べてみよ。また、和英辞典や日中辞典によって、「ぬるい」の語義が的確に訳されているかどうかを確かめてみよ。

〔問154〕 「列車が 長い トンネルを 通過する。」という文において、その成分4項と範列的関係に立つ語群を挙げよ。

〔問155〕 「雨」「飲む」「高い」の3語のそれぞれと統合的關係に立つ語群を挙げよ。

〔問156〕 「美しい水車小屋の乙女」という表現において、「美しい」という修飾語がかかりえる2項（「水車小屋」と「乙女」）のうち、どちらが自然であるか。被修飾語の意味特徴から考えてみよ。

〔問157〕 「坊主」「蝸坊主」「海坊主」「坊主山」の4語から考えられる「坊主」の意味特徴はどんなものか。

〔問158〕 「枯れる」という動詞の意義素はどのようなものか、調べて答えよ。

〔問159〕 「美しい」と「きれい（だ・な）」の意味の違いについて述べよ。

〔問160〕 「起きる」と「目覚める」の意味はどのように違うか。

〔問161〕 副詞「やっ」と「とうとう」の意味の違いはどんな点にあるか。

〔問162〕 次の各語の反義語を挙げよ。

子孫 進取 登校 整然 有罪 入院 新式 好き 真冬 夕方 富裕
積極性 向上 損失 覚える 動かす 暮れる けなす 肥える 浮く
捨う 減る やすやすと 光 出社 広げる 強い 愚鈍 入れる
ソフト アップ

〔問163〕 次の語の類義語をなるべく多く挙げよ。

付近 鏡 高み 尋ねる 頂上 平和 和装 おん(音) 静寂 新春旅行

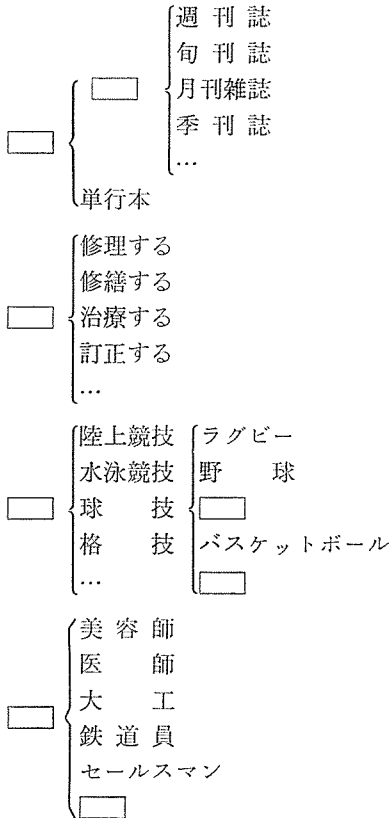
〔問164〕 「話す」と「しゃべる」では、どういう意味特徴が違うのか考えよ。

- 〔問165〕 「定数」「常数」「恒数」はどれも‘constant’の訳語であるが、使用分野が異なっている。それぞれどういう分野の語か調べてみよ。
- 〔問166〕 「運賃」と「料金」はともに鉄道用語であるが、どんな違いがあるか。
- 〔問167〕 「落第」と「留年」の違いについて述べよ。
- 〔問168〕 「梯形（ていけい）」と「台形」の2語にはどんな違いがあるか。
- 〔問169〕 「こうば」と「こうじょう」（ともに「工場」と表記される）の意味の違いについて考えよ。
- 〔問170〕 「ゆで卵」と関西で使われる「煮抜き」とは、指示対象が同一か否か調べてみよ。
- 〔問171〕 「しんどい」と「疲れた」の意味の違いについて述べよ。
- 〔問172〕 「義母」「継母」「ままはは」の意味の異同について調べてみよ。
- 〔問173〕 「我慢」と「辛抱」の意味の違いについて調べよ。
- 〔問174〕 「シネマ」と「キネマ」, 「ストライキ」と「ストライク」, 「ガラス」と「グラス」の意味の違いについて述べよ。
- 〔問175〕 <帯説>（偏義構造の語）の例を挙げよ。
- 〔問176〕 「花の都」「梅の花」「花も実もある処置」「花だより」「後進に花をもたせる」「武道の花」などの例の中の「花」を、原義と転義（複数）に分け、それぞれについて説明せよ。
- 〔問177〕 辞書により「手」の転義のいろいろを求め、それらの用例を挙げてみよ。
- 〔問178〕 植物名に冠せられる「鬼」の意味特徴について述べよ。
- 〔問179〕 「とる」という動詞について、辞書類がどのように意味分類をしているか調べてみよ。
- 〔問180〕 「わけ」という名詞について、辞書類がどのように意味分類をしているか調べてみよ。
- 〔問181〕 英語の辞書の‘keep’, ‘make’, ‘thing’の意味分類について調べてみよ。

〔問182〕 次の語群を語義の分野別に分け、抽象度の高いもの順に並べよ。

ツバメ 少年 気候 かな 男 天候 とり 大工道具 渡り鳥
植物 卵生動物 ヒト めしべ 哺乳動物 道具 花 天気 草花

〔問183〕 次の の中に適当な語を入れよ。



〔問184〕 次の各組の語を意味の広い順に並べよ。

- (1) 両棲類 蛙 動物
- (2) 心臓外科 外科 医学
- (3) 活火山 阿蘇山 火山 山
- (4) 営業部員 社員 サラリーマン 社会人

- (5)大豆 植物 穀類
- (6)地球 太陽系 惑星 天体
- (7)回数券 乗車券 切符
- (8)巡査 警察官 公務員

〔問185〕 次の文の下線部の単語を、さらに意味の広い単語に置きかえよ。

- (1)12時になったので、そば屋に入りました。
- (2)池に緋鯉がたくさん泳いでいる。
- (3)当日小論文を課するので、鉛筆を携行すること。
- (4)私は石川啄木の『一握の砂』が好きです。
- (5)市中には高級外車がたくさん走っている。
- (6)スーパー林道の両側には白樺林が広がっていました。

〔問186〕 次の各組の語群には1語だけ仲間外れになるものがある。その1語はどれか。

- (1)山かけそば たぬきうどん ラーメン カレーライス すうどん
- (2)円盤投げ マラソン 走り高跳び 三段跳び 走り幅跳び
- (3)イソギンチャク クラゲ ヒトデ サンゴ虫 コンブ
- (4)ミルク ジュース みそ汁 ヨードチンキ お茶
- (5)肺 心臓 胃 膝 肝臓

〔問187〕 次は同レベルの語を並べたものである。()の中に入るべき語を挙げよ。

- (1)自動車 () ワゴン トラック
- (2)サクラ ウメ () レンギョウ
- (3)牛 () ろば 駱駝
- (4) () 漿果 核果
- (5)詩 戯曲 和歌 随筆 ()

〔問188〕 次の各句の中の動物の数は、それぞれいくつか。

- (1)つゆじもの鳥がありく流離かな (加藤楸邨)
- (2)舟虫の量をはしる野分かな (久保田万太郎)

- (3)方丈の大庇（びさし）より春の蝶（高野素十）
 (4)をうをうと蜂と戦ふや小百姓（村上鬼城）
 (5)遡る百里の江なる鱸（すすき）かな（松根東洋城）
 (6)闘うて鷹のゑぐりし深雪なり（村越化石）

〔問189〕 「われわれ青年はりっぱに育とう」というスローガンがあった。この表現のおかしい箇所を指摘し、その理由を述べよ。

〔問190〕 次の表現の「きめる」を一層適切な表現に改め、改める理由について記せ。

役員選出の方法については別にきめる選挙細則によるものとする。

〔問191〕 次の複合語の意味を書け。

山いも明太子（めんたいこ）あえ
 麻プリント外出着
 木製ゴミ袋スタンド
 メロディーつきお祝い電報
 ワンタッチ果物皮むき
 保冷ショッピングバッグ
 クリーンライス

〔問192〕 次の複合語のうち、結合契機のあると思われたものに○印をつけよ。

坊主あたま 陰膳 七並べ 猫背 花水 庭乗り 烏金(からすがね)
 地獄耳 仮名鎖(ぐさり) 橋渡し 湯呑み 年木 蛸踊り 北枕 枕木
 けもの道 鳥目(とりめ) 雨男

〔問193〕 辞書によって次の各複合語の意味を調べ、成分と全体の語義との関係を考えよ。

水引(き) 水取(り) 水屋 寝癡 男女(おとこおんな)
 裏書(き) 売り込む

〔問194〕 次の表の空欄に適切な語を書き入れよ。

対象的(中立的)		おん(音)		僧(僧侶)
感情的	方・人間・者		せい・おかげ	

〔問195〕 次の各組の語の語感の違いについて述べよ。

- (1) 活動写真／映画 身代／財産 分限者／金持ち シャッポ／帽子 ピンポン／卓球
- (2) いずれも／どれも たれ／だれ おとなう／たずねる なべて／すべて かしら／あたま
- (3) うお／さかな うまい／おいしい めし／ごはん くう／たべる 汁／おつゆ
- (4) 宿六／夫 野郎／男 ぬかす／言う ばてる／疲れはてる ざま／ようす つら／顔 くだばる／死ぬ おいぼれ／年寄り
- (5) 玄関／ポーチ 買物／ショッピング 繊細さ／デリカシー 会合／ミーティング 練習／トレーニング 地位／ポスト

〔問196〕 次の各語の語感は、その語形と関係があるかどうか考えてみよ。

ぎっくばらん ちゃきちゃき ぐず ちゃんぼん れっきとした むちやくちゃ ちゃづつ てっぺん ざっとう れっとうかん むちゅうちゃんす

〔問197〕 次の語を改まった感じの語に言いかえよ。

一番(副詞) ちっとも 有名な うらぎり きのう 今晚 夫婦もっと がっかりする ごちゃごちゃした おとし

〔問198〕 次の各組の語から連想される語を挙げよ。

(うさぎ・太陽・クレーター) (サクラ・人出・浮かれ気分) (神社・入口・笠木) (山門・本堂・僧侶) (かわいい・遊ぶ・おもちゃ) (かばやき・ひげ・急上昇)

〔問199〕 次の名詞を用いた比喻表現を挙げよ。

鳥 ドジョウ 縄 ウサギ 狼 山 牛 クモの子 スズメ 赤子 蛙 鶴

〔問200〕 次の語のうち、原義のほかに、①一般化した語義をもつもの、②特殊化した語義をもつもの、③価値の上昇した語義をもつもの、④価値の下落した語義をもつものを指摘せよ。

腕 つま 普請 心臓 つら しぶい さかな 花 めし 宮 目 歯
先生

〔問201〕 次の各組の単語のうち、原義で用いられているものはどちらか。

- (1) クジラは頭が大きい。／彼は頭がいいね。
- (2) 気球が上がった。／物価が上がった。
- (3) もう外が明るくなった。／あの子は性格が明るくなった。
- (4) 右の腕がしびれている。／大分君も腕が上がったね。
- (5) きゃつのやり方は汚いね。／ずいぶん部屋の中が汚いじゃないか。
- (6) あの先生は点のつけ方がからい。／この漬物はからいです。
- (7) うさぎの耳は長い。／食パンの耳もパンがゆにして食べます。
- (8) 長い目で見える。／長い直線コースを一目散に逃げた。

〔問202〕 「こぶ」と「こんぶ」は二重語である。どちらが後から出来た語か。また、両語はどういう点に違いがあるか。

〔問203〕 二重語には、ほかにどんなものがあるか、3組以上挙げよ。

〔問204〕 二重語「せ」と「せい」（ともに「背」）の相違点について述べてよ。

〔問205〕 「一服（いっぷく）」という語の原義を調べ、現在の意味がどうして生まれたかを考えてみよ。

〔問206〕 次の各語の原義を調べよ。

「やかん（薬罐）」「ついでち（一日）」「やにわ（矢庭）」「ころも」
「ただし（但）」

〔問207〕 「雁」を指す「がん」と「かり」はどのように違うか、調べて答えよ。

9 語の表記

9-1 表記法と語意識

日本においては、特別の場合（たとえば、国語教育や日本語教育の入門期段階など）を除いて、〈分かち書き〉というものが行われていないために、語そのものを簡単に視覚的にとらえる方法はない。英語とかインドネシア語のように、語ごとの分かち書きをとっている多くの言語では、文字教育を受けはじめると〈語意識〉が逐次視覚面から形成されることになる。しかし、日本語ではいわゆる〈べた書き〉が普通で、語の前後にスペースを入れないから、どこからどこまでが1語であるか、見当もつけにくい。国際電報を打つときに、「ゴニユウガクオメデトウゴザイマス」と一つづきに書いてもよいかもしれない。むしろ、逆に日本語教育の入門期によく使われるローマ字表記では、スペースやハイフンをどういう方式で、どの程度用いるのが、きわめて厄介な問題になるのである。‘onamae’か‘o-namae’か、‘yūmeidesuka’か‘yūmei desu ka’か、‘kenkyūjo’か‘kenkyū-jo’かなど、教材づくりの際に悩まされることが多い。

日本では、語意識の形成は、名詞・代名詞などを除くと、文法教育や語彙教育（体系的に行われることはほとんどない）をまっけてはじめて本格的なものになるのであるが、そこにどうしても理論的反省的にならざるをえない事情がある。いずれにしても、語とその表記とのあいだに一定の距離があるというのが実態である。本章では、複雑な体系をもつ日本語の表記法と語との関係を中心に考えていくことにしよう。

9-2 没正書法性

アルファベット字母を用いるヨーロッパなどでは、話される個々の単語の書き方にある習慣があり、‘spelling’（綴り字）とか‘orthography’とか称されている。これは表音文字の使用がしからしめたもので、個々の語ごとに、

その書き表し方が約束されて固定しているわけで、英語なら1人称単数代名詞の主格形はつねに‘I’と大文字で書かれ、‘a black bird’と‘a blackbird’とは厳密に区別される。前者は一般の黒い小鳥であるが、後者は「ツグミ」（英国）か「ムクドリ」（米国）の類を指すのである。このように欧米では、‘orthography’の字義的な意味に当たる〈正書法〉（正字法とも）の観念が、文字教育の基礎に厳然と据えられている。しかし、日本では事情が全く異なる。

たとえば、文字句読点にまで神経を使ったと考えられる谷崎潤一郎の作品『細雪』にも、次のような近接した箇所、同語の異表記が見られる。

「テーブルクロスの上に落ちた物をさえ食べてはならないとするような
躰かたは幸子や雪子の流儀で……」（上二十四，新潮文庫194ページ）

「悦子が今のような神経衰弱になった原因は、お前や雪子ちゃんの躰方
にあるのだ、……」（同上196ページ）

また、「ひと××」と書くときは、ほとんど「一と仕事」（上八，同上48ページ）のように「と」を書くのであるが、まれに「一揃」（同上46ページ）と書いていて、統一的でないことがある。『文章読本』を著した文章家でさえこういう書き方をするのであるから、その他は推して知るべしであろう。

固有名詞を除くと、同じ語を同一人が幾とおりにも書くということが、意識的にも無意識的にもよくあるわけで、日本人には〈正書法〉という観念が存しないことに注意する必要がある。

9-3 漢字正字意識と好字志向

日本人の文字意識の根底には、漢字をもって真なる文字、文字らしい文字、本来の文字とする考え方が脈々と流れている。かつて漢字を「真名（まな）」と称し、自ら作った文字を「仮名（かりな・かな）」と称したところに、古人の意識がよく反映している。文字のなかった古代に漢字がもたらされ、それを略したりくずしたりして仮名を創出したこと、平安初期に、漢字を正字、漢音を正音とする風が確立されたことが、日本人の文字意識を形成

してきた。日本の固有名詞が少数の例外を除いて、つねに漢字で書き表されるのも、漢字正字意識の表れと考えられる。擬音語や擬態語のような、語形が生命と思われる語類にも、「癸（ざんぶ）」「井（どんぶり）」「發揮（はっきり）」「媿々（くどくど）」「滅茶苦茶」のような漢字を当て、外来語にも「合羽（カッパ）」「軽衫（カルサン）」「歌留多（カルタ）」「型録（カタログ）」のような漢字を当てるが多かった。この正字意識は、時には「癸」「井」のように〈国字〉（和字ともいう、和製漢字のこと）を生み出すことになった。「凧」「辻」「畠」「峠」「込」「働」「鱈」「適」などである。これらは日本で造られたものであるから、訓しかもたないはずであるが、「畠」「働」など少数のものには、ハク、ドウのような音がある。国字の大半は、日本特有事物を指示する語のために造り出されたものであり、魚類・和服・神道などに関するものにとくに多い。国字の意味上の分布を調べると、日本の語彙の特色の一端が把握できる。（参考 エツコ・オバタ・ライマン：「国字（日本製漢字）」の定義と範囲 『言語生活』No.348, 1980年12月）

このような漢字に対する強い意識は、自然に漢字の字義についての嗜好・感覚に強い刺激として働いた。それが〈好字〉（よい意味の漢字）志向である。はやく和銅6年（713年）に全国の国郡郷名に「好字二字」を当てるようにとの詔勅が出されたこともあり、地名にはことに顕著な好字志向がうかがえる。

「二荒」→「日光」, 「川内」→「高地」→「高知」, 「凹地」→「王寺」, 「大坂」→「大阪」のほか、新しい北海道の地名にも「幸福」などが見られる。この志向は一般の語（多くは名詞）にも広がって、「寿司」「数寄屋」「頼母子講」「五目ずし」「芽出度い」などの一般に定着したもののほか、「寿留女」「家喜芋」「勝男」「寿恵広」「護美箱」「登運勝」「豆富」のような半定着のものまで生み出すことになった。（参考 『言語生活』No.289 1975年10月 特集—現代の誤字・「娯」字・「感」・字）

9-4 漢字と仮名の機能分担

現在、日本人は4種の文字をあわせ用いている。概括的に示せば、

表音	{	表音表意(表語)文字……漢字(山, 亜, 伊 など)
		音節文字……仮名 { 平仮名(や, ま, を など) 片仮名(ヤ, ソ, ツ など)
		音素文字……ローマ字(S, L, m など)

ということになる。前々節で日本語の没正書法性について書いたが、それは、一往どのように書いても許されるということであって、完全な無秩序状態を意味するものではない。大原則は、〈実体語の意義部はおおむね漢字によって書き表され、機能語や活用語尾などの形態部は平仮名で書かれる〉ということである。

(例) 新しい本と辞書を買いました。

しかし、この大原則にはいくつかの例外がある。その例外について、いま詳しく説明する余裕はない。各種の辞典に付録として記載されている「現代かなづかい」「送り仮名の付け方」「常用漢字表」などの表記基準を活用してほしい。

ここでは、文字別におおよその使用法を紹介しておこう。

(1) 片仮名語

通例片仮名によって表される語を片仮名語という。

- a 擬音語 ドシン ピューピュー パチン
- b 外来語 セット モダン ガラス
- c 外国の地名・人名 バリ ゲーテ
- d 動・植物名 ヒト サクラ
- e 漢文訓読における送り仮名(ヲはこの場合にしか用いられない)

以上のほか、隠語・俗語(ガイシャ サツ ペテン スケ)、表外漢字を用いる漢語(コウカイ 公廩, カレンチュウキェウ 苛斂誅求), 擬態語(ギラギラ ピカリ 平仮名書きが普通である), 電報文(スグ デンセヨ), 事務用書類(保険・年金・ガス・電気などに関する機械処理をされる書類), そ

の他とくに特定文脈中において強調される語句（クヤシイ！、オドロキ）などである。（漢字・平仮名まじり文が普通であるため、文中の片仮名がとくに目立つわけである。）なお、語の性格上、片仮名以外では表せない「ト書き」「ロハ」（無料、「只」から生まれた）や「猛烈」を片仮名書きにし、さらに意識的に外来語めかした「モーレツ（社員など）」等もある。

(2) 漢字語

ごく少数の例外を別にすれば、日本人の姓は漢字ばかりで書き表される（例外・田ヶ原、竹ノ内、一の瀬など）。多くの名詞、用言（自立活用語）の語幹などはほとんどつねに漢字で書かれる。「僕」「私」「大変」「随分」などの代名詞・副詞は近年平仮名で書かれることが増えてきた。「然し」「嗚呼」「也」なども、現代では特別な場合にしか使われない。反対に、主として書記言語の中で新たな音訓を得た「平米」「路肩」「防曇レンズ」「美肌」のようなものが増えつつある。しかし、漢字語の大半は＜漢語＞である。漢語はその定義上、漢字で書かれることになっているからである。その例外になるのは、代名詞・副詞などの頻用される漢語と、表外字で書かれるべき漢語の場合である。

(3) ローマ字語

つねにアルファベット字母で書かれる語。大文字で書かれるものが多い。近年略語が増えるのに伴って、ローマ字語の増加が加速されている。

GNP, SL, EC, IQ, UFO, LL, Tシャツ, Yシャツ, W幅, H棟(マンションなど), Qきっぷ, KO, KK, vs, kg, cm, ppm など。

9—5 書き分け

山のあなた

カアル・ブッセ

上田敏訳

山のあなたの空遠く

「^{さいはひ}幸」住むと人のいふ。

噫、われひとと尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

上の訳詩の中の「人」は原詩では‘die Leute’（人々）、「ひと」は‘der Andern’（他の人）である。上田敏は原詩の中の別の語を、「人」と「ひと」というように、巧みな書き分けによって示している。

われわれは和語を書く場合に、ときに漢字の選択に迷うことがある。「字をカク」は「書く」とし、「絵をカク」は「描く」とし、「背中をカク」は「搔く」とする。「赤ちゃんがナク」は「泣く」であるが、「鳥がナク」場合には「鳴く」か「啼く」である。「棒高トビ」には普通「跳び」を使うが、「飛び」でもよい。しかし「海外へ高トビ」には「高飛び」しか使われない。以上の場合、かなり漢字の使い分けが習慣化していて、一般人にも区別が明らかな場合である。「見」「観」「看」,「聞」「聴」「訊」などにも問題は無い。しかし、「川」と「河」,「木」と「樹」,「舟」と「船」になると、大小、総称と特称の違いと言えそうであるが、個々の用例にあたると、必ずしもそうとは言えない。古語の例では、大宝令の制で規定された官の長官を意味する「かみ」,次官を意味する「すけ」などの場合がある。長官の「かみ」が、神祇官では「伯」,省では「卿」,弾正台では「尹」,職（しき）では「大夫」,寮では「頭」,近衛府では「大将」,兵衛・衛門では「督」,国では「守」と書き分けられていた。（音読みをするときは、ハク、キョウなどと読み分けられていたが、訓読みではすべて「かみ」であった。）京都の「かも川」は高野川との合流点より上流を「賀茂川」,下流を「鴨川」と書き分けているが、地名にはこの類が少なくない。書き分けは同語か異語かの判定と関わっている場合が多い。最近の辞書は、見出し項目を立てるとき、なるべく概括的に大項目として掲出し、別項目に分けない傾向がある。したがって、動詞「とる」を例にとると、辞書Aは「取る・採る・執る・捕る」を、辞書Bは「取る・執る・採る」を、辞書Cは「取る」を、辞書Dは「取る・捕る・採る・執る」を見出し表記形にしている、その字種の数や掲出順に違いがあ

る。そして、Aは各意味項目ごとに4字のどれを使うかを指示し、「写真の場合は『撮る』と書く」と注し、Bは㊦㊧「捕る」、㊦㊨「『撰る』受け取める。撰取する。」、㊦㊩「『撮る』写真を写す」などと示し、Cは項目末に「採る」、「捕る」「獲る」、「執る」「撮る」の使い分けについて説明している。Dは、「取る」が包括的であるが、漢字を当てにくい場合のあることを指摘し、「食事を撰る」にも触れているが、「撮る」は別に立項している。ここに簡単に見たように、和語をどう表記するかについては、正確で詳しい漢字の知識が求められる。このため、和語はすべて平仮名で書く方が、わずらわしさもなく、すっきりしていてよいという考え方が出てくるわけである。この考えを実行に移そうとすると、分ち書きへの傾斜が強まることになるであろう。別に触れたが、「ヒト」と「人」とは語形は同一であっても、表記の違いによって異なる指示対象をもつことになっている。本節冒頭の「人」と「ひと」は一般的な書き分けではないが、1つの試みとして肯定されるであろう。「物」と「者」、「言う」と「いう」、「限り」と「かぎり」などは一般的に慣用のある書き分けである。

なお、別語の場合であるが、「細い」と「細かい」、「苦い」と「苦しい」のような近似表記が例は少ないが注目される。漢語・和語を通じて、「温度」と「湿度」、「文学」と「文字」、「腐らん死体」、「たのしい語いのつどい」、「玉子」と「王子」、「大王」と「大玉」、「ねりあげる」と「ぬりあげる」などが近似表記の例である。（下線部は2とおりの読みが可能な場合である。）また、「二月」と「三日」、「立山」と「岳」などは縦書きにおける近似表記で、「女子」と「好」、「日月」と「明」などは横書きにおける近似表記である。

漢語の場合には、「太平」と「泰平」、「書翰」と「書簡」、「異境」と「異郷」、「異状」と「異常」、「一応」と「一往」、「意志」と「意思」、「共同」と「協同」、「依託」と「委託」、「群生」と「群棲」、「曼陀羅」と「曼荼羅」など、語義にほとんど差の見られない異表記の組がある。書き手の学識、好みによって、一方が選択されている場合が多い。なお、「常用漢字表」(かつて

は「当用漢字表」の制定に伴い、表外字の書きかえが行われ、そのために生じた次のような新旧の2表記があるので挙げておこう。「日蝕」→「日食」,「編輯」→「編集」,「折衷」→「折中」,「技倆」→「技量」,「交叉」→「交差」,「鄭重」→「丁重」,「函数」→「関数」,「輔導」→「補導」など。また、表外字と選ばれた書きかえ漢字とが音を異にする場合には、当然<語形>も変わる結果となり、文字政策が契機になって、類義語の新旧の組が生み出された。「瀆職(とくしょく)」→「汚職(おしょく)」,「嗅覚」→「臭覚」,「闊葉樹」→「広葉樹」,「喬木」→「高木」,「楕円」→「長円」などの例がある。

9—6 表記と語形

文字は音素・音節・語などを視覚化するものであるから、表語に関して理想を言えば、1表記形は必ず1語を表し、1語は必ず1表記形によって示されるという、1対1の対応が保たれているのがよい。しかし、このような理想とはかなり距離があるというのが日本語の現実である。

(1) 同表記語(同一表記の互いによみ方を異にする語のグループ)

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」(川端康成『雪国』)

この冒頭の「国境」はどう読むべきであろうか。「こっきょう」か「くにざかい」か。「こっきょう」というときは、<1国の領土主権の及ぶ範囲の限界で、隣接国の領土および公海との境界>を指す場合が多く、「くにざかい」というときは、<江戸時代まで行われていた日本国内の行政区画の1つである国と国との境界>を指す場合が多い。(原作初版以降この部分にはルビがなく、作者はすでに他界しているので、直接読みを確認する方法はない。)結論を言えば、「くにざかい」がよいであろう。「くにざかい」を採る理由は次のとおりである。すなわち、昭和10年発表の作品であるから、作家が普通に上越両国の境界にふさわしい語を選べば、「くにざかい」を採ると推定されること、また、この作家が生前の書き物・講演の中で何回か、自分は固い漢語は嫌いだと述べていることの2点である。

上の結論の当否はともかくとして、「国境」のような、複数の読みが一往可能な例に出会うことが少なくない。その複数の読みの中からどれか1つを選ぶ基準は文脈・共起語（〈統合的關係〉に立つ語）にあることが多い。

心中（しんちゅう・しんじゅう）、金（かね・きん・こがね）、地味（じみ・ちみ）、日中（にっちゅう・ひなか）、大家（おおや・たいか・たいけ）、末期（まつご・まっき）、夫婦（ふうふ・みょうと）、明日（あす・みょうにち・あした）、大人（おとな・たいじん・だいにん）、人気（にんき・ひとけ・じんき）、工夫（くふう・こうふ）、施行（しこう・せこう・せぎょう）、下手（しもて・したて・したで・へた・げしゅ）、粉（こな・こ・デシメートル）、一分（いちぶ・いっぶん・いちぶん）、一日（ついたち・いちにち・いちじつ・ひとひ・いっぴ）、仏語（ふつご・ぶつご）、離島（りとう・はなれじま）、米（こめ・よね・べい・メートル）、神戸（こうべ・かんべ・じんこ）、丈夫（じょうふ・じょうぶ・ますらお・たけお）、歩（ほ・ふ・ぶ）

(2) 類義異表記

青い・蒼い、赤い・紅い・赭い、泣く・鳴く・啼く、倒れる・仆れる・斃れる、台詞・科白、作る・造る、機械・器械

(3) 同義異表記

付属・附属、一所・一諸・一緒、添水・僧都、素朴・素撲、寿司・鮓・鮓、ちょっと・一寸・鳥渡、きっと・屹度・急度、草々・匆々、蒲団・布団、無粋・不粋、堀・濠、時鳥・杜鵑・子規・不如帰、造形・造型

日本人は漢字を使うようになって、「聞く」と「聴く」を分け、「計る」「測る」「図る」「諮る」「謀る」などを書き分けるようになった。このような漢字に触発された微細な語義への関心は、「檜」を材質の変化に応じて「鎗」に変え、「鎗」をも生み出すことになった。「鉄炮」から「鉄砲」へ、「腕」から「腕」や「腕」へというふうな文字の交替を促し、同じ「しお」を「あさしお」の「潮」と「ゆうしお」の「汐」に書き分け、「いちご」を

「くさいちご」の「莓」と「きいちご」の「莓」に書き分けさせることになった。このような鋭敏な文字意識の働きはもちろん少数の識字層のみの関わることからであって、一般の人々にはあまりなじまない事項であった。しかし、「吉(よし)」字は「きち」「きつ」の「吉」字とは違うと考える人は少なくない。ここにも、日本人の字義に関わる特殊な文字意識が見られる。

9-7 文字列

新聞に「道道で大事故」という見出しがあって、瞬時考えこむことがあった。「みちみち」ならば後続の語句とも続かないし、漢字「道」を使うならば「道々」のように<躍り字>を使うところだったからである。もちろんこの見出しは正しい表記で、「国道」「県道」の類で、北海道の道路を指している。しかし、北海道在住者でなければ、「道道」にお目にかかるような機会 はめったにあるまい。「道道」は珍しい文字の連鎖である。

ローマ字でスペースなしに、

①Niwaniwaniwauraniwaniwaniwaniwatorigairu.

と書くと、たいへん読みづらい。これを平仮名に転換して、

②にわにはにわうらにわにはにわにわとりがいる。

と書くと、'wa'が「わ」と「は」に書き分けられて、「は」が助詞であることが示されるようになる。さらに②を漢字平仮名まじりに転換して、

③庭には二羽裏庭には二羽鶏がいる。

と書くと、一挙に明示的になる。①や②にはスペースを入れて、

④' Niwa niwa niwa uraniwa niwa niwa niwatori ga iru.

②' にわには にわ うらにわには にわ にわとりが いる。

のようになければ、意味はとりにくいであろう。さらに、④'にはコンマを使うのがよいし、②'には読点を打って、

②" にわには にわ、うらにわには にわ、にわとりが いる。

とし、③にも読点を打って、

③' 庭には二羽、裏庭には二羽、鶏がいる。

とすると、表記上の問題は一往解消する。

拍の切れ目、語の切れ目、文節の切れ目が明確でないような一連の音列、あるいは類似音が繰り返し出現したり、日本語らしからぬ音がつづいたりするときは、とくに表記に配慮する必要がある。

「ひとこといった」や「きょうびのひには」などを「一言言った」とか「今日日の日には」と書くことに抵抗を感じる人も少なくない。漢字を知っていても、前後の表記的環境によって、「一言いった」か「ひとこと言った」のように仮名を交ぜることになるだろう。「当面面接は行いません」「一歩歩くと」「目下下見に行っています」などは、奇異に感じられやすい文字列なので、同一字の連続を避ける工夫（たとえば、読点をあいだに打つなど）をした方がよいだろう。同一字連続でなくても、漢字ばかり、仮名ばかりの連続は読みにくい。〈読みやすさ〉‘readability’の研究者は、現代の書き物では漢字と仮名の平均的比率がほぼ4：6であれば一番読みやすいと報告している。芭蕉の「奈良七重七堂伽藍八重桜」は漢字ばかりで書かれているが、俳句であること、名詞の列挙で区切りがはっきりとしていることにより、あまり難しいという感じを与えないが、「電信隊浄水池女子大学刑務所射撃場壱塚赤羽の鉄橋隅田川品川湾」には面くらう人が多いであろう。長い漢字列の中にただ1字「の」があるだけである。東京の年配の人には読みとれるだろうが、他府県の子どもたちにはわかりにくいものである。これは1929年11月、斎藤茂吉がプロペラ機に乗ったとき、眼下に見えたものを順に詠みこんだ歌である。

「奥田東・京大元総長」ではナカグロテン「・」がなければ「東京大」と受けとられてしまうにちがいない。「前原元大津市長」と書くと、「前・原元・大津市長」「前原元大・津市長」「前原・元・大津市長」の3つのうちのどれか特定できない。「販売係長谷川さん」も「販売係・長谷川さん」か「販売係長・谷川さん」か決められない。「木村真之助教授」も「真之助・教授」か「真之・助教授」か不明である。それぞれ、ナカグロテンを用いるか、スペースを入れるか、「前」や「元」を小書きにするかなどの工夫が求められ

るわけである。

一般には、文字が増えれば増えるほど多単位になるわけであるから、それだけ意味の限定度が高くなり、一義的になるはずであるが、日本語においては、次の例のように一義化されない語句に遭遇することがある。

「米」→こめ？メートル？米国？

「米」＋「軍」→米軍

「米」＋「軍」＋「事」→米軍事？

「日」＋「米」＋「軍」＋「事」→日米・軍事？

「日」＋「米」＋「軍」＋「事」＋「情」→日米軍・事情？

「日」＋「米」＋「軍」＋「事」＋「情」＋「報」→日米・軍事・情報

この文字列の前に「在」か「三」かがあったり、末尾に「す」か「ず」があったりすると、どういうふう読みが変わるだろうか。同様に、

「日」→ひ？日本？日曜日？

「日」＋「本」→にほん？にっぽん？やまと？ひのもと？

「日」＋「本」＋「人」→にほん人？にっぽん人？やまとびと？

××日・本人？

「日」＋「本」＋「人」＋「間」→にほんじん・かん？にほん・にんげん？

「一」＋「日」＋「本」＋「人」＋「間」→？？

「一」＋「日」＋「本」＋「人」＋「間」＋「貫」＋「一」→一日本人・間貫一

(この例は、Samuel E. Martin 氏の講演に示唆されて、作ったものである。)

とにかく、漢字が増えても読みが容易に確定せず、また、漢字が新しく追加されるたびに出発点にもどって読みの回路をたどりなおさなければならないわけで、まるで判じ物のような場合があるのである。「陽子の話」や「陽子の運命」などは、プロトンのことか、ある女性のことか判然としない。「陽子の崩壊」と書かれてはじめてプロトンのことに限定されるのである。

語の表記を文字列全体の中で考えることが、書く場合にも読む場合にも、肝要であることがわかるであろう。

〔問208〕 次の文字列は、それぞれいくとおりに読みとることができるか。

- (1) ムスメニゲタタノム
- (2) シンダイシャタノム
- (3) アサカラルスバンニコイ
- (4) はははははははとわらった

〔問209〕 新聞・雑誌・広告文などから、「胃い検診」「棋 ing」のような一過性の特殊な表記を行っている例を拾い集めよ。

〔問210〕 好字志向の表れと考えられる表記例を3つ以上挙げよ。

〔問211〕 次の片仮名列を漢字まじりに書きかえよ。

- (1) キシャノキシャキシヤデキシヤニキシヤ。
- (2) シカイシカイソウカインシカイシャ。
- (3) ウメイチリンイチリンホドノアタタカサ

〔問212〕 漢和辞典などを使って国字を探し、国字がどんな意味分野に分布しているか調べよ。

〔問213〕 ローマ字語には、ほかにどんなものがあるか、集めてみよ。

〔問214〕 次の各組の表記のうち、同語の異表記に相当するのはどれか。

枝折：朶 食糧：食料 所業：所行 妄動：盲動 切線：接線
料料：過料 対称：対照 享年：行年 上人：聖人 信服：心服
名残：余波 主席：首席 綿花：棉花 髭：髻 鬚：鬚 足：脚

〔問215〕 書き分けの例を、名詞・動詞・形容詞から各3例以上挙げよ。

〔問216〕 「それは事だ」と「行ったことがある」のように、実態語と機能語が書き分けられる例を3つ以上挙げよ。

〔問217〕 「和尚」という表記が宗派ごとにどういうふう読み分けられているか調べてみよ。

〔問218〕 次の文例の下線部の表記には、どんな意識が働いているか考えてみ

よ。

- (1) じつはナウイというか、イマイというか、そういう感じの先生です。
- (2) 花影婆娑（ばさ）と踏むべくありぬ唄（そば）の月（石鼎）
- (3) 塵事多忙だ。中々丸や三角を並べちゃるられない。（『虞美人草』十七）
- (4) 六人きょうだいの一番上であった姉は、僕が海軍に入ったときには、もう二児の母親となっていた。
- (5) 元来武右衛門は…頭の大きい割に脳力は発達して居らんが、…（『吾輩は猫である』）

[問219] 次の表記について、可能な読み方を挙げてみよ。

中間 北国 上手 小人 山中 境界 顔色 青嵐 一時 一寸 文身
分別 平家 船底 仲人 二子 口腔 法主 小刀 群集(衆)

[問220] 次の語の書きかえ表記を挙げよ。

智慧 艦装 技倆 抽籤 饑饉 義捐金

[問221] 次の各表記は、読み方により意味がどのように変わるか答えよ。

工場 市場 一日 月日 人間 仏語 五分 草木 行 利益 蛇 竜

[問222] 次の文の下線部はどう読むべきか、理由を付して答えよ。

- (1) むっとする程堪らない路だったが、構内へ這入ると流石に樹の多い丈に気分が晴々した。（漱石『三四郎』）
- (2) すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音がうるさい程枕に通って来た。（芥川竜之介『鼻』）

10 語彙資料—辞書と語彙表—

言語の研究と教育において重要な意義をもつ各種の語彙資料をとりあげる必要がある。小は初級教科書の巻末などに添えられている小さな語彙表、袖珍辞書から、大は20巻にも及ぶ大型辞書まで、現代の日本で入手出来る語彙資料の点数はかなり多くなった。本章では、これらの資料を類別して、その特徴について考察し、日本語の研究と教育という観点からの概評を試みよう。

10-1 辞書

「辞書」(‘dictionary’ ‘Wörterbuch’ ‘dictionnaire’ ‘詞典’)は、<語を一定の観点から整理、配列して表記法・発音・意味・用法などを記述した本>(『国語学辞典』)である。先ず「一定の観点から」という部分に注意すべきである。この観点によって、辞書製作者の側からは、①目的に応じた語の実態についての全面的な調査分析、②利用者として想定される階層の2点がとくに重要な契機となってくる。①と②とは、もちろん内容的につながりのあるものであるが、一往別個に考えるべき事項である。②の契機はとりわけ教育の場では重視されるべきものである。国語教育用か日本語教育用か、小学校低学年児童用か一般成人用か、フランス人学生用か中国人技術者用か等々、どんな利用者を考えるかによって、語彙の選定、見出し語の表記形式、語義記述の質量など、要するに辞書の全貌が変わってしまうのである。国語教育用としてなら発達段階に即した辞書が、日本語教育用としてなら学力レベルと母語(または媒介語)に応じた辞書が先ず求められるであろう。上巻において説いたように、人間は外界とその反映としての観念の世界とを単語を使うことによって区切り、整理しているが、個々の単語の意味範疇や位相は言語ごとに異なっていて、A言語のある語が、B言語においては2個以上の語に対応したり、語としては存在しなかったりすることも稀ではない。

日本語と外国語との対訳辞書（‘bilingual dictionary’）は、そういう意味で原理的にむずかしい処理を課題としてもっているわけである。

(1) 辞書の現実

先ず次のような作文を紹介しよう。これらは、外国人学生が辞書をたよりにしたためにおかした誤りの例である。

ア きのう堺力駅へ行きました。

イ 試験の返事をここに書きます。

ウ 雨が落ちます。

エ ゆうべ寮で、すすめの涙ほど晩会の相談をしました。

オ ふろの湯がぬるかったので、気分がよかったです。

アは、‘power’→chikara, ‘station’→eki というように英和辞典 (Romanized) でたどって、造った語で、正しくは「堺発電所」と書くべき箇所である。イは ‘answer’→henji, ウは ‘fall’→ochiru と、やはり英和辞典によって書き誤ったものである。安価で携帯に便利な超小型辞典の多くは、上例のように1見出し語に1訳語しか挙げていない場合が多いため、また ‘power station’ のような複合語をほとんど挙げていないため、留学生が誤りを避けることは極端にむずかしい。また、‘fall’ を辞書で引いたときに、(in general) ochiru; (flowers & blossoms) chiru; (hairs) nukeru, nuke-ochiru; (rain, snow) furu……のように、共起語や文脈が示されていればよいが、ただ「ochiru, chiru, nukeru, furu」のような訳語の列挙だけであると、結局訳語群の中のどれを選ぶべきかが利用者にはわからないから、やはり誤りをおかさせてしまうことになる。エは国語辞典を利用したためにおかした誤りである。「雀」の子見出しの中に「雀の涙」が挙げられていることが多いが、A辞書は「非常にわずかなことにたとえていう」と説明し、B辞書は「ほんのわずかなものたとえ」と説明し、C辞書は「ほんのわずかの量」とし、Dは独立項目として「ごくわずかなものたとえ」と記し、大型のE辞書もDと全く同じ説明をしている。こういう状態であるから、外国人学生が、辞書を参照して、「時間について少し」すなわち「短時間」の意でこの

連語を使っても不思議はないのである。正しくは、「金銭について少量」すなわち「少額」の意でしか用いられない連語である。上に紹介した5点の辞書のうち、Cだけが句例を挙げていて、「すずめの涙ほどの補助金」と記しているのが救いである。オは和英辞典などに、nurui→(water)not so hot, not so cold とあるのを読み、そこから自然に「理想的、快適な温度」と考えたための誤りである。外国人が日本人ほど熱い湯を好まないために「ぬるくて快適」と書いたのではないのである。

上にも少し触れたが、日本の辞書には、まだまだ句例や文例を挙げるものが少なく、語義記述の不十分さを句例などによって補うという面でも遺憾なことが多い。

辞書ではないが、Arthur Rose-Innes の “Fundamental Spoken Japanese” の第3部となっている Explanatory Vocabulary は、見出し語数こそわずかである (2,200語) が、語義ごとに例文を挙げ、用法上の説明などを施して、たいへん有益である。例えば「上げる」を引くと、

age·ru, v.t. [cogn. w. agaru v.i.] 1) To raise; lift up. 例文 2) Used humbly of the giving of the 1st person; used also of the giving of the 2nd and 3rd persons, but not if the gift is to me or mine. 例文 3) Used humbly after a gerund when an action is performed in favour of another. 例文 4) To finish; complete. 例文 5) Various. nedan wo age·ru; 訳語 koe wo age·ru; 訳語 Kami wo age·ru; 訳語 nedoko wo age·ru; 訳語

のように記し、このあと複合語6語とその訳語を載せている。例文や訳語は省略したが、たいへん行き届いていることが察せられるであろう。ついでに、接尾辞「ちゃん」についても紹介しておこう。

chan, [corruption of san]. Mr; Mrs; etc.; (Used especially by and of, little children, particularly girls). 複合語 botchan, q.v.

と記している。一般の国語辞典や和英辞典に記載されていない点まで細かく書きあげていて、外国人学習者には歓迎されるであろう。また、日本語教育

にたずさわる日本人・外国人にも役立つところが多い。多くの語・語義に例文を挙げて、それらに敬意・丁寧の度合いを付している（A, B, C, Dの4レベル）。この Explanatory Vocabulary にも、まだいろいろ不十分な点（「人」と「人間」の違いなどに触れていないなど）がないわけではないが、初学者用の多くの入門書の中では、たしかに推奨に価するものである。

国語辞書・対訳辞書（日→外, 外→日）などのすべてについて検討することはとうていできないので、ここでは小型の外国人初学者辞書について概観してみる。初学者用の辞書は結論から言えば、たいへんお寒い状態である。上述したように、さまざまな不十分さ、時には乱雑さが見られるのである。これは、収録語数がきわめて少なく、1,800から4,000ぐらいまでという容量上の制約に由来しているが、理由はそれだけではなさそうである。日本語語彙の研究が緒につきかけたところで、語彙の選定自体がこれからのことであること、語義分析がやっと軌道にのり出したというのが現状であること、従来は専門研究者が対訳辞書にあまり手を染めなかったこと、そしてとくに複数言語の語彙を対照して、語義・用法などの語彙的諸事項を的確に記述することが難事の中の難事であることなどが、理由として挙げられる。このような小型辞書の弱点は大型辞書にも連続している。上記の小型辞書の不十分さの事由が、そのまま大型辞書にもあてはまるからである。基本語・基礎語の意味・用法の記述が不十分であるという情況は、辞書のサイズには関係のないことであるからだ。大型辞書の場合は、むしろ用法などの説明をほとんど要しない、使用度数が小さく、使用範囲も狭い名詞類が相対的に増えるのであるから、それらの語（例えば「にせがね」「毒物」「菌」など）の説明に苦労することはない。依然として残るのは「ため」「うれしい」「心苦しい」「かける」などの、どんな小さい辞書でも採録しなければならない項目の説明である。大型辞書の場合、句例や文例をなるべく多く挙げることによって、厄介な意味の記述や用法の説明——ネイティブにとってはしばしば意識化されておらず、分析も容易でない——の不十分さを補完することができる。ところが、国語辞書の多くは、その必要欠くべからざる例を載せていないので、

「雀の涙」を例にとって見たように、好ましくない利用結果になることが少なくない。利用者が日本人である場合には、その弱点もある程度無視できるかもしれないが、外国人には自身で例を考えて補うことができないから、利用すると悪い副作用が出てくることになるのである。

日本には、英語を筆頭として、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、中国語、朝鮮語などと日本語との対訳辞書がある。しかし、これらの日→外・外→日辞書はごく少数のものを除いて、日本人学習者のために編集されたものである。当然のことながら、日本人には自明のこと、あまり説明を要しそうでないことは記述・説明されていない。このような対訳辞書が外国人に使えないわけではないが、使いにくくわかりにくいものであることは、誰にも想像できるであろう。専門家の努力・協力によって、かゆいところに手の届くような良い辞書が作製されるべきであろう。すでに、『基礎日本語』『ことばの意味』などのすぐれた基礎資料が出来ており、『例解新国語辞典』のような、簡にして要を得た小型辞書も登場している。国立国語研究所で編集作業を進めている『母語別学習辞典』や国際交流基金で作製中である『基礎日本語学習辞典』が遠からず日の目を見る。日本語学習者の渇がいやされる日も遠くあるまい。

(2) 望ましい辞書の要件

以下に、あるべき日本語外国語辞書のそなえもつ条件を挙げてみる。

- ① 見出し語数 最低7,000語ぐらい、できれば10,000語を収録するものとする。場合によっては、見出し項目からいくらかを外し、子見出しに回してもよい。上巻の「5—7 語数とカバー率」において紹介したように、日本語は具体的個物表現に傾く言語のようで、3,000語ぐらいでは、基本的な表現・理解行為に十分かなうとは言えない。理論的にも実践的にも7,000語ぐらいが必要であると考えられる。まして、学習辞書としての資格を考えるならば、初学者用であっても、7,000乃至10,000語が必要であると言えるだろう。
- ② 見出し語の配列 見出し語をローマ字によって表記するときはアルファベット順の方がよい。中国などの漢字圏学習者のためには、平仮名見出しで

五十音順配列がよい。

③ 見出し語の表記 欧米の学習者用としては、ローマ字書きがよい。そして、活用語の場合は語幹・語尾の区切りを符号を用いて示し、合成語の場合は語基と語基、語基と接辞などの接続部分をハイフンなどを用いて示すのがよい。また、日本での標準表記を必ず直後に掲出して、和字表記との対応が理解できるようにすること。

④ 品詞・造語上の資格（例えば「接尾辞」とか「語基」とか）を必ず表示すること。

⑤ 活用の表示 活用のタイプが5つもある動詞については、連用形と助詞「テ」のついた形（いわゆる‘te-Form’）とを必ず掲出するのがよく、なおできれば、「ナイ」「(ヨ)ウ」の付いた形も掲出するのが望ましい。

⑥ 句例・文例など 単語ごとに、また語義別に、なるべく例を挙げることに。とくに基本語彙で、用法上問題の多い動詞・形容詞・形容動詞、代名詞、接続詞、副詞のほか、重要な名詞（タメ ワケ セノ ハズ トキ トコロ ホウなどの形式名詞はすべて含む）の類には必ず句例か文例を付けなければならない。

⑦ 類義・反義、複合・派生などの情報を極力載せること。また、「天」の項に「地」「人」を、「春」の項に他の3季を指す語を挙げて、セットになる語が同時に学べるようにすること。

⑧ 注記 意味特徴・語の位相・用法上の制約（例えば、「いける」は否定形でしか用いられないとか、「まふゆ」「まなつ」はあるが「まはる」や「まあき」はないなど）等については、なるべく詳しい注記を付けた方がよい。

⑨ 図版・地図・写真・表など 「鳥居」「祭り」「河童」「扇子」「鏡餅」等々の日本特有事物については、極力文字以外の視覚的メディアを援用して、正確で感覚的な理解も果たせるよう最大限の工夫をすること。

以上のような条件がそなわってはじめて良い辞書と呼ばれることになるだろう。もちろん、語義の正確な分析記述は不可欠の事項である。上の9項の中では、⑥の句例・文例を最重要のものと考えべきである。例のない辞書

は、魂のない人間のようなと言われるのだ。

(3) 主な辞書

以下に主な辞書類を特徴別に紹介しよう。

A 国語辞書

- ①アクセント：『新明解国語辞典』『明解日本語アクセント辞典』『NHK日本語アクセント辞典』
- ②文法：『岩波国語辞典』『日本文法事典』『国文法小辞典』『基礎日本語1～3』
- ③語源・文字・語種・出典：『新潮国語辞典』『小学館国語大辞典』
- ④句例・文例：『例解国語辞典』『用例学習国語辞典』『学研国語大辞典』『例解新国語辞典』
- ⑤表記：『角川国語辞典』『三省堂国語辞典』『国語表記実務提要』『表記用例辞典』
- ⑥語義：『三省堂国語辞典』『新明解国語辞典』『類義語辞典』『基礎日本語1～3』『ことばの意味1～3』『学研国語大辞典』
- ⑦語構成：『学研国語大辞典』『日本語尾音索引—現代語篇—』『大言海分類語彙』
- ⑧漢語：『三省堂新国語中辞典』『広辞林第5版』『大漢和辞典』『広漢和辞典』
- ⑨日本における漢字・漢語：『大字典』『音訓両引き国漢辞典』『新潮国語辞典』『類義字訓辞典』
- ⑩図解・絵入り：『日英独仏図解辞典』『かどかわ こどもことばえじてん』『三省堂 幼児のこくご絵じてん』
- ⑪ローマ字引き：『ローマ字で引く国語辞典』（福原・山岸編）、『日本語辞典』（宮崎編）
- ⑫総合：『日本国語大辞典』『広辞苑』『学研国語大辞典』『広漢和辞典』『大字典』『新潮国語辞典』『例解新国語辞典』『日本語教育事典』

B 対訳辞書（用例その他で利用価値の高いものだけに限る）

『研究社新和英大辞典』『斎藤・和英大辞典』『木村・和独大辞典』『セ
スラン和仏辞典』『日華大辞典』『日漢辞典』『岩波日中辞典』『日韓
辞典』『日朝辞典』『和露大辞典』

なお辞書とは呼びにくいですが、『カラー図説 日本大歳時記』（講談社）は日
本の天文・動植物・人事などにわたって、たくさんの絵や写真を使いながら
説明を施した良書で、日本特有事物を視覚的にとらえるのに好適である。ま
た、『大図典 View』（講談社）もカラー写真中心の新形式百科事典で、言
語の教育・学習に資するところが多いものである。

10-2 語彙表など

辞書とは別に、語の検索に用いられる語彙表のようなものがある。「シソ
ーラス」‘thesaurus’ と呼ばれるのがその代表と言える。シソーラスには広狭
2義があるが、狭義には類語・関連語辞典を指す。英語については、Peter
Mark Roget の “Roget’s Thesaurus” (“Thesaurus of English Words and
Phrases” 1852年刊) が有名である。英語の単語を ‘Abstract Relations’
‘Space’ ‘Matter’ ‘Intellect’ ‘Volition’ ‘Affections’ の6つのカテゴリーに
分類したものである。別掲のコピーに見られるように、各語は分類番号を付
された類概念の下に分類されていて、同一範疇の語、同一レベルの語は同一
番号の下にグルーピングされている。品詞の別、語か句かの別は立てられて
いるが、番号は同じである。例えば ‘dog’ や ‘hound’ は366の Animal の
中に並んでいて、前後に ‘horse’ や ‘cat’ が掲載され、Adj. の項には ‘ca-
nine’ や ‘fishy’ が記載されているという具合である。「動物」は、第Ⅲ類事
物の中の「有機物」の VITALITY の ‘special’ に属している。個々の語
は、このように概念 ‘concept’ によって立てられた1,000の項目(1. Existence
から 1,000. Temple まで) に分類されていて、語形による分類法とは違っ
た、語義による分類を受けている。そのため個々の語の所在を知るために、
別に設けられた詳しい索引を引かねばならない。シソーラスには意義説明と
か発音上・用法上の注記とかが通例付いていない。ここにシソーラスの特色

(参考 ROGET'S THESAURUS OF ENGLISH WORDS AND PHRASES の分類法)

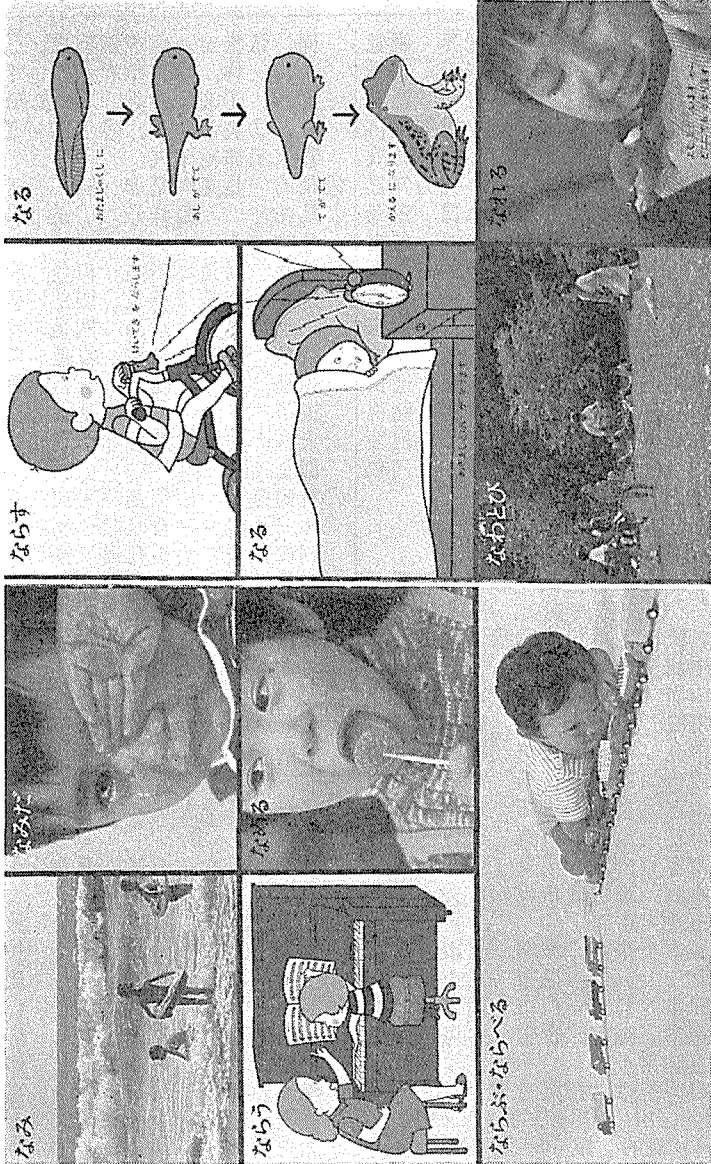
PLAN OF CLASSIFICATION.

Class.	Section.	Nos.
I. ABSTRACT RELATIONS	I. EXISTENCE	1 to 8
	II. RELATION	9—24
	III. QUANTITY	25—57
	IV. ORDER	58—83
	V. NUMBER	84—105
	VI. TIME	106—139
	VII. CHANGE	140—152
	VIII. CAUSATION	153—179
II. SPACE.....	I. GENERALLY	180—191
	II. DIMENSIONS	192—239
	III. FORM	240—263
	IV. MOTION	264—315
III. MATTER.....	I. GENERALLY	316—320
	II. INORGANIC	321—356
	III. ORGANIC	357—449
IV. INTELLECT.....	Division.	
	(I.) FORMATION OF IDEAS	450—515
V. VOLITION.....	(II.) COMMUNICATION OF IDEAS	516—599
	(I.) INDIVIDUAL	600—736
VI. AFFECTIONS.....	(II.) INTERSOCIAL	737—819
	Section.	
	I. GENERALLY	820—826
	II. PERSONAL	827—887
	III. SYMPATHETIC	888—921
IV. MORAL	922—975	
	V. RELIGIOUS	976—1000

がある。類語（同範疇語・同レベル語など）、関連語、類義語・反義語などを探して表現のために役立てるのが、シソーラスの基本的な使い方であるが、方言や他言語の語彙分布と対比したり、基本語彙選定の際の基礎資料として、研究・教育・辞典編集作業・翻訳作業・情報処理活動など活用範囲が広い。

この“Roget's Thesaurus”はのちに増補されたり縮約されたりして、い

ろいろな版を生み出した。ドイツ語については、同じ分類法による Wehrle-Eggers: “Deutscher Wortschatz” が作られている。Charles Bally が “Traité de la stylistique française” において提示した10類297項に分けられた “Tableau synoptique des termes d’identification et de leurs principaux synonymes” は具象物名は含んでいないがよく工夫されたものである。日本語については、林大氏がまとめられた『分類語彙表』（国立国語研究所資料集 6 1964年刊）がある。この『分類語彙表』は、雑誌90種に用いられた高使用率の約7,000語を中心にし、他の語彙資料をも参照して得られた計約32,600語を、名詞類・動詞類・形容詞類・その他の4類に分ち、分類コードを立てて分類したものである。コードの系統性その他に新しい工夫があり、日本語の最初の科学的な語彙表として、研究・教育の面で利用されることが多い。1981年には『角川類語新辞典』が刊行された。これは現代の単語・連語・ことわざなど約6万項目を、十進分類の方式によった「語彙分類体系表」に基づいて、大中小の3分類で分類したものである。シソーラスや語彙表と異なり、意味・句例・反義語などを挙げていて、辞書の性格を加味しているのが特色である。中国でも、このようなシソーラスや語彙表にならって、1983年に『同义词词林』（上海辞书出版社）が作られた。もともと中国には「類書」と呼ばれる百科事典的な内容をもつ書物が存在したが、約7万語を盛り込んだ意義分類語彙表が新しく登場したわけである。12大類、94中類、1,428小類で、3,925項の語群に分けられている。分野別、事物別に図を用いて語を分類したものに、ドイツの Duden の図解辞典があり、むかしから一部の人に愛用されてきた。これは「図解」という条件から、具象名詞に限られるという制約があるが、科学技術の分野や幼児教育の場では利用価値が高いだろう。



(『三省堂 幼児のこくご絵じてん』から)

①视差 视察 视角 视界 视觉
 视力 视频 视事 视听 视图
 视线 视学 视野 视阙
 视而不见 视如敝屣 视如寇仇
 视若无睹 视死如归 视同儿戏
 视同路人 视为畏途 视为知己

②傲视 逼视 鄙视 仇视 敌视
 谛视 电视 短视 俯视 忽视
 环视 幻视 监视 检视 近视
 眇视 藐视 蔑视 漠视 凝视
 怒视 平视 歧视 轻视 扫视
 审视 探视 透视 玩视 无视
 小视 斜视 省视 巡视 远视
 珍视 诊视 正视 重视 注视
 自视 坐视 电视机 剖视图
 虎视眈眈 熟视无睹 一视同仁
 坐视不救

③等闲视之 混淆视听
 ④侧目而视 一蹙不视

市 shì ①做买卖的固定场所。
 ②交易，买卖。③城市。④
 行政区域单位。⑤我国度量衡制
 中属于市制的。

①市布 市廛 市场 市尺 市寸
 市石 市担 市电 市斗 市房
 市分 市合 市毫 市惠 市集
 市价 市郊 市斤 市俚 市估
 市厘 市里 市两 市面 市民
 市亩 市内 市钱 市顷 市区
 市容 市上 市升 市丝 市肆
 市委 市引 市长 市丈 市镇

②罢市 菜市场 城市 灯市 都市
 发市 行市 黑市 集市 街市
 开市 门市 闹市 上市
 小市 晓市 夜市 海市 蜃楼

③直辖市
 ④门庭若市 招摇过市

是 shì ①合理的，正确的
 对的，跟‘非’相对。②赞

同，认为对。③表示答应。④这
 个，这样。⑤表示存在。⑥表示
 判断。⑦表示分类。⑧表示适
 合。⑨表示让步。⑩表示一切。
 ⑪表示加重语气。

①是的是凡 是非 是否 是个儿
 是味儿 是样儿 是非曲直
 是古非今

②便是 别是 不是 但是 倒是
 定是 凡是 反是 敢是 固是
 还是 横是 或是 既是 净是
 就是 可是 乃是 若是 算是
 先是 要是 硬是 于是 真是
 正是 只是 自是 总是
 大是大非 口是心非 惹是生非
 似是而非

③有的是 颠倒是非 回头是岸
 浑身是胆 马首是瞻 明辨是非
 判明是非 头头是道 惟利是图
 惟命是听 一身是胆
 ④比比皆是 不宁唯是 触目皆是
 俯拾即是 各行其是 莫衷一是
 习非成是 自以为是

士 shì ①古代指未婚的男子。
 ②古代介于大夫和庶民之问
 的阶层。③旧指读书人。④军
 人。⑤军衔名，在尉级之下。⑥
 指某些技术人员。⑦对人的美
 称。

①士兵 士女 士气 士人 士绅
 士卒
 ②便士 辩士 兵士 博士 策士
 处士 道士 方士 寒士 护士
 技士 将士 教士 进士 居士
 爵士 军士 烈士 名士 谋士
 女士 骑士 人士 士上 绅士
 硕士 武士 下士 信士 修士
 学士 医士 义士 隐士 勇士
 院士 战士 中士 壮士 爵士
 志士 仁人

(『常用构词字典』から)

流浪汉 游民 流民 浪人 寇三

Ag 09 败兵 俘虏

败兵 溃兵 乱兵 残兵 残卒 散兵
散兵游勇 残兵败将
败将 败军之将

俘虏 俘(遣~) 伤俘 战俘 活口
舌头 生口 囚 虏囚
人质 质子 质 肉票(薙~)

Ag 10 旅客

旅客 客人 旅人 客子 客行
子 游子 行人 行者 行旅(~称便)
行客 行子 征人 征夫 征客 羁
客 羁旅 客(为~他乡)
过路人 过客
游人(~如织) 游客 游者 旅游
者 观光者

Ah 亲人 眷属

Ah 01 亲戚 眷属

亲戚 亲属(直系~; 旁系~) 本家
亲丁 亲眷 六亲(~不认) 戚(~谊)
亲甲 guān 戚甲 亲系 亲表 亲从
亲类(何以解愁怀, 置酒招~ <晋·张载诗>)
亲党 亲族 姻旧 姻故 氏(舅~)

贵戚 右戚
令亲 尊亲 贵亲
舍亲 鄙亲
外戚 外亲 外舍 外氏 外家
血亲 宗亲
至亲(~好友) 懿 yì 亲 懿戚
世亲 世戚
姻亲 姻亚(娅) 亲 qīng 家 儿女
亲家 远亲 葭苕 jiā tiáo 葭苕之亲
** 近亲 内亲 干亲 表亲 姨表亲
姑表亲 老亲(~旧邻)

眷属 亲属 家属 家眷 家小 老
小 妻小 妻孥 nú 骨肉(亲生~) 家
人家室 亲人 家口 妻儿老小
女眷 宅眷 内眷
** 烈属 军属 抗属 遗属

Ah 02 曾祖 祖父 祖母

曾祖 曾祖父 曾大父 老爷爷 太公
公 太爷 太翁 曾翁 曾父 大王

父

曾祖母 老奶奶 太婆

祖父 太爷 爷爷 爷 爹爹 老
公公 阿公 阿爷 阿爹 阿翁 王
父 大父 太公 太翁 家公 家祖 祖
先祖 先君子

祖母 奶奶 婆婆 姨妯 tī jiē 王
母 大母 太母 太婆 祖婆

Ah 03 伯祖 叔祖 外祖父 外祖母

伯祖 伯公 伯翁
伯祖母 伯婆

叔祖 叔公 叔翁
叔祖母 叔婆

外祖父 外公 公公 老爷 大
父 外翁 外祖 外爷 外大父 外爹爹

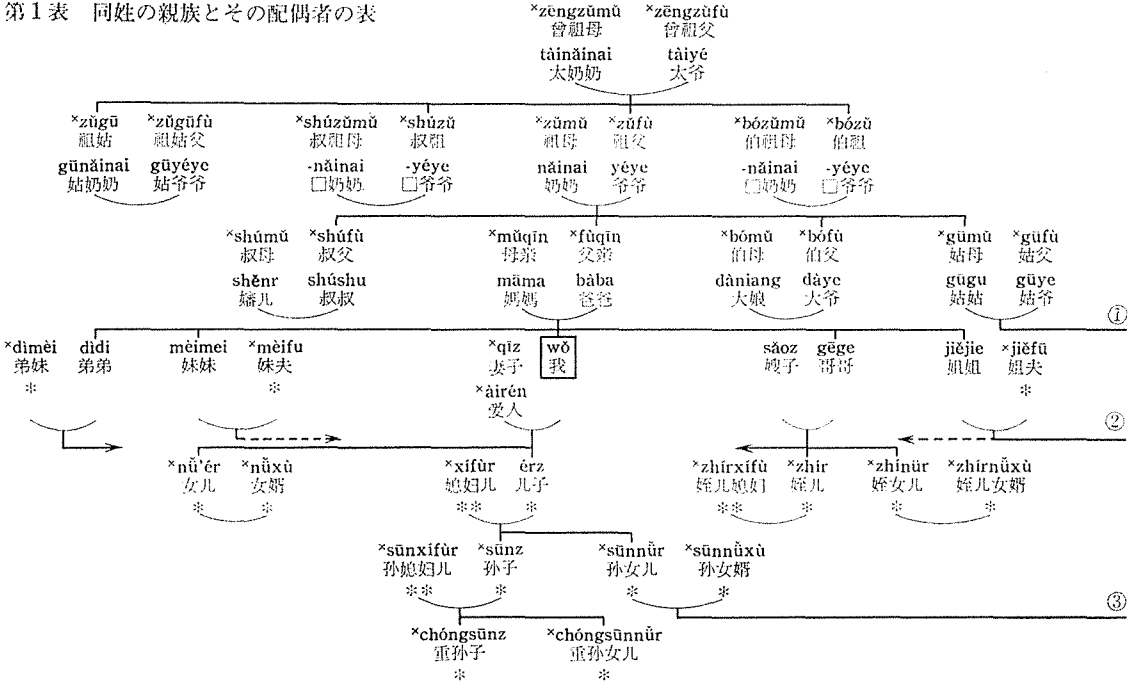
外祖母 外婆 好婆 姥 lǎo 姥 老
老 老娘 家母 家婆

Ah 04 父 母 父母 父子

父 父亲 爷 爹 大 翁 爸
爸 老子 爹爹 老爹 阿爹 阿
椿 椿庭 太公 所天 严父 严亲 严

(『同义词词林』から)

第1表 同姓の親族とその配偶者の表



〔岩波 中国語辞典〕から)

-into a corner, - to the wall; run hard, put one's nose out of joint.

settle, do for; break the -neck of, - back of; capsiz, sink, shipwreck, drown, swamp; subdue; subjugate &c. (*subject*) 749; reduce; make the enemy bite the dust; victimize, roll in the dust, trample under foot, put an extinguisher upon.

answer, - the purpose; avail, prevail, take effect, do, turn out well, work well, take, tell, bear fruit; hit -it, - the mark, - the right nail on the head; nick it; turn up trumps, make a hit; find one's account in.

Adj. succeeding &c. *v.*; successful; prosperous &c. 734; triumphant; flushed -, crowned- with success; victorious; set up; in the ascendant; unbeaten &c. (*see* beat &c. *v.*); well-spent; felicitous, effective, in full swing.

Adv. successfully &c. *adj.*; with flying colours, in triumph, swimmingly; à merveille, beyond all hope; to some -, good- purpose; to one's heart's content.

Phr. *veni vidi vici*, the day being one's own, one's star in the ascendant; *omne tulit punctum*.

frustrated, thwarted, crossed, unhinged, disconcerted, dashed; thrown -off one's balance, - on one's back, - on one's beam ends; unhorsed, in a sorry plight; hard hit.

stultified, befooled, dished, hoist on one's own petard; victimized, sacrificed.

wide of the mark &c. (*error*) 495; out of one's reckoning &c. (*inexpectation*) 508; left in the lurch; thrown away &c. (*wasted*) 638; unattained; uncompleted &c. 730.

Adv. unsuccessfully &c. *adj.*; to little or no purpose, in vain, *re infectâ*.

Phr. the bubble has burst, the game is up, all is lost; the devil to pay; *parturiunt montes* &c. (*disappointment*) 509.

733. Trophy.—N. trophy; medal, prize, palm; ribbon, blue ribbon, *ordon bleu*; citation; cup; laurel, -s; bays, crown, chaplet, wreath, civic crown; Victoria Cross, V.C., *Croix de Guerre*, Iron Cross; Distinguished Service Cross, Medal of Honor, Congressional Medal; insignia &c. 550; feather in one's cap &c. (*honour*) 873; decoration &c. 877; garland, triumphal arch.

triumph &c. (*celebration*) 883; flying colours &c. (*show*) 882.
monumentum ere perevinius.

734. Prosperity.—N. prosperity, welfare, well-being; affluence &c. (*wealth*) 803; success &c. 731; thrift, roaring

come off -, turn out -, work- ill; take -a wrong, - an ugly- turn; gang agley.

be all -over with, - up with; explode; dash one's hopes &c. (*disappoint*) 509; defeat the purpose; upset the apple cart; sow the wind and reap the whirlwind, jump out of the frying pan into the fire.

Adj. unsuccessful, successless; failing, tripping &c. *v.*; at fault; unfortunate &c. 735.

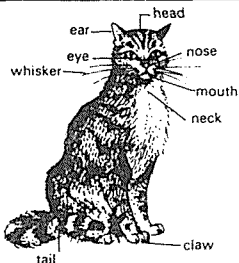
abortive, addle, still-born; fruitless, sterile, bootless; ineffect-ual, -ive; inefficient &c. (*impotent*) 158; inefficacious; lame, hobbling, *découeu*; insufficient &c. 640; unavailing &c. (*useless*) 645; of no effect.

aground, grounded, swamped, stranded, cast away, wrecked, foundered, capsized, shipwrecked, non-suited; foiled; defeated &c. 731; struck -, borne -, broken- down; down-trodden; over-borne, -whelmed; all up with; beaten to a frazzle.

lost, undone, ruined, broken; bankrupt &c. (*not paying*) 808; played out; done-up, - for; dead beat, ruined root and branch, *flambé*, knocked on the head; destroyed &c. 162.

735. Adversity.—N. adversity, evil &c. 619; failure &c. 732; bad -, ill -, evil -, adverse -, hard- -fortune, - hap,

A53 nouns : the cat and similar animals [C]



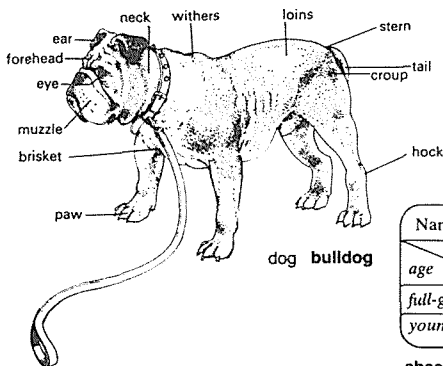
cat

cat 1 a small domestic [⇒ A36] animal with fur: *Many families keep a cat, usually to kill mice, but often as a pet for the children.* **2** any animal of a group which includes the domestic cat and

Names for the cat according to age and sex		
age \ sex	male	female
full-grown	tomcat infmt tom	tabby
young	kitten	

the lion **3** (fig) *deprec* a woman who says unkind things about other women
puss also **kitty** (the name used for talking to or calling cats): *Here, puss, puss! Come on, puss, drink your milk! Here, kitty-kitty—where are you?*
pussy infml a cat: *That's a nice pussy (cat). What beautiful pussies!*
cub the young of the larger cats

A54 nouns : the dog and similar animals [C]



dog bulldog

dog a domestic [⇒ A36] animal with a coat of hair, which is bred in many varieties: *Many families keep dogs, usually as a pet but also to guard their property.*
hound 1 [often in comb] a hunting dog: *fox-hounds; deerhounds* **2 deprec** a dog: *Get that offensive hound out of this house!* **follow the hounds/ride to hounds** to go fox-hunting

Names for the dog according to age and sex		
age \ sex	male and general	female
full-grown	dog	bitch
young	puppy, pup	

sheepdog a dog trained to drive sheep and keep them together
mongrel a dog of mixed breed [⇒ A35]
cur 1 a dog of no particular breed, esp a bad-tempered one **2 deprec** a man of whom the speaker does not have a good opinion: *What a cur that man is!*
bitch 1 a female dog **2 deprec** a woman: *Tell that bitch to leave me alone!*

(“Longman Lexicon of Contemporary English” から)

draw up—; entrust with—; explore through—s; file—; inscribe in—; preserve—; produce—; refer to—; release—; scan—; seal—; search—; sign—; survey—; term—; value—; witness—; —asserts; —authorizes; —enlightens; —entitles; —informs; —points out; —proves; —records; —serves; —verifies.

(See paper, evidence, proof, record.)

DOCUMENTARY

adverbs

inescapably; genuinely; trustworthily; ecclesiastically; legally; amazingly; formidably; briefly; momentarily; dangerously; significantly; irreproachably; fatally; ponderously; trenchantly; uncommonly; unexpectedly; surprisingly.

DODDERING

adverbs

tremulously; quaveringly; helplessly; feebly; pleasantly; uncertainly; hopelessly; desperately; decrepity; wanderingly; erratically; confusedly; bewilderedly; pathetically; bravely; prematurely; nervously; besottedly; drunkenly; slowly; wearily.

DOG

adjectives

wistful; spineless; mauled; loutish; shambling; squat; well-shaped; mongrel; tubby; stray; wolf-like; well-bred; barking; marauding; placid; slinking; whipped; cringing; huge; lion-like; cross-grained; savage; vicious; sedate; beaten; avid; yelping; raging; inestimable; alien; clean; rabid; murderous; angry; hungry; handsome; stately; jubilant; worthless; gigantic; lean; gallant; happy; famished; miserable; reliable; frail; little; woolly; deep-chested; disgraceful-looking; couchant; myopic; demented; tawny; treacherous; panting; half-wolf; stripe-tailed; surly; brutal; stranger; accursed; unconscionable; patient; fierce; snapping; chivalrous; jovial; vagrant; atheistical; thievish-looking; voiceless; lame; sneaking; sad; craven; traitorous; thirsty; bipedal; gentlemanly; elderly; mangy; hellish; lounging.

verbs

cast to—s; coax—; crop—; cudgel—; lash—; soothe—; stone—; unleash—; whip—; —barks; —bays; —clambers; —crouches; —darts by; —dashes by; —depredates; —frisks; —gnaws; —grows; —herds; —howls; —invades; —laps; —licks; —limps; —lurks; —menaces; —performs; —points; —preys; —pursues; —retrieves; —skulks;

—slinks off; —snaps; —snarls; —strays; —tears; —trots away; —whimpers; —whines; —wrangles; —yelps; —yowls.
(See animal, puppy.)

DOGGED

adverbs

stubbornly; obstinately; boundlessly; excessively; resolutely; sullenly; morosely; pertinaciously; glumly; silently; irresistibly; obdurately; implacably; inveterately; bravely; heroically; endlessly; surprisingly; unexpectedly; mulishly; perversely; blindly; intractably; fanatically; wilfully; intrepidly; enterprisingly; fiercely; churlishly; grouchily; moodily; crustily; grumpishly.

DOGMA

adjectives

wide-rooted; delicate; dangerous; religious; deflating; dour; theological; pungent; narrow; entrenched; intolerant; pure; sheer; rash; inscrutable; fundamental; negative; sweeping.

verbs

abandon—; assert—; defend—; expound—; follow—; formulate—; impose—; inherit—; justify—; preach—; proclaim—; propound—; put forward—; question—; sanction—; save—; state—; teach—; —convince; —denounce; —flourishes; —satisfies; —vanishes.

(See doctrine, principle.)

DOGMATIC

adverbs

unwarrantably; disagreeably; confidently; marvelously; unaccountably; egotistically; cruelly; harshly; severely; conceitedly; bumpiously; ecclesiastically; tyrannically; officially; inexorably; stiffly; dangerously; dourly; narrowly; fundamentally; purely; utterly; singularly; austere; arrogantly; proudly; unyieldingly; solidly; absolutely; definitely; positively; fanatically; superficially; intolerantly; provincially; remarkably; fussily; peremptorily; emphatically; solemnly.

DOINGS

adjectives

hot-headed; habitual; subsequent; infinite; valiant; ill; sinister; factual.

DOLE

verbs

apply for—; apportion—; approve of—; deprive of—; dispense—; distribute—; di-

(“The Word Finder” から)

2. **chiche**, n. m. (lat. *cicer*, pois chiche). [Bot.]. Nom anc. du pois. = Adj. *Pois chiche*.

chichement, adv. D'une manière chiche.

CTR. — Copieusement, largement.

* **chichi**, n. m. (onomat.) Touffe de cheveux postiches. || Petite ruche en ruban. || Pop. Démonstrations affectées de sentiments. — Manières, embarras, grands airs. *Faire des chichis*.

* **chicon**, n. m. (de *chicor*). Nom vulg. de la laitue romaine.

chicoracées, n. f. pl. [Botan.] Groupe de plantes de la fam. des *composées*, qui a pour type la chicorée.

chicorée, n. f. (ital. *cicorea*, m. s.). [Bot.] Plante potagère, famille des *composées*; ses feuilles sont mangées en salade. || Poudre de racine de chicorée grillée qu'on mêle au café.

chicot, n. m. (de *chique*). Segment d'un tronc d'arbre cassé resté hors de terre. || Fragment de dent cassée (Fam.).

chicotin, n. m. (altération de *socotrin*). Suc amer tiré de la coloquinte, de l'aloès. *Amer comme chicotin*.

chien, n. m., **chienne**, n. f. (lat. *canis*, m. s.). Mammifère carnivore digitigrade, espèce domestiquée depuis la plus haute antiquité. *Chien de garde, de chasse*. — *Chien savant*, chien dressé à certains exercices. — Fig. et prov. *C'est le chien de Jean de Nivelle, il s'enfuit quand on l'appelle*, se dit d'un homme qui s'en va quand on le réclame. — *Une vie de chien*, une vie misérable. — *Mourir comme un chien*, mourir sans se repentir de ses fautes ou sans les secours de la religion. — *Qui veut nayer son chien l'accuse de la rage* (MOLIÈRE), tous les prétextes sont bons quand on en veut à quelqu'un. — *Faire le chien couchant*, tâcher de gagner quelqu'un par la bassesse et la flatterie. — *Garder à quelqu'un un chien de sa chienne*, lui garder rancune, projeter une vengeance. — *Se regarder en chiens de faience*, se regarder de travers. — Fig. et fam. *Entre chien et loup*, au crépuscule, quand on a peine à reconnaître les objets.

Fig. et fam., se dit des personnes et des choses, pour marquer son mépris ou son mécontentement. *Il fait un temps de chien! Quelle chienne de vie! Un métier de chien.* || *Coiffure à la chien*, frange de cheveux descendant sur le front, jusqu'aux sourcils. || *N'être pas bon à jeter aux chiens*, être absolument sans mérite. || *Recevoir comme un chien dans un jeu de quilles*, faire très mauvais accueil. || *Rompres les chiens*, propr., les détourner de la piste; fig., rompre une conversation embarrassante. || *Nom d'un chien!* Interj., juron familier.

[Armur.] Pièce d'un fusil, d'une carabine ou d'un pistolet, qui vient frapper l'amorce pour l'enflammer. Aujourd'hui le chien est remplacé par le percuteur. || Fig. *Se coucher en chien de fusil*, en se recroquevillant. [Astr.] *Le Grand Chien*, le *Petit Chien*, constellations. [Zool.] *Chien de mer*, nom donné à plusieurs espèces de squales de petite taille, tels que la *roussette*.

(“Dictionnaire Quillet de la Langue Française” から)

Partes suggérées par le mot Chien. — Parties du chien : Tête, front, chanfrein, nœud, crocs, truffe, œil, nuque, oreille, garrot, dos, flanc, croupe, queue, fesse, jambe, veine, saphène, fourreau, épauule, carpe, poignet, gorge, poitrine, bras, avant-bras. — Catégories : chiens de garde, de chasse, de berger, d'arrêt, de trait, de luxe, etc. — Principales races : briard, belge, berger, chien-loup, dogue, terre-neuve, basset, Saint-Bernard, bouledogue, terrier, bull-terrier, carlin, lévrier, levrette, griffon, braque, épagneul, pointer, caniche, bichon, King Charles, loulou, pékinois, etc. — ÉTIMITÉS COURANTES : Fidèle, couchant, errant, sauvage, méchant, éragé, hargneux, galeux, savant, fidèle, mignon, etc.

VOCAB. — Famille de mots. — Chien [rad. *chi, can, cagn*] : chienne, chiot; chenil, chenille, chenillette, chenet; chien-dent; cheniller, chenilloir, chenillage; canin, canine; canicule, caniculaire; canaille, canaillerie, s'encanailler; cagne, cagneux, cagnard, s'acagnarder.

chiendent, n. m. (pour *dent de chien*). [Bot.] Nom vulg. de graminées, mauvaises herbes à racines rampantes, très difficiles à extirper. || Fig. et fam. *Voilà le chiendent*, voilà la difficulté, le point difficile.

chienlit [*chi-an-li*], n. m. Pop. Masque en temps de carnaval.

* **chienner**, v. intr. Mettre bas, en parlant d'une chienne.

chier, v. intr. (lat. *cacare*, m. s.). Se décharger le ventre des excréments (Bas).

chiffe, n. f. (anc. fr. *chipe*, chiffon). Étoffe faible et mauvaise. || Fig. et fam. *Mou comme une chiffe*, faible, sans énergie. || Homme mou.

chiffon, n. m. Morceau de vieux linge, de vieille étoffe. || *Chiffon de papier*, morceau de papier froissé et sali. — Pl. Ajustements de femme (Souvent péjor.). — Adj. *Mine chiffonne*, mine rechignée, contrariée.

* **chiffonnage**, n. m. Action de chiffonner.

* **chiffonné**, ée, adj. Froissé. *Une robe chiffonnée*. || *Figure chiffonnée*, figure agréable mais peu régulière.

chiffonner, v. tr. Froisser. || Fig. et fam. Contrarier, chagriner. = V. intr. S'occuper des ajustements de la toilette féminine.

chiffonnier, ière, n. Celui, celle qui ramasse les chiffons, les vieux papiers, la ferraille, ou qui en fait le commerce. = N. m. Petit meuble à tiroirs.

* **chiffirable**, adj. Qui peut être chiffuré, calculé.

chiffrage, n. m. Action de chiffurer. || Action de fixer un chiffre, d'évaluer.

chiffre, n. m. (ar. *sifr*, numéro). Caractère servant à écrire les nombres. *Chiffres romains, chiffres arabes*. || Se dit quelquefois pour la somme totale, le total. *J'ai réduit le chiffre de mes dépenses*. — *Chiffre d'affaires*, évaluation de l'ensemble des affaires que fait une maison de commerce.

Initiales entrelacées d'une ou de deux personnes. *Broder son chiffre*.

- [問223] 手許にある辞書で「アガル」と「ノボル」の項を調べ、語義説明を比べてみよ。
- [問224] 「ツメタイ」の語義がどのように説明されているか、数種の辞書で調べてみよ。
- [問225] 「皮」と「肌」と「皮膚」の意味用法の違いを、辞書によって調べよ。
- [問226] ある国語辞書で「いく」を引くと、「[行く]（自五）『ゆく』の口語での形。」と記されていた。外国人初学者が利用すると仮定して、この記述について論評せよ。
- [問227] 「天」と「空(そら)」が辞書においてどう説明されているか、比べてみよ。
- [問228] ある英和辞典で‘boy’を引くと「男の子」と訳されていた。この訳語の適・不適、過不足について考えてみよ。
- [問229] 英和辞典で‘young’を引くと「若い」と訳されていて、例の中に‘a young child’が挙げられていた。訳語「若い」だけで十分であるか、検討せよ。
- [問230] ある小型の日漢辞典に「質量」の中国語訳が「量」と記載されていた。これについて論評せよ。
- [問231] ある中日辞典の「zǎocān 早餐」の項に「あさめし」という語訳が記されている。この訳語の位相について意見を述べよ。
- [問232] ある和英辞典には「おん(音)」も「おと」も見出し語に立てられていないのに「ね(音)」だけが立項されている。この辞書の見出し語が問題になるとすればどんな点か、簡潔に述べよ。
- [問233] 逆引き辞典には、どんな歴史があるか、またどんな利用法があるか。日本語、英語、中国語などのそれぞれについて考えてみよ。
- [問234] 「つゆ(梅雨)」を‘the rainy season’と訳すことが多いが、これで十分だろうか。各自、辞書をつくるつもりで、記述を考えてみよ。
- [問235] ‘wind’の訳語を「風」1語にしている辞書がある。これについて意

見を述べよ。

〔問236〕 絵入り辞典や図解辞典の長所と短所について考えよ。

11 対照語彙論

日本語の研究・教育を進めるためには、どうしても外国語との対照研究を行う必要がある。日本語に見られる普遍的性格や特殊な性格は、外国語との対比によって明らかにされるものである。本書も、濃淡の差はあっても、これまでの各章各節において、日本語と外国語の対比に触れてきた。客観的に日本語を観察するためには避けられない方法であろう。

とは言っても、言語の対照的研究を科学的に推進することは容易なことではない。ここでは、語彙の対照について4レベルに分けて概観し、問題提起としよう。

11-1 個々の単語の対照

“The Concise Oxford Dictionary”の‘cherry’の項の冒頭には、‘Small stone-fruit’という説明が出ており、“Longman Lexicon of Contemporary English”で‘cherry’を求めると、やはり‘kinds of fruits’に分類されていて、「サクランボ」の絵に‘cherries’と‘stone’という語が付されているだけである。日本語の「さくら」とはずいぶん趣が違ふ。『岩波中国語辞典』には「yīng 櫻」は立項されていないが、「yīngtáo 櫻桃」には「さくらんぼ」という訳語が付けられている。4点の国語辞書で「さくら(桜)」の項を調べたところ、すべてが樹木・花・木材として説明していて、実に触れているものはなかった。これは「サクランボ」という別語が存在しているから当然のことかもしれない。このように、単語同士のあいだで、日本語と外国語のズレ・不一致・意味の広狭の差などが存在することが多い。意味体系とも関わるが、動詞や形容詞においてはほとんどすべての語に問題があると考えた方がよいかもしれない。「つめたい」と‘cold’や‘chilly’、「lěng 冷」や「liáng 凉」は簡単には対応しないのである。

とくに重要なことは、基本語彙の個々について、語義・語構成・連合関係

・共起語・語感などにわたって、対応（または部分的に対応）する外国語の単語と対照することである。「やま」と‘mountain’と「shān 山」, 「あたま」と‘head’と「tóu 頭」はどのような違いがあるのか分析しておく必要がある。日本語の「が(蛾)」は、英語の‘moth’, 中国語の「éz 蛾子」である。「ちょう(ちょ) 蝶(々)」は‘butterfly’, 「húdié 蝴蝶」である。しかし、フランス語ではどちらも‘papillon’である。もし、「が」のみを限定的に指示しようとするれば‘papillon de nuit’（分析的には「夜の～」）といわなければならない。日本人のいう「夜の蝶」とは違うわけである。このように、語義や単純語か複合語かというようなことも、発想法や生活・文化と関わる側面をもっているが、語レベルの対照の基本事項である。

11—2 語彙体系の対照

すでに上巻において見たように、日本語の親族呼称や指示詞や音象徴語には、体系性が存する。「兄弟姉妹」の呼び方については、言語によって同性に対する呼び方が異性に対する呼び方を分けるものとしからざるもの、長幼の別を第1次の区分にするものと、性別を第1次の区分にするもの、畳語形をとるものとしからざるもの等々のいちじるしい違いがある。いわゆる指示詞の系列の中で、コソアという3分法をもつ日本語を軸にして考えてみると、スペイン語は3、英中は2、フランス語は通常区分をほとんどしないから1（1次語は‘ce’だけ）というようになって、数的形式的に見ても、教育上問題になることがわかるであろう。これらは、基本的で、本来体系的な語彙成分であるから、対照的考察がどれほど肝要かをいまさら論ずる必要はないであろう。

11—3 語彙構造の対照

語彙構造というのは、語彙の品詞別分布、語種別比率、層別カバー率、擬態語率など、諸種の語彙徴標によって1言語の語彙の構造を明らかにするための概念である。

例えば、日本語には音象徴語が多い。多分朝鮮語などを除けば、英独仏中などの諸言語におけるよりも、はるかに日本語の音象徴語は多いだろう。つまり日本語は音象徴語率が大きい言語である。また、日本語はフランス語よりも外来語率の大きい言語でもある。日本語は形容詞が少ない言語のように見受けられる。連体詞や形容動詞を含めても、英独仏中の言語における形容語率より、日本語の形容語率は小さい。しかも、その豊富でない形容語の中で漸増していく意味分野がある。(参照 玉村文郎「形容語の世界」(『日本語学』1985年3月号))

層別カバー率のような研究はただちに語彙教育の基本事項として、実践的課題に応用される。また、音象徴語率も、中級・上級に関わる事項であろう。抽象名詞をあまり用いず、音象徴語や敬語表現などが頻用される日本語を、描象的表現志向の強いフランス語話者に教えるとき、どのような配慮が必要となるだろうか。「助教詞」‘counter suffix’の教え方は、東南アジアと欧米と同一でよいのか。このような見とおしを立てるときに、総合的な語彙構造をとらえておくことが大いに役立つであろう。現在進められている「日仏語の基本語彙の対照言語学的研究」(文部省科学研究費による)は、語彙構造の解明に寄与することの期待される研究で、すでに『意味分野別日仏語基本語彙対照表』を作りおえている。いま日本語と各外国語とのあいだで、このような研究の進展が望まれている。

11-4 造語法の対照

日本人は「耳かき」を使い、「つまようじ」を用いる。「耳かき」という語は日本人には「耳+かき」とすぐ分析されるので、むしろ結合契機のある透明な語であろう。しかし「つまようじ」は一般の日本人には不透明な語である。「つまようじ(爪楊子・爪楊枝)」はむかし歯ブラシとして使われた「楊枝」(楊柳の枝で作られた)という語を基にして造られた語で、「こ(小)楊枝」とも言われる。「耳かき」とは完全に異なる形成過程をもつ語である。いちごなどの小さい食べ物を突き刺すときにも用いるが、歯のあいだにはさ

まった物をとったりするときに使うことが多い。かりに後者の用途のみを考えて、「歯ほじり」とか「歯せせり」という語を造ってみると、「名詞+居体言」の構造になって、(文学的でなく殺風景になるが)「耳かき」との体系的が出てくるであろう。英語では、‘earpick’ と ‘toothpick’, フランス語では、‘cure-oreille(s)’ と ‘cure-dent(s)’, 中国語では、「ěrwar 耳挖儿」「ěr wāsháo 耳挖勺」と「yáqiānr 牙签儿」である。英語とフランス語では、それぞれ共通成分に「耳」,「歯」が添加されていて、体系的である。中国語には共通成分は見られない(一方は動詞「ホル」,他方は名詞「簽」である)が、「耳」と「歯」が用いられているので、日本語の「耳かき」と「つまようじ」よりは透明であり、相互の距離は近いと言える。

日本語の「くつや」は「靴をつくる人」「靴を売る店」の両義があるが、どちらにしても「靴」との関連が明示されている語である。これに対して、フランス語では‘cordonnier(-ère)’ が靴修理者も靴販売人も指す。この語は名詞‘cordon’ から造られた派生語であるが、‘cordon’ そのものは「より糸・紐」を指していて、靴との関係は間接的である。フランス語の靴は普通‘chaussure’ と言われるが、この語と語基を共通にする‘chausseur’ は「高級靴屋」を指し、一般的ではない。この「くつや」の例では、日本語の方が体系的であって、「饅頭屋」「下駄屋」「そば屋」などと同じ構成である。(ただし、「床屋」「写真屋」「八百屋」「郵便屋」「悉皆屋」「よろず屋」「しもた(仕舞)屋」などとは必ずしも同系列を形成しない。)

ユニークな発想や見立てによって造られた語が日本語にも少なくないが、こういう語は語構造の型を破っていることが多く、非体系的なものになっている。腹足綱の動物の名「アメフラン」や、「うみぼうず」「ふじばかま」「ひとで(海星)」などは、どれも種名や類名が成分の中に含まれていないために、外国人のみならず日本人にも、意味の不透明な語である。漢語中心で造られている専門用語・学術用語が体系的が高いのと比べてみると、和語の一般語彙は、全体として体系的が低いと考えられるだろう。

- 〔問237〕日本語の「みず」に相当する英語や中国語やタイ語の単語について、指示範囲などを調べてみよ。
- 〔問238〕日本語の「サービス」と英語の‘service’とはどういう点で違うか。商品購入時のことにしぼって答えよ。
- 〔問239〕日本語の「勉強」と中国語の「miǎnqiǎng 勉強」との異同について調べよ。
- 〔問240〕古代における日本語の「いもうと」と「しょうと(せうと)」の意味について調べ、後世どのように意味が変わったかを考えよ。
- 〔問241〕日本語の「ねぎ」は英語で‘Welsh onion’とか‘green onion’とかいわれる。そして‘onion’は日本語では普通「玉ねぎ」と呼ばれている。1次語・2次語という見方で、上記の事実について説明を施せ。
- 〔問242〕中国語では「伊勢えび」のことを「lóngxiā 龍蝦」というが、この語にはどんな見立てが働いているか。
- 〔問243〕フランス語の‘lunette(s)’「眼鏡」は、天体の月を意味する‘lune’に縮小辞が付いた語である。ここにはどんな見立てが働いているか。
- 〔問244〕「なす(茄子)」は英語でどうか調べて、その語に見られる着想について述べよ。
- 〔問245〕日本語の「指」と英語の‘finger’の意味特徴について調べよ。
- 〔問246〕日本語と中国語の「小心」「批評」「検閲」について、意味の相違の有無を調べよ。
- 〔問247〕中国の人が「新幹線はたいへん快いです」と書いたとき、どんな意味が考えられるか答えよ。
- 〔問248〕日本語には英語やフランス語と比べると形容詞が少ない。そのわけを、実例にあたって考えてみよ。
- 〔問249〕昆虫の「触覚」を英語では‘feeler’ということがある。造語法の観点から両者を比べてみよ。また、英語では別に‘antenna’ということもある。この語について説明せよ。
- 〔問250〕フランス語の複合語の中に‘garde-’を前項とするものがかなりあ

る。それぞれの日本語訳を挙げて、訳語間の系統性について考えてみよ。

[問251] ドイツ語では手袋のことを‘Handschuh’（手+靴）という。この場合の‘Schuh’の語義について考えてみよ。また、‘Hand’と‘Schuh’の結合における連想についても考えてみよ。

[問252] ドイツ語の‘Erde’は「土・大地」の意味で、‘Apfel’は「りんご」の意味である。‘Erd-apfel」という複合語はどんな意味か考えてみよ。

[問253] ドイツ語の‘Baum-kuchen’という複合語の成分の意味を調べ、成分と全体の意味の関係について述べよ。

[問254] ‘Arbeitslosigkeit’というのはドイツ語で「失業状態」を意味する。この語の語構成上の特色について説明せよ。

[問255] 英語・ドイツ語・フランス語・中国語では「虹」をどういっているか調べ、それぞれの語の構成を比べてみよ。

[問256] 日本語と英独仏語の各言語とでは、どちらが派生法が活発か調べてみよ。

[問257] 「ひとびと」のような疊語がインドネシア語には多いといわれる。どんなものがあるか、図書館の辞書で調べてみよ。

[問258] 朝鮮語における音象徴語について図書館の辞書で調べてみよ。

[問259] 日本語の「みち」の意味に中国語の「道」の意味用法がどんな影響を与えたかを調べ、簡単にまとめよ。

[問260] 日本語の「うらおもて」「みぎひだり」と中国語の「表裏」「左右」について調べ、2組の語の構成・意味に違いがあれば、それを指摘せよ。

12 語彙教育—内容と方法—

日本語の語彙の主要な性質については、これまでの章で扱ってきたが、語源の問題、方言語彙の問題などには触れていない。しかし、日本語教育に関わる語彙の問題はほぼ網羅していると考えられる。本章では前章までの内容を踏まえながら、語彙教育について簡単に述べることにする。

12-1 語彙教育の内容

語彙研究の分野としては、通例次のものが考えられている。(参照 宮地裕「日本語語彙教育の特性」文化庁国語シリーズ別冊1『日本語と日本語教育—語彙編—』)

- ① 語の意義(意義関係を含む)
- ② 品詞分類
- ③ 語構成
- ④ 語種
- ⑤ 語の位相
- ⑥ 語彙の量的性質
- ⑦ 語史・語彙史
- ⑧ 辞書(辞書史を含む)

国語教育では、上記項目の③〔ときには④〕までを扱うのがならわしであると宮地裕氏は指摘した上で、外国人に対する日本語語彙教育のもっている特質と考えられる3つの面を指摘された。知識的背景をもった形態論的語彙教育・語義の体系的理解をもとめる教育・対人関係的あるいは言語社会的語彙教育の3つである。外国人はなにほどこか母語に熟達してから日本語学習を始めるのであるから、先ず母語その他既習得言語による干渉が伴うことと、日本語運用の場が多くの場合ゼロにひとしい環境で学習が行われることにより、日本人子弟のように日本語の世界が広くも深くもなく自然に展開されることもないのである。他人の家の柿の木に上っていて、「お前は何をしているのか」と言われたら、一目散に逃げるか、「悪いことをしました」と言ってお詫言のかのどちらかが自然な反応として出てくるのがネイティブの場合であろう。疑問文の形であっても、それは叱責・追及・威嚇の表現であることを子どもらは知っているのである。学校でその意味や対応のしかたを習うこ

ともない。上の例はあまり一般的な場のことではないが、外国人には日本語を使っている生活が皆無か皆無に近いわけであるから、上記のような重点事項が考えられるのである。本書では、上巻において、「語形」「語の数」の章を設け、外国人にとくに必要と考えられる外形的な事項、語彙教育上軽視できない基本語などについても述べた。しかし、言語の外形的な面は結局意味の伝達に関わってしか意義をもたないものであるから、主として下巻において扱った語義の諸項目の研究・教育に他の諸項目が収斂されていかなければならない。また、単語レベルでしか扱わなかった意味の問題も、当然句レベル・文レベルに広げて考察すべきである。

語彙の習得は、母語であっても生涯を通じて展開されるところに特徴がある。音声教育・文法教育・表記教育とこの点において大きな違いがある。しかし、日本語教育として考えた場合、初級レベル・中級レベル・上級レベルで、それぞれ一定の目安が立てられることも、理論的経験的に明らかである。

(1) 初級レベル

語形が相対的に重点となる。実体語（概念語）と機能語（形式語）を反復練習によって定着させる。実体語は、『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所報告 78 秀英出版 1984）などに基づいて発達段階に応じて厳密に選定する必要がある。可視的なものを指示する‘car’から「自動車」を、‘cat’から「ネコ」を教えるのは問題はなかろうが、‘go’から「行く」を教えたり‘give’から「あげる」を教えたりするのは問題が多いので、対訳法も語義や語の機能によって可否が分かれる。初級で教える語は、基本語中の基本語であるから、その選定が重要な課題であるだけでなく、与え方も同時に工夫されねばならない。

(2) 中級レベル

中級になると、語義の教育の密度が大きくなる。語数も一定の数に増やす必要があるが、その際目安になるのは、上巻「5—5 基幹語彙」の項で紹介した語彙であろう。高校生以上の学習者や社会人を対象として考えるならば、徐々に日本語の中の知的生活語彙を教えていかなければならないとおも

う。大学での学習・研究を想定すれば、文系・理系に分かれた専門語彙の教育も開始する必要がある。そういう場合により参考となるのが、上記の国研報告78や『高校教科書の語彙調査(1)(2)』（国立国語研究所報告 76, 81 秀英出版 1983, 1984）である。また、「こと」「わけ」「ところ」「はず」「(て) くる」「(て) いく」「なる」「(て) ある」などの形式語や複合助辞の意味・用法を一層詳細に教える必要もある。類義・反義・包摂・隣接等々の語義関係の教育を徹底して、個々の語を語彙体系の中に据えるような、体系を重視した有機的指導が望まれる。

(3) 上級レベル

語数の増加は無論のことであるが、漢語を中心にした語種の教育、語構成・造語法の教育、語感や語の位相に関する訓練が必要であり、究極的には一般の国語辞典や漢和辞典が活用できるような指導を最終段階では行うべきである。

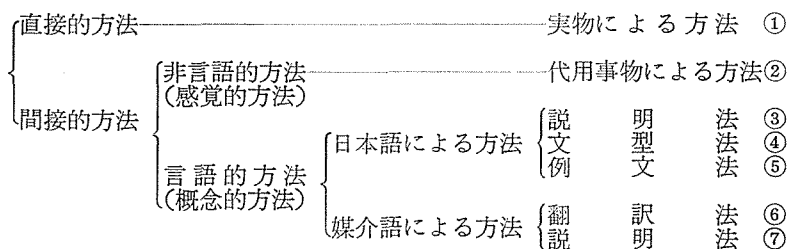
上記において、初中上の各級について格別限定を付けずに意見を述べたが、かりに、初級は単語2,000ぐらい、漢字400字程度、受身・使役・敬語などの表現がわかる程度、中級は単語5,000以上、教育漢字をマスターし、複文構造の文がかなり理解できる程度、上級はそれ以上で大学の講義がある程度理解できて、ノートがとれ、レポートが書ける程度を想定しておきたい。

12—2 語彙教育の方法

音声教育・文法教育・表記教育などと違って、語彙教育はとりたてて行われることがほとんどない。音声教育は入門期において、表記教育は入門期から中級レベルごろまで、文法教育は初中上級の全レベルで（または中級レベルまで）行われるのが普通である。語彙教育は初中上級の全レベルにおいて行われているが、それはたいていの場合意識的なものではなく、また先に挙げたような十分体系的な内容のものでもない。しかし、概括的な言い方をすれば、文法教育はレベルの上昇に比して密度が小さくなり、語彙教育は逆に大きくなると言えるであろう。初級レベルでも語彙教育は明確に行われてい

るのであるが、その場合の重点は最重要基本語彙と機能語彙の教育であって、後者が通例文法教育の範疇に入れられているため、教授者が語彙教育と考えていないだけである。中級後段、あるいは上級のレベルになると専門用語の教育が必至となるため、誰しも語彙をつよく意識するようになる。しかし、先にも触れたとおり多くの場合、語種・造語法・語感等の教育は十全になされていない。だが、語彙教育を科学的に推進するためには、これらを含む体系的な教育を施さないわけにはいかないのである。

いま語義の教育に限って、その方法をメディアから考えてみると、次のようになるだろう。



①は、飲食物の味、触感、においなど、言語によることが困難なものについて、直接体験による語義把握を期するものである。王朝文学にしばしば登場する「しぐれ」について、柳田国男が晩秋の一夜京都に泊まったときに初めてその語感が体得できたようにおもうと述べているのは、語によっては①しか理解の方法がないことを物語っている。とくに感覺的なことがらを指示する場合に①が有効である。しかし、あらゆる語の意味を教えるのに実物をもってするということは不可能である。抽象名詞の意味を①で教えることはできない。「仕事」「考える」「無い」「すばらしい」「もの」といった語の意味も①ではなかなか教えられない。極小のもの、例えば「バクテリア」とか「中性子」、反対に巨大なもの、例えば「宇宙」「銀河系」などもやはり教えるににくいものであろう。そして、具体的に提示できる物体の名称であっても、教室・教場ですぐにその物体を示すことは、多くの場合容易なことではない。したがって①は理論的にも実際的にもたいへん制約の多い方法であると

言わなければならない。

②は、写真・模型・おもちゃ・地図等々の代用物によって、語義指導を行う方法である。①に伴う多くの制約を解消し、かつ①の直接性のもつ効果を期待するわけで、その点では、半直接的方法とも見られる。しかし、味・においなどはやはり感じさせにくいことに変わりはない。また、事物の模写はやはり模写の限界を超えることができないから、①とは違った間接性のもつ限界があるわけである。

③は、新語を既習日本語を用いて説明する方法で、日本語の教育としてはきわめて高い意義が認められるものである。なによりも日本人教師には採りやすい方法である。そして、自然に学習者は日本語に慣れ、日本語の語感の形成が図れるという積極性が評価されるであろう。しかし、2つの欠点がある。基本語彙の個々を教える入門期には、既習語そのものが少ないので、この③の方法が貫きにくいこと、および日本語での言い換えが必ずしも容易ではないことである。この方法は、中級から上級にかけて採用されると効果の大きい方法である。

④は、既習の文型を活用して、主として共起語との関係で語義の理解を図るものである。したがって、実際上は、当該語を含む多くの例文を作って、文全体の意味把握から語義を悟らせる⑤の方法と重なることが多い。

a クスリ ガ キキダシタ。

b ヒミツ ヲ キキダシタ。

aとbにおいて、「キキダシタ」は共通であるが、aの意味は「効能があらわれ始めた」であり、bの意味は「うまく相手に言わせて聞きとった」である。助詞が違い、自動詞と他動詞の違いということも関係している。ともに、

a' クスリ ガ キク。

b' ヒミツ ヲ キク。

のように、より基本的な構造に還元できるが、bの「キキダシタ」は「複合語的」で、両者の「キキダシタ」は意味構造上同一視できない。さらに、「クス

リ」と「ヒミツ」という名詞の意味が全文の理解に関与していることも明らかである。文型法は、主として直接文法事項の教育をする代わりに文型をマスターさせるもので、本来は文法教育のためのものであるが、語彙教育としても活用できる面が少なくない。

⑤は、上記 a の例の場合であれば、

マスイ ガ ～， チュウジャ ガ ～

のように「キキダシタ」の句例・文例をいくつか与えて、意味を教える方法である。動詞、形容詞のほか、副詞（とくに陳述副詞）などの指導においては、⑤の方法が効果的である。このような語は他の方法になじまないことが多い。

⑥は外国語教育ではもっとも伝統的で中心的な方法であるが、学習者が幼児である場合と、日本特有事物の名称や日本人特有の感情や感覚を表す形容詞や副詞の語義説明の場合には無力である。結局こういう場合は、次の⑦によるか、そうでなければ①～⑤によることになるであろう。「ふすま（襖）」を、‘sliding screen’ とか ‘sliding door’ とするだけでは不十分であって、もう少し詳しい説明がほしくなるだろう。「ねまき（寝巻き）」を ‘pajamas’, ‘night clothes’, ‘nightgown’, ‘nightdress’ などとするのも、どれも舌足らずな説明（または訳語）である。⑦が⑥に代わり、⑥の欠を補い、時には⑥よりも有効であることが少なくない。

以上、メディアによって分けた 7 種の方法について簡単に説明したが、教育の方法は基本的に固定的なものと考えるべきではなく、学習者の年齢・既習言語（または媒介言語）・教授者の既習言語・学習目的・教授時間数（週当たり時数と延べ時数）・教授場所（日本国内か外国か、都会か農村か、学校か私宅か）・学習者数（クラス制か個人か）・教授科目（会話・読解・作文・漢字など）等々の多くの因子を総合して適切に選び、柔軟に変更すべきものである。同じ、読解の指導においても、同時に複数の方法を臨機応変に採用していくべきである。上記 7 種以外にも、多くの先人が考案し開発した方法がある。それらをよく吟味し、学習の段階・内容・項目に応じて、自分

の学生生徒に毎時間もっともふさわしい方法を探らなければならない。方法そのものはむしろ上記の因子が決定するものであるというのが筆者の考えである。方法がひとり歩きすることは避けなければいけないだろう。

語彙教育は、本章の冒頭に述べたごとく、上級レベルを除けば、あまり意識的に行われていず、それだけ非体系的になっている可能性が大きい。いずれのレベルを問わず、語彙の与え方に系統性・科学性を貫くように努力する必要があるだろう。①②が低年齢層対象、入門期向きであり、⑥が各レベルを通じての基本方法であるという点は動かないであろうが、学習段階に即応して、⑦を採り入れ、③④⑤を採り入れるというふうに、総合的視点を堅持することが教授者になによりも望まれることである。

〔問261〕 次の語の望ましい提出順序を番号で示せ。

ア 物 イ 祭り ウ 川 エ 彼岸

〔問262〕 次の語のうち、低年齢層用語と考えるものを抜き出せ。

理想 おもちゃ おやつ あこがれ 財界 いたい レポート 砂場
学割 注意 ボール クレヨン 肌身 かおり ママ

〔問263〕 次の語のうち、小学生が使いそうでない語はどれか。

宿題 ピアノ デノミ 勘考 オーロラ かたびら（帷子） ひま
曾孫 ばね 飛沫 かみなり 注進 成績 普譜 定見 頼り

〔問264〕 次の語についてはどんな教え方が適当か答えよ。

城 大仏 船 かまきり 鏡餅 悲しい 考える 心 くやしい 離婚
仮名 反応

〔問265〕 次の日本語に対する英語の訳（または説明）は妥当かどうか答えよ。

燈籠 ‘hanging lantern’

花見 ‘flower-viewing’

節分 ‘parting of the seasons’

思わせぶり ‘mystification’

霞 ‘haze’

自家用車 ‘my car’

〔問266〕 「安い」と「安っぽい」の違いを教えるには、どんな方法がよいか考えてみよ。

〔問267〕 「うろつく」、「よろめく」の「語根」や「接尾辞」について教えるには、どんな方法が効果的であるか、またその際指導の参考になる辞書にはどんなものがあるか答えよ。

〔問268〕 副詞「ようよう」「ようやく」「やっと」はどのように違うか。その違いを発見させるにはどんな方法がよいか。

〔問269〕 本文に挙げたもの以外に、①の実物による方法が困難な語を挙げよ。

〔問270〕 次のような擬態語群の意味を教えるとしたら、どんな分類が効果的だろうか。

てくてく きょろきょろ がつがつ ぱちくり むしゃむしゃ
べろり すたすた じろじろ とぼとぼ

〔問271〕 次のような語の教え方には、どんな方法が考えられるか。

錆びる 扱う 照る 終わる うるさい しらじらしい
おっとり

〔問272〕 英語の ‘corner’ は日本語ではどのように訳されるか、辞書を調べて、教授時に必要な配慮について述べよ。

〔問273〕 ⑥の翻訳法しか採れないと考えられる語義をもつ語を3語挙げよ。

〔問274〕 反義語を同時に教えるのが効果的と考えられる語類はなにか、例を5語挙げて説明せよ。

〔問275〕 語構成の教育が有効な例と、それだけでは十分でない例を、各3語挙げよ。

〔問276〕 「手につかない」「手をくだす」のような慣用句は、成分の意味よりも全体の意味をおさえることが肝要である。このような慣用句の教え方としては、どういう方法がよいか考えてみよ。

〔問277〕 「天(てん)・地(ち)・人(じん)」や「東(とう)・西(ざい)・

南（なん）・北（ぼく）」のように 3 個以上の成分で出来ていて、一括して教えるべき表現がある。このようなセットを、別に 3 組挙げよ。

総合問題 ①

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

花冷えだ、菜たね梅雨だといいながらも、〔A〕がくれば、木々の新芽は
いっせいに芽ぶいて、きのうまで灰色に見えていた枝々の先を、翡翠の玉を
連ねたような〔B〕の小花で飾りたてる。

家の狭い庭でも、西の窓からみるえごの木注1の、冴えた緑を皮切りに、もみ
じ、えのきと、つぎつぎに萌黄注1の新芽をアのぞかせるなかに、それまでは気も
つかなかった、〔C〕と伸びた細い枝の先々に、炎の形そのままの、親指の
爪ほどの緑を萌えさせたせて、今こそとばかりに己イの存在を主張しているのも
ある。

そして最後に、東の窓すれすれに身をよせているそろの木が、枝先を薄緑
の雲ウのような新芽でいろどるところには、この庭で実生注2のまま大きくなった雑
木たちが、それぞれに若葉の装エいを競いあって、賑々しく春の踊りを舞い始
める。

その華カやぎは、〔D〕木々に宿る精霊たちの、いのちの祭典とも呼ぶに
ふさわしく、見上げるこずえの冴えた緑の葉かげからは、あやしい音がさや
さやと響きわたって、美しい調べでも奏オでているような気がしてくる。

注1 えごの木 落葉小喬木の一。高さ約3メートル、樹皮は赭褐色、葉は卵形鋭頭、花は白色、種子から油を採る。日本・中国・朝鮮にひろく分布する。ロクロギ、チシャノキとも。

注2 そろの木 アカンデ（赤四手）の別名。カバノキ科の落葉喬木。山地に自生し、高さ約15メートル。若葉は先が赤い。材は櫛などに使い、椎茸を作るほだぎ（櫛木）に用いる。見風乾。四手の木。

問1 下線~~~~ア～オの部分の読み方を、ひらがなで示しなさい。

問2 下線——a～cの語の意味を書きなさい。

問3 空欄〔 〕A～Dの中に入るべき語を、それぞれの指示に従って、挙げなさい。（例）和語重複形名詞 山々

A 「シーズン」という意味をもつ語、B 和語色彩名詞、

C 擬態語副詞、D 陳述副詞

問4 下線…… 1～5の部分、類義の他の語句に書きかえなさい。

(例) 調べ 曲、またはメロディー など

問5 本文中の漢語を5語選んで、カタカナで書きなさい。

問6 本文中の居体言(注、動詞連用形から転成した名詞)を3語挙げなさい。

問7 本文中の動詞で、居体言としても用いることのできるものを5語、居体言のかたちで挙げなさい。

問8 次に挙げた語群は漢字の読み方から、2分できる。6語を甲・乙2群に分けて、その番号を書き、必要な呼称(術語)を書きなさい。

(1)新芽 (2)実生 (3)手本 (4)番組 (5)野宿 (6)雑木

問9 本文中の「梅雨」のような熟字訓の例を2つ挙げなさい。

問10 「雑木たち」は、日本語としてはやや不自然な言い方であるが、なぜ「たち」を使ったのか、筆者の心情を考えながら答えなさい。

問11 本文の中には、「連濁」を起こしている複合語が多いが、「葉かげ」と「さやさや」は連濁を起こしていない。それぞれの理由を書きなさい。

問12 例にならって、次の語の構成について説明しなさい。

(例) きのこ 木+の+子

(1) 芽ぶく (2) こずえ

問13 この文章の特徴をかたちづくっている語彙上の特色を指摘しなさい。

総合問題 ①

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

庭の梅はまだつぼみが固い。去年の元日には一、二〔①〕ちらほらと咲いたが、今年は自然界も人界も寒波がきびしいせいかも知れない。老梅の青枝がすすくすと伸びて、ぎっちりつぼみをつけている。南枝のつぼみはやや牛乳色にふくらんでいるが、北面のつぼみはまだ青々として寒さに堪えている。十二分に咲いてしまえば仁王様の紙つぶてみたいで何の奇もないが、梅は花ひらくまでのストイックな風情がよい。「梅折りて僧帰るかたは雪深し」で雪にも霜にも木枯らしにもじっと耐えて清く堅くおのれを持している。寒気を冒して百花にさきがけて咲けば、キヒンのある花容に清香を放って春の和気を誘うかにみえる。

梅にくらべると桜は浮気である。四囲の寒暖にだまされて季節をわきまえず〔②〕咲き、〔③〕と咲いたかと思うと風に身を委せて〔④〕と散って花吹雪と乱れる。その色気は愛すべきだが、風雪を凌いで咲く寒梅の頼もしさはない。

新春の光を浴びてつやつやしいのは松と竹である。松は百木の長として長者の風姿を誇るが、竹もまた面白いオモムキがある。竹に雪が降り積もると、初めのほどは身揺るぎして払いのけているが、大雪に見舞われると竹はもはや悪あがきしないでじっと地に伏している。カンジャクを起こしたり絶望したりして〔⑤〕と折れることはめったにない。やがて陽が照って雪が解け、風が吹いてバサリと重荷が落ちると、またピーンとはね返ってすすくと天に向かって直立する。

深雪の中に青々生々カオイロも変えず、竹林は互いに支え合い、根を網と張って地割れもせず、時運の到来を信じて忍耐強く時を待っている。

(朝日新聞「天声人語」S26・1・1)

問1 下線——②④⑩⑪⑫の部分の読み方を平仮名で示しなさい。

問2 下線——⑤⑭⑮の語句の意味を書きなさい。

問3 空欄〔 〕①と⑨の中に入るべき語を、それぞれの指示に従って、書きなさい。

(例) 漢数字を含んだ漢語『百花』

① 助数詞 ⑨ 擬態語

問4 空欄()⑧と⑯の中に入るべき語を、次の語群からそれぞれ1つ選び、その番号を書きなさい。

⑧ 1 狂い 2 乱れ 3 三分 4 誇り

⑯ 1 プツン 2 メリッ 3 チョキン 4 ポキリ

問5 下線——⑥⑬⑰の部分に漢字で書きなさい。

問6 下線——③と⑦を、やさしい和語(固有日本語)に書きかえなさい。

問7 「身揺るぎ」のように、「身(ガ)揺るぐコト」という《主格名詞＋自動詞連用形》の構造をもつ複合名詞になるものを、本文の第3段落(「新春の光を」から「直立する」まで)の中から3語つくりなさい。

問8 次のうち、この文章の語彙上の特色を指摘していると思うものを2つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 新語・流行語の使用を避けている。
- 2 完全な和語中心の文章である。
- 3 話しことばを巧みに活用している。
- 4 外来語や俗語が多い。
- 5 和語と漢語がうまく併用されている。
- 6 接続語の使用が多い。

総合問題 Ⅲ

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「おい」と声をかけたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。5、6足の草鞋が淋しそうに庇から吊されて、屈托氣に(③)と揺れる。下に駄菓子箱の箱が3つばかり並んで、そばに5厘銭と文久銭が散らばっている。

「おい」と又声をかける。ドマの隅に片寄せてある臼の上に、ふくれていた鶏が、驚いて眼をさます。クゝゝ、クゝゝと騒ぎだす。シキイの外に土竈が、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変わる上に、真黒な茶釜が掛けてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸い下は焚きつけてある。

返事がないから、無断ですつと入って、床几の上へ腰をおろした。鶏は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は畳の上へ上がった。障子がしめてなければ、奥まで駆けぬける気かも知れない。雄が太い声で(④)と言うと、雌が細い声でけゝこつこと言う。(⑤)余を狐か狗のように考えているらしい。床几の上に一升枧ほどの煙草盆が閑静に控えて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、すこぶる悠長に燻っている。雨は次第に収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

「(⑥)誰か出るだろうとは思っていた。竈に火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は呑気に燻っている。どうせ出るには極まっている。しかし自分の店を明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてるのも少し20世紀とは受け取れない。こゝらが非人情で面白い。その上出て来た婆さんの顔が気に入った。」

2、3年前宝生の舞台で高砂を見たことがある。その時これはうつくしい活人画だと思った。箒を担いだ爺さんが橋懸りを5、6歩来て、そろりと後ろ

向きになって、婆さんと向い合う。その向い合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔がほとんど真向きに見えたから、あゝうつくしいと⑦思った時に、その表情はぴしゃりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「お婆さん、ここを一寸借りたよ」

「はい、これは、一向(⑩)で」

「大分降ったね」

「生憎なお天気で、さぞお困りでござんしょ。おゝおゝ大分お濡れなさつた。⑩今火を焚いて乾かして上げましょ。」(夏目漱石『草枕』二)

問1 下線——①②⑥⑦⑩の部分の読み方を平仮名で示しなさい。

問2 下線——⑩と⑬の語句の意味を書きなさい。

問3 空欄() ⑫と⑭の中に入るべき語を、それぞれの指示に従って書きなさい。

(例) 擬態語(そろり)

⑫ 副詞 ⑭ 動詞プラス助動詞

問4 空欄() ③⑧⑨の中に入るべき語を、次の語群からそれぞれ1つ選び、その番号を書きなさい。

③ 1 ぶらり 2 ぐらぐら 3 ゆらり 4 ふらりふらり

⑧ 1 ちゅんちゅん 2 があがあ 3 こけっこっこ

4 ぴいちくばあちく

⑨ 1 ちょうど 2 まるで 3 まさか 4 きっと

問5 下線——④と⑤の部分を漢字で書きなさい。

問6 下線——⑪⑮⑰を、平易な語句に書きかえなさい。

問7 下線——⑯の「非人情」と同じように「非」が前置されることばを、次の中から選び、その番号を書きなさい。

1 番 2 用心 3 賛成 4 現業 5 常識

6 案内

問8 下線——㊸の語を、筆者はどういうつもりで使ったか、簡潔に書きなさい。

問9 次のうち、この文章の表現と語彙の特色を指摘していると思うものを2つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 擬声語・擬態語・擬人法がユーモラスな味を強めている。
- 2 外来語や新語が多く用いられている。
- 3 使用語彙は基本的なものばかりである。
- 4 和語を中心にしたやわらか味のある文章である。
- 5 率直で個性的な表現が、描写に活力を与えている。
- 6 固い論説調の文章である。

注1 明治6年および大正5年に制定された補助貨幣。昭和28年廃止。

注2 江戸時代文久3年から使われた銅の四文銭。

注3 能楽五流派の1つで、能楽師の姓。

注4 能舞台の、鏡の間と舞台とをつなぐ橋。向かって左手にある。

総合問題 ⑭

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

戦後の燃料革命で、炭は家庭暖房の座を追われた。炭の用材もかえりみられなくなり、そのせいか山の林相まで変わってしまったようである。

もともと、炭の大きな役割は鑄工業にあった。全国に分布する「炭焼き長者」の民話も鑄物師が広めたといわれるくらいで、いまでも刀鍛冶の熱源として欠かすことができない。

その炭が家庭に入ったのは、室内防寒の大変革だった。火鉢を囲む一家団欒の世紀が続く。火箸で炭火をつぎたす指づかいの細やかさが、恋の発火点になることも(⑧)だった。

まじまじと炭つぐ手元見られつつ
こんな風景は、もう見られなくなった。

炭にはいろんな種類があった。ナラ、クヌギ、カンなどを不完全燃焼させたのが堅炭。たたけばカンカンと金属音が出た。その他の雑木を焼いたのが軟炭。粗悪なのがはじけて、顔にやけどする人も多かった。

古来チンチュウされた白炭は堅炭の一種。石がまで焼き上げ、かまの外にとり出して消し粉で消すと、表面に薄い灰のソウができて白く見える。その最良のものが備長炭だった。

茶の湯の炭にも白炭が好まれ、小枝に石灰を塗って焼く枝炭が多い。最近では、焼き上げてから胡粉や石灰で白く化粧したのがふえた。大みそかの除夜釜のあと、残り火を灰に埋め、元日の朝掘り出して下火にする。これが埋火。

粉炭をまるめた炭団。石炭やコークスの粉に粉炭を混ぜた煉炭、豆炭。それに消炭、炭取り。いずれも死語になりつつあるのがさびしい。

問1 下線——②③④⑤の部分の読み方を平仮名で示しなさい。

問2 例にならって、下線——①と⑨の動詞の終止形を書き、その意味を書

きなさい。

(例)

	終止形	意 味
焼 い	焼 く	火をつけて燃やす。 灰にする。

問3 空欄()⑧の中に入るべき語を、次の指示に従って書きなさい。

(例) 動詞連用形《焼い》

「和語畳語副詞」

問4 下線——⑬と⑭の部分で漢字で書きなさい。

問5 下線——⑤の「防寒」と同じように、「防」が前置される漢字を、次の中から選び、その番号を書きなさい。

(1) 險 (2) 臭 (3) 虫 (4) 体 (5) 水 (6) 温

問6 下線——⑥の「指づかい」は「指ヲつかうこと」という意味の複合名詞で、「名詞＋ヲ＋動詞連用形」の構成である。本文の最後の段落の中に、これと同じ構成の語があれば、それを書き出しなさい。

問7 下線——⑦の語の構造を、次の例にならって示しなさい。

(形容詞語幹) (接尾辞)

(例) あたたかみ＝ あたたか ＋ み

問8 下線——⑨と⑩の「られ」は同じか違うか。理由を付して答えなさい。

問9 下線——⑩を類義の別語に書きかえなさい。

問10 次のうち、この文章の表現と語彙の特色を指摘していると思うものを2つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 伝統的な和語をふんだんに使った典雅な文章である。
- 2 使用語のなかには特殊なものがあり、わかりにくくなっている。
- 3 外来語や新語はほとんど使用されていない。
- 4 擬人法や比喩が多く、文章に生彩を与えている。
- 5 接続語を多用した長文が多く、文章を難解にしている。
- 6 複合語をたくさん使った、硬い論説調の文章である。

参 考 文 献

- 岩淵悦太郎他編『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』 1957 筑摩書房
見坊豪紀・芳賀綏『日本の語い』（中学生国語全書③） 1958 岩崎書店
藤原與一『日本人の造語法—地方語・民間語—』 1961 明治書院
金田一春彦『日本語の生理と心理』 1962 至文堂
" 『日本人の言語表現』 1975 講談社
楳垣実『日英比較語学入門』 1961 大修館書店
大石初太郎他『ことばの昭和史』 1978 朝日新聞社
岩淵悦太郎他編『新・日本語講座① 現代日本語の単語と文字』 1975 汐文社
森岡健二他編『講座日本語学 4 語彙史』 1982 明治書院
大野晋他編『岩波講座日本語 9 語彙と意味』 1977 岩波書店
野村雅昭編『講座日本語の表現② 日本語の働き』 1984 筑摩書房
佐藤喜代治編『講座日本語の語彙① 語彙原論』 1982 明治書院
" 『講座日本語の語彙⑦ 現代の語彙』 1982 明治書院
池上嘉彦『意味の世界』 1978 日本放送協会
" 『意味構造の分析と記述 意味論』 1975 大修館書店
ウルマン、山口秀夫訳『意味論』 1964 紀伊国屋書店
教科研東京国語部会他『語彙教育 その内容と方法』 1964 麦書房
安達隆一他『語い指導の系統と方法』 1973 明治図書
宮島達夫『単語指導ノート』 1968 麦書房
平井昌夫『語い指導 その原理と方法』 1965 明治図書
宮島達夫『講座 現代の用字・用語教育 2 単語教育』 1957 春秋社
教科研東京国語部会他『にっぽんご 6 語い』 1977 麦書房
日本放送協会編『ことばの生い立ち』 1956 講談社
阪倉篤義『語構成の研究』 1966 角川書店
" 『日本語の語源』 1978 講談社
浅野百合子『語彙 教師用日本語教育ハンドブック⑤』 1981 国際交流基金
池上禎造『漢語研究の構想』 1984 岩波書店
徳川宗賢・宮島達夫『類義語辞典』 1972 東京堂出版
国立国語研究所『類義語の研究』 1965 秀英出版
志田義秀・佐伯常磨編『日本類語大辞典』 1909 晴光館
浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川小辞典⑫ 1978 角川書店
天沼寧『擬音語・擬態語辞典』 1974 東京堂出版
藤田孝他『和英擬音語擬態語翻訳辞典』 1984 金星堂

- 白石大二編『国語慣用句大辞典』 1977 東京堂出版
- 三戸雄一他『日英対照：擬声語（オノマトペ）辞典』 1981 学書房出版
- 宮地裕編『慣用句の意味と用法』 1982 明治書院
- 佐伯梅友編『対照関連 反対語辞典』 1963 集英社
- 塩田紀和・中村一男『反対語辞典』 1957 東京堂
- 熊谷忠三郎『疊語の研究』 1973 創文社
- 石野博史『現代外来語考』 1983 大修館書店
- 石綿敏雄『日本語のなかの外国語』 1985 岩波書店
- 国広哲弥『意味の諸相』（E L E C言語叢書） 1970 三省堂
- ” 『意味論の方法』 1982 大修館書店
- 渡辺友左『隠語の世界』 1981 南雲堂
- 中村明『比喩表現辞典』角川小辞典⑩ 1977 角川書店
- 宮地敦子『対義語の条件』（『国語国文』39-7） 1970 中央図書
- 島正三『発想法の研究』 1960 文化書房
- 作田啓一・多田道太郎『動詞人間学』 1975 講談社
- 見坊豪紀『辞書をつくる』 1976 玉川大学出版部
- ” 『辞書と日本語』 1977 玉川大学出版部
- 山田忠雄『近代国語辞書の歩み』 1981 三省堂
- 樺島忠夫他編『事典 日本の文字』 1985 大修館書店
- 大塚高信『英単語の知識』 1962 垂水書房
- 田中菊雄『英単語の研究』 1957 白水社
- 上野景福『語形成』英文法シリーズ25 1955 研究社
- ” 『英語語彙の研究』 1980 研究社出版
- Valerie Adams: *An Introduction to Modern English Word-formation*
1973 Longman
- アダムズ著・杉浦茂夫他訳『現代英語の単語形成論』 1978 こびあん書房
- 柴田省三『英語学大系7 語彙論』 1975 大修館書店
- J.E. Sheard: *The Word We Use* 1954 Andre Deutsch Ltd.
- シアード著・大沢銀作訳『英語の語彙の研究』 1980 博文社
- F. J. クディラ・羽鳥博愛『英語発想辞典』 1984 朝日出版社
- 三戸雄一『日英両語表現法比較研究』 1966 神戸商大経済研究所
- 長谷川潔『日本語と英語—その発想と表現』 1974 サイマル出版会
- Paul Bacquet: *LE VOCABULAIRE ANGLAIS (QUE SAIS-JE? N° 1570)*
1974 Presses Universitaires de France
- バケ著・森本英夫訳『英語の語彙』 1976 白水社

- 朝尾幸次郎『語彙・表現』（英語の演習〔3〕） 1985 大修館書店
- 長嶋善郎『語形成の比較』（『日英比較講座1 音声と形態』） 1980 大修館書店
- 今里智晃他『英語の辞書と語源』（スタンダード英語講座④） 1984 大修館書店
- 宮内秀雄『英単語のこころ』 1959 大修館書店
- 郡司利男『英語学習逆引き辞典』 1967 開文社
- 増田貢『英語形態論』 1978 篠崎書林
- 影山太郎『日英比較 語彙の構造』 1980 松柏社
- 井上義昌『英米風物資料辞典』 1971 開拓社
- Tom McArthur: *Longman Lexicon of Contemporary English* 1981 Longman
- Magnus Ljung: *A Frequency Dictionary of English Morphemes* 1974 AWE/
Gebers, Stockholm
- J.I. Rodale: *The Word Finder* 1947 Rodale Books
- 塩屋饒『単語の知識』ドイツ語学文庫② 1958 白水社
- 丸山武夫『ドイツ文法小辞典』 1961 研究社
- Paul Grebe: *Grammatik* (Der Grosse Duden ④) 1973 Duden
- Bernd Naumann: *Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache* 1972
Niemeyer
- Wilhelm Schmidt: *Deutsche Sprachkunde* 1959 Volk und Wissen Volkseigener
Verlag
- Walter Henzen: *DEUTSCHE WORTBILDUNG* 1957 Max Niemeyer
- Hans Peter Althaus: *Lexikon der Germanistischen Linguistik* 1980 Max Niemeyer
- Erhard Agricola 他編: *DIE DEUTSCHE SPRACHE I* 1969 Katharina
Zuckschwerdt
- Erich Mater: *Rückläufiges Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache* 1965
VEB Bibliographisches Institut
- Howard H. Keller: *German Root Lexicon* 1973 Univ. of Michigan Press
- 浜崎長寿他『日独語対照研究』 1985 大学書林
- 岸本通夫・堀井令以知編『語と意味』フランス語学文庫② 1956 白水社
- Pierre Guiraud: *Structures étymologiques du lexique français* 1967 Larousse
- Alain Rey: *La Lexicologie* 1970 Klincksieck
- A. Hamon: *Grammaire française* 1966 Hachette
- Johannes Thiele: *Wortbildung der französischen Gegenwartssprache* 1981 VEB
Verlag Enzyklopädie Leipzig
- R.L. Wagner: *LES VOCABULAIRES-DÉFINITIONS · LES DIC-
TIONNAIRES* 1967 Didier

Henri Mitterand: *LES MOTS FRANÇAIS* (QUE SAIS-JE? N° 270) 1968
Presses Universitaires de France

- ミッテラン, 内海利朗他訳『フランス語の語彙』 1974 白水社
梁東汉『汉字的結構及其流變』 1965 上海教育出版社
中国文字改革委员会研究推广处編『普通话三千常用词表』 1959 文字改革出版社
孙常叙『漢語詞彙』 1956 吉林人民出版社
牛島徳次他『中国文化叢書① 言語』 1967 大修館書店
陸志書他『汉语的构词法(修訂本)』 1964 科学出版社
張永言『词汇学簡论』 1982 華中工学院出版社
梁德潤他編『实用汉语图解词典』 1982 外語教学与研究出版社
胡明楊他編『词典学概论』 1982 中国人民大学出版社
佟慧君『常用同素反序词辨析』 1983 湖南人民出版社
吳伯方他『词汇常识』 1978 廣東人民出版社
李行健他『怎样使用词语—汉语词汇学习一』 1975 天津人民出版社
谢文庆『同义词』 1982 湖北人民出版社
金紹志『词汇』 1983 北京語言学院
任学良『汉语造词法』 1981 中国社会科学出版社
华中师范学院中文系現代汉语教研室『現代汉语词汇知识』 1973 湖北人民出版社
徐明『多義詞 反義詞 偏義詞』 1968 香港進修出版社
高文达他『词汇知识』 1980 山東人民出版社
王德春『词汇学研究』 1983 山東教育出版社
卉君編『漢語基本知識』 中学生文庫 1977 商務院書館
武占坤『词汇』 1983 上海教育出版社
傅興吟他編『常用构词字典』 1982 中国人民大学出版社
梅家駒他編『同义词词林』 1983 上海辭書出版社
望月八十吉『中国語と日本語』 1974 光生館
香坂順一『中国語の単語の話』 1983 光生館
岡本夏木他編『連想反応と意味構造』(昭和58年度科研費補助金による) 1984
橋本印刷
Natsuki Okamoto & Miyooki Shimizu: *Javanese and Japanese Children*
—*Comparative Studies on the Psychological Development in Two Cultures*—
(昭和58年度科研費補助金による) 1983 橋本印刷
川本茂雄他『日・仏語の対照言語学的研究 論集』(昭和55~57年度科研費補助金による)
1983 早稲田大学印刷所
野元菊雄他『意味分野別日仏語基本語彙対照表』(昭和59年度科研費補助金による)

- 1985 国立国語研究所日本語教育センター
 大西晴彦「日本語とタイ語における擬音語の比較対照」(国際学友会日本語学校 紀要 No.7) 1982 国際学友会
 G. リーチ, 安藤貞雄監訳『現代意味論』 1977 研究社
 Uriel Weinreich: *Languages in Contact* 1974 Mouton
 U. ワインライヒ, 神鳥武彦訳『言語間の接触』 1976 岩波書店
 小泉保『言語学コース』 1984 大修館書店
 『日本語学』1982年11月号—特集「語の意味」 1982 明治書院
 『言語生活』1975年1月号—特集「連想」 1975 筑摩書房
 村木正武他『意味論』(現代の英文法②) 1978 研究社
 Robert J. Di Pietro: *Language Structures in Contrast* 1971 Newbury House Publishers
 R. J. ディピエトロ, 小池生夫訳『言語の対照研究』 1974 大修館書店
 文化庁『日本語と日本語教育—語彙編—』 1972 大蔵省印刷局
 阪倉篤義編『語彙史』講座国語史3 1971 大修館書店
 森岡健二『近代語の成立—明治期語彙論—』 1969 明治書院
 真下三郎『婦人語の研究』 1948 東亜出版社
 榎垣実編『隠語辞典』 1956 東京堂
 荒川惣兵衛『外来語辞典』 1967 角川書店
 山田俊雄『日本語と辞書』中公新書494 1978 中央公論社
 中平解『郭公のパン』再版 1956 大修館書店
 “ 『フランス語源漫筆(1)(2)』 1958, 1961 大学書林
 渡辺格司『ドイツ語源漫筆(1)(2)』 1954, 1963 大学書林
 田中秀央『西洋古典語源漫筆』 1955 大学書林
 藤堂明保『中国語源漫筆』 1955 大学書林
 松原秀一『ことばの背景—単語から見たフランス文化史—』 1974 白水社
 泉邦寿『フランス語を考える20章』 1978 白水社
 興水優『中国語基本語ノート』 1980 大修館書店
 カールグレン著・大原信一他訳『中国の言語』 1958 江南書院
 柴田武他『ことばの意味—辞書に書いてないこと①②③』 1976, 1979, 1982 平凡社
 森田良行『基礎日本語①②③』 1977, 1980, 1984 角川書店
 文化庁『日本語教授法の諸問題』 1972 大蔵省印刷局
 R. R. K. ハートマン編木村研二他監訳『辞書学』 1984 三省堂
 小島義郎『英語辞書学入門』 1984 三省堂

日本語教育指導参考書 13

語彙の研究と教育(下)

昭和60年8月12日 発行

編集・発行

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14

03(900)3111

印刷者

大蔵省印刷局

東京都港区虎ノ門2-2-4

03(582)4411

落了，乱丁本はおとりかえします。